Collective Housing

石東直子＋
コレクティブ応援団著

コレクティブハウジング
ただいま奮闘中

学芸出版社

はじめに

「いつでも誰かと会えるし、いつでもひとりになれる」
「ひとりで食事をするよりも、たまには大家族のように集まって食べよう！」
という、日常生活の中で自然な形で隣人たちがふれあって暮らせるような住まい方を描いた住宅が、阪神淡路大震災後の被災地で誕生しました。全国初という公営コレクティブハウジング＝協同居住型集合住宅で、「ふれあい住宅」とネーミングされ、１９９７年から９９年の３年間に神戸に７地区、宝塚に１地区、尼崎に２地区、合わせて10地区、341戸が建設されました。

それぞれの住宅は少しコンパクトですが、台所、風呂、便所が備わった独立した住宅で、各住宅の面積を少しづつ出しあってつくられた協同室があります。協同室には厨房コーナー、食堂兼団らん室、和室コーナーなどがあって、自分たちの住宅のつづきとしての共同の居間のような位置づけです。協同室の光熱水道費や清掃などの維持管理は居住者たちがルールを決めておこないます。しかし、新しい住宅（器）を建設しただけでは、協同居住は稼働しません。新しい器にそった住まい方、たとえば、協同室はみんなの居間で、そこではいつでも誰かがおしゃべりを楽しんでいる…というような住まい方を育むための居住サポートが必要です。

１９８０年代から北欧などで誕生した近代的なコレクティブハウジングの住人は、本来なら自分のライフスタイルとして協同居住がしたいという人たちの集まりです。これらのコレクティブハウジングは、育児や食事づくりなど家事の協働化と、集まって暮らす楽しさと安心感をもつ暮らし方を自己のライフ

スタイルとして選択した人たちの住まいとなっています。しかし震災という非常事態を契機に生まれた被災地のコレクティブハウジングのスタートはそうではありません。ふれあい生活のイメージがつかめないで入居した人、新しい住まい方の住宅とは知らずに入居してきた人が大部分です。

わが国の住宅供給は建物を建設するというハード面の供給にとどまり、入居者が安心して快適に住みこなしていくための居住サポートがありません。高齢社会になって高齢者だけの世帯が増え、また老若を問わずひとり暮らし世帯が全世帯の3分の1以上を占めるようになった現在では、大家族時代には家庭内で支えてきたものを隣人や地域で支えていかなければならなくなりました。そのため今までにない多様な住まい方が、官民を問わず模索されています。

本書は、コレクティブハウジングという新しい住まいに戸惑う入居者たちに、器にそった住まい方を育んでいこうよと、お節介の手を差し伸べてきたコレクティブハウジング事業推進応援団（略称＝コレクティブ応援団）の奮闘記です。このお節介をわたしは居住サポート＝ソフトな住宅供給と言っています。

本書を手にとられた方々が、どんな場合にもその器にそった適切な居住サポートが必要だと感じていただけたらと思います。そして、日本の下町生活のように、隣人とふれあって暮らすことの安心感と楽しさを再認識していただけたらと思います。

被災地コレクティブハウジングは平成の下町長屋の再生です!!

◉目次

はじめに　3

序　章　コレクティブ応援団の活動開始　9
多分野の専門家ボランティアによる情熱的サポート

1　章　応急仮設住宅の暗と明　17
一般仮設住宅と地域型仮設住宅
地域型仮設住宅から学ぶ／一般仮設住宅での悲しい死／生きる気力を育んだ「ふれあいセンター」

2　章　第1号神戸市営「真野ふれあい住宅」の取り組み　27
協動の計画づくりと居住サポート

（1）「神戸市コレクティブハウジング研究会」の流れ　28
地域型仮設住宅からの発想／研究会で検討した神戸型コレクティブハウジング

（2）疑似居住者参加の計画づくりワークショップ　33
建設場所はコレクティブが育っていく可能性の高い真野地区に／疑似居住者参加の計画づくり／難産の末のグループ募集制度

(3) 募集要項の検討・出前説明会・応募者像　48
募集要項の検討／仮設住宅を巡っての出前説明会／応募状況

(4) 入居前協同居住の学習・体験ワークショップ／暮らしのこん談会　62
ふれあいの輪が結びはじめた感動の一日／意見書がでた！／夢を語れば語るほど不安がつのる／意見交流によって知り合っていく／コレクティブ生活のイメージが見えはじめた／現実感が増してきた！／うれしい一日！／長く感じた道のり、ありがとう！

(5) みんな笑顔で入居したが…　84
待ちに待った入居の日／節約の訓練をしています／コレクティブを理解しない自治会長が仕切っている／外部からのサポートを受け付けない／全国から見学者が殺到

(6) 2年目の春は新体制で仕切り直し　93
ちょっとしたドラマが展開して／新体制の始まり／落下傘部隊は地域のふれあいの核へと変身

3章　一度に5住宅を事業化した県営コレクティブ
いろんなパターンを試してみましたというが…　103

(1) 兵庫県のコレクティブハウジングの事業方針　104
急ピッチで事業化決定、いろいろなパターンの実験的な試み

(2) 県営第1号の片山ふれあい住宅　106
一回目の募集は応募者なし／新しい住まいの受け入れには醸成期間がいる／仕切りなおしてオープンハウスの実施／居住者選び、そして協同居住のスタート／入居1年を迎える片山ふれあい住宅の日々／入居2年半をへた日々

(3) 大団地の中のコレクティブ／大倉山ふれあい住宅　120
入居前交流会(顔見知りになる集い)／工事中の住宅見学と昼食会ミーティング／協同室の備品希望はさまざま／「別注されたカーテン、いらん言うてはるのですが……」／ここは面白い！　入居後3カ月経った初夏の夕／学生たちも気楽に泊まっていく協同室

(4) 神戸東部新都心のコレクティブ／脇の浜ふれあい住宅　138
入居までに先人に学ぶ／コレクティブ棟だけの独立した自治会になりたい／まぁまぁの生活よ、でも設計上の問題が多いわ！

(5) その他のさまざまなふれあい住宅　146

(6) 設計上の課題――日本的な協同居住とのミスマッチ　150
コレクティブ単位の大きさと建物全体の空間構成／協同スペースに無駄が多く、ランニングコストが高くつく／上下階の行き来はエレベーターだけで、建物内に階段がない／ランニングコストの節約を考えていない設計／上下足の履き替え位置の課題／高齢者世帯だけのコレクティブと多世代共住のコレクティブ

4章　再開発事業受皿住宅でのコレクティブ　167
神戸市長田の下町居住の再生

(1) そんな住宅理想的や、そやけどわたしら5年も待たれへん　169
ほんまに長いことお待たせしました／なぜ受皿住宅にコレクティブハウジングなの？／入居前の協同居住の学習・体験ワークショップ／初めての協働の食事づくりはワイワイガヤガヤ

(2) こんな造りの住宅で、このような住人です　179
路地広場のある下町住宅の再生／達者な下町の高齢者たち

（3） 下町生活の自然体の協同居住が展開しはじめた 185
さっそく共同で新聞を購読／みんなの協働で路地広場が大変身／協同スペースの維持管理費と地域開放／花祭りパーティ

（4） 入居一周年記念と忘年のつどい 194

5章 ふれあい住宅居住者交流会の発足 205
悩んでいるのはウチだけじゃない！
交流会の開催とふれあいネットレターの発行

おわりに 228

◆コレクティブハウジングに求めるもの
豊かに育てる環境づくりを 室崎益輝 26
「人間を幸せにするシステム」への挑戦 林 泰義 102
居住者の生活をサポートする強力な助っ人 鈴木三郎 166
コレクティブ住宅とコミュニティ 上田耕蔵
ツアーの目的地は信頼・協同 安原 秀
被災地から生まれた新しい住まい 坂井 豊

◆応援団の活動を振り返って
復興住宅プランでなく「すまい」復興のプログラムを 小林郁雄 199
応援団の失敗——備品購入の立て替え 天川佳美 202
ふれあい住宅居住者の交流を見守って 吉川健一郎 203

◆解題 実験的プログラムの意味と課題 小谷部育子 224

◆コレクティブハウジング紹介シート 214

Collective Housing

序章

コレクティブ応援団の活動開始

多分野の専門家ボランティアによる情熱的サポート

この人たちは誰が支えていくんやろうか…

震災後1週間程して仮設住宅の申し込みが始まった時、わたしは西宮市役所でボランティアとして申し込み用紙の配布を手伝っていました。用紙を取りに来られる人の多くが背丈が小さくなった、日本の典型的なおじいさん、おばあさんで、問われた人には用紙の書き方を説明しました。入居者欄に書かれる名前は、一人や二人でした。その中の一人のおばあさんが「わたしら地域から離れた仮設に当たっても、こおおてよう住まんわ」と、震災の恐怖がまだ抜けず、おびえた様子でつぶやかれました。その姿や声がわたしの脳裏に焼き付いてしまいました。「何とかせなあかん」「この人たちは誰が支えていくんやろか」と、わたしの母の姿とダブッて強く思いました。これが、わたしをコレクティブハウジングの推進に駆り立てた原点です。

その後、地域を離れて移り住んだ仮設住宅の生活で誰にも見取られずに亡くなるお年寄りや、せっかく生きながらえた貴重な命なのに生きる気力を失って自ら断ち切ってしまう人が出始めました。その後、多くの人が仮設住宅から復興公営住宅に移り住むことになりますが、鉄筋コンクリートの災害公営住宅は仮設住宅よりも、もっと閉鎖性が強く、鉄の扉ひとつ閉めると、外部とは全く孤立してしまいます。ということは仮設住宅で続出している悲劇が、今後も永遠に続くことになるでしょう。同じ悲劇を繰り返さないように、安全で安心して住めるような住宅の供給がどうしても必要です。

そこで思い出したのが、コレクティブハウジングです。震災の2、3年前に小谷部育子さん（日本女子大学教授）にスウェーデンのコレクティブハウジングのスライドを見せてもらったことがありました

図１　市民とNGOの「防災国際フォーラム」に於けるコレクティブハウジング事業推進応援団のパネル展（1995年9月15日）

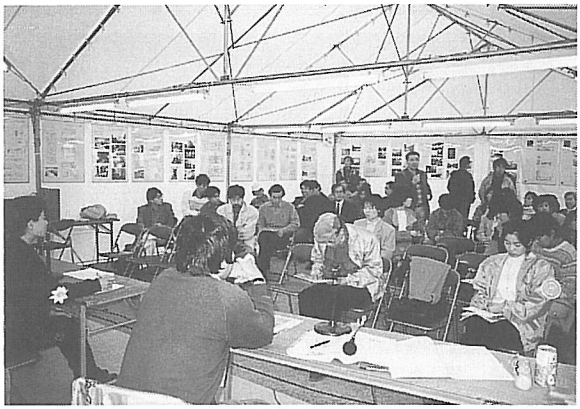


図２「復興まちづくり世界鷹取祭」で、テントの中での公開ミーティングとパネル展（1996年11月23日）

ので、「そうや、コレクティブハウジングがあるやんか！」と、結び付いたのです。まちづくりプランナーの小林郁雄さんに相談して、コレクティブハウジング事業推進応援団を組織することにし、わたしはその年の8月の終わりに、小谷部さんに紹介してもらってスウェーデンのコレクティブハウジングを訪ねました。

コレクティブハウジング事業推進応援団は１９９５年9月に第1回の公開ミーティングを持ち、それから毎月ミーティングを続けました。都市計画プランナーや建築家、医師や福祉関係者、行政人の他にコレクティブハウジングに関心をもつ多分野の人たちが参画して、「コレクティブハウジングとはどんなもん？」ということから、「日本にコレクティブハウジングは成立するのか」「どうしたらコレクティブハウスを自分たちで建てられるのか」等々、百家争鳴のミーティングを続けました。その記録は、「コレクティブハウジングの実現に向けて」という冊子にまとめて発行しました（阪神・淡路ルネサンス基金（ＨＡＲ基金）の活動助

図３　県営コレクティブハウジング・岩屋北町ふれあい住宅での入居直後の協同室の備品購入相談会（地元商店街の方々との顔合わせ）（1998 年 2 月 27 日）

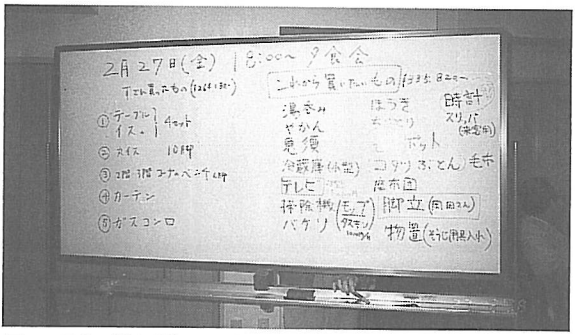


図４　同上、購入希望品の数々

宅に地域型仮設住宅を発展したようなものが必要だと考えられておられました。そこで震災の年の秋に神戸市庁内に「神戸市コレクティブハウジング研究会」が設けられ、小林さんとわたしも呼ばれて参画し、神戸市住宅供給公社、建設省、兵庫県からも参加があって、検討の結果、震災後一年が過ぎて、災害公営住宅にコレクティブハウジングの事業化が公表されました。

コレクティブハウジング事業推進応援団は事業の展開にそって各段階で必要とされるサポートに対して、順次新たな支援活動を展開してきました。その活動展開図を次頁に示しております。

成を受けました）。

話は少し前後しますが、一般仮設住宅に遅れて建設された地域型仮設住宅では、まさにミニコレクティブハウジングのような生活が展開され始めました。とくに芦屋市呉川町のケア付高齢者・障害者向け地域型仮設住宅を訪ねて、そこでの入居者の生き生きした顔に出会い、日々の生活の相互扶助の話を聞き、コレクティブハウジングは被災地でも絶対いけると確信するに至りました。

一方、神戸市職員の鈴木三郎さん（当時住宅局住環境整備課長）も復興公営住

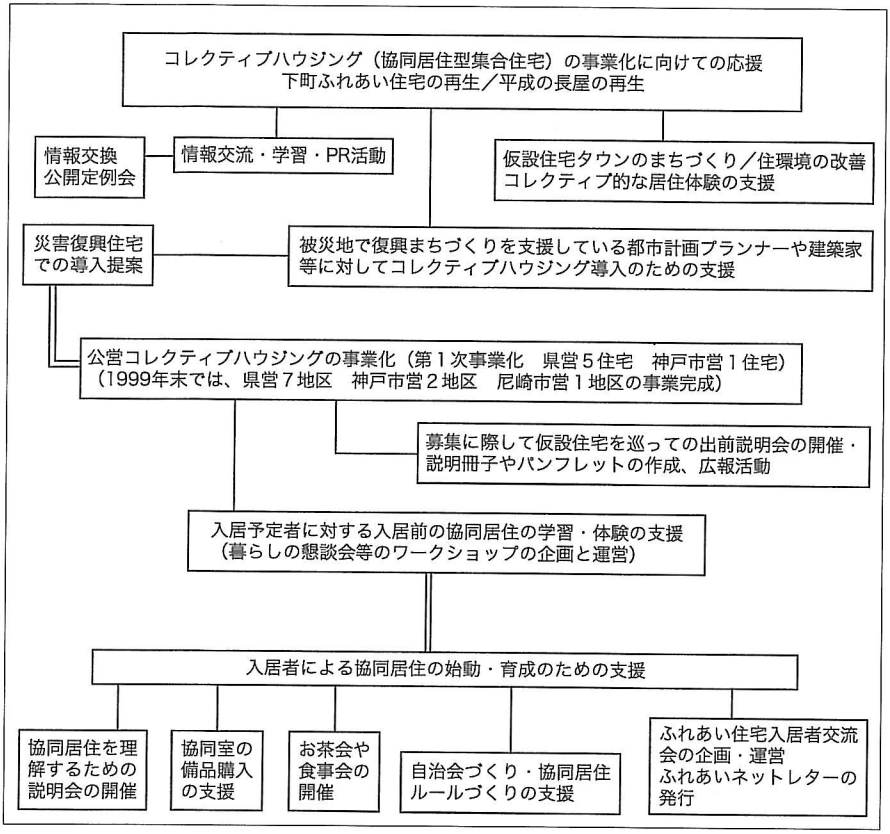


図５　コレクティブハウジング事業推進応援団の活動展開図

これまでの活動内容を大きく分けると、「初期活動」「災害公営住宅事業化決定から入居まで」「入居後の協同居住の始動」の３段階に区分できます。初期活動は、情報交流・学習・ＰＲ活動（定期的な公開ミーティングやパネル展）、災害住宅の事業化のための資料提供と計画策定への参画、仮設住宅の住環境改善等です。事業化決定から入居までの活動は、情報活動、説明冊子・パンフレットづくり、仮設住宅を巡り募集前の出前説明会、入居予定者のための入居前の協同居住の学習等のワークショップの企画・運営等です。入居後は、協同室の備品購入の支援〔注１〕、協同居住の住まい方の説明会の開催と自治会づくりや協同居住ルールづくりの相談、協同居住のきっかけづくりとしての食事会やお茶会の開催等を各ふれあい住宅ごとに支援してきました。

表1　災害公営住宅コレクティブハウジング（ふれあい住宅）の事業化一覧／10住宅　341戸

ふれあい住宅名	住戸型別戸数			合計	協同スペース面積	計画特性等
	S 1DK	M 2DK	L 3DK			
県営片山（97.8. 入居） 全戸シルバーハウジング	6			6	53 m²	単独棟　木造2階
県営南本町（98.2. 入居） 全戸シルバーハウジング	19	8		27	173	単独棟（RC5階）と一般棟併設．1階にメインの協同スペースと各階にサブ協同スペース
県営岩屋北町（98.2. 入居） 全戸シルバーハウジング	16	6		22	100	単独棟（RC3階）と一般棟併設．1階にメインの協同スペースと各階にサブ協同スペース
県営大倉山（98.4. 入居） 全戸シルバーハウジング	32			32	222	一般棟内（SRC14階の1〜4階）と一般棟併設．階ごとの8戸単位のコレクティブで1協同スペース
県営脇の浜（99.3. 入居） 全戸シルバーハウジング	32	12		44	280	単独棟（RC6階）と一般棟併設．2層で一つのコレクティブ単位でメインとサブの協同スペースをもつ
県営金楽寺（98.4. 入居） S/ シルバーハウジング M/ 高齢者特目住宅	32	22	17	71	478	単独棟（RC4階）と一般棟併設．階ごとの14〜19戸で一つのコレクティブ単位でメインとサブの協同スペースをもち，さらに1階にコミュニティプラザがある
県営福井（98.4. 入居） SとMがシルバーハウジング	14	9	7	30	209	単独棟（RC3階）．1階にメインの協同スペースと各階にサブ協同スペース
神戸市営真野（98.1. 入居） Sの全戸とMの6戸がシルバーハウジング	15	12	2	29	193	単独棟（RC3階） 1階に協同スペースと屋上に協同菜園
神戸市営久二塚西（98.12. 入居） 再開発受皿住宅/シルバーハウジングはない	45	13		58	193	単独棟2棟（RC5階と7階/1階は店舗）と一般棟併設 2階部の室内に協同スペースと屋外に路地広場
尼崎市営久々知（98.2. 入居） 全戸シルバーハウジング	19	3		22	約200	単独棟（RC4階）と一般棟併設．1階にメインの協同スペースとLSA室．3，4階に談話室

片山，福井，真野ふれあい住宅以外は，団地内に団地全体を対象としたコミュニティプラザが設置されている．単独棟はコレクティブハウジングだけの住棟，一般棟併設は同じ団地内にコレクティブ棟以外の住棟がある．金楽寺と久々知（尼崎市）および福井（宝塚市）以外はすべて神戸市内に立地．Lタイプは一般世帯用住戸．

石東直子作成（石東・都市環境研究室）

さらに入居後しばらく時間が経つと、各ふれあい住宅で個別の課題や入居者間のトラブルが発生したり、反対に協同居住の素晴らしい工夫や知恵が見えはじめましたので、それらの情況を交換して新しい住まい方を考えていこうということで、98年7月に「ふれあい住宅居住者交流会」を開催しました。その後はほぼ2カ月ごとにこの交流会を開催しています。これは各住宅を順繰りに訪ねて協同室を会場としてお借りし、ふれあい住宅の有志が集まり意見交流とお茶会をしています。それを「ふれあいネ

ットレター」として発行し、全戸に配布してもらっています（この詳細は、5章に載せています）。ふれあい住宅居住者交流会の企画・運営やネットレターの発行は、いずれは居住者たちの自律した活動として手渡していければいいなと期待しています。さらにこの後、コレクティブハウジング事業推進応援団にどのような新たな支援活動が必要とされる情況が生じるのかは見当がつきませんが、応援団が解消でき、わたし自身のライフワークとして少し力を抜いて楽しみながら関わっていける関係ができればいいなーと思っています。

以上のようなわたしたちの活動は、はっきりした見通しがあってここまできたのではなくて、「とにかく、せなあかん！」と思って、走りながら考えて、考えを仲間としゃべりながら道筋を開けてきました。そのためもっとええ方法があったのにとの後悔もしませんが、反対に反省の機会も少ないです。ただ同じ方向を向いている仲間たちと一緒に走っているので、何かあったら支え合えるという強さだけあります。まさに同じライフスタイルを指向する人たちのふれあう心からなるコレクティブハウジングのスタイルと同じです。

付記：コレクティブハウジング事業推進応援団の活動費の一部は、阪神・淡路ルネッサンス基金（ＨＡＲ基金）の助成を受けたり、災害公営住宅入居予定者事前交流事業制度を活用していますが、大部分はサポーターのボランタリーな活動です。

〔注1〕ふれあい住宅の協同室の備品等購入については、阪神・淡路大震災復興基金の「被災者向けコレクティブ・ハウジング建設等補助」があり、入居者が申請すれば補助が受けられます。

Collective Housing

1

応急仮設住宅の暗と明

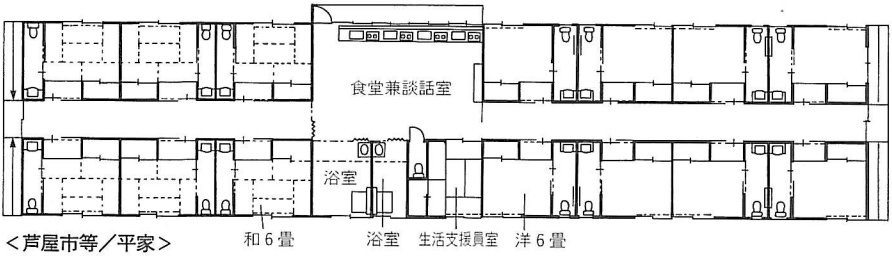
一般仮設住宅と地域型仮設住宅

◇地域型仮設住宅から学ぶ

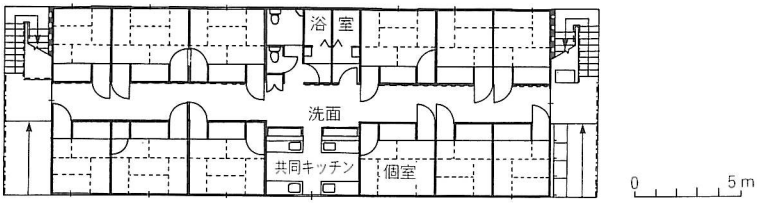
1995年1月17日の未明に起きた阪神・淡路大震災では、倒壊家屋などの下敷きになって亡くなったり、地震直後に発生した火災によって、倒れた家の下から助け出されないまま火に包まれて亡くなった人たちが、6400人以上にのぼります。この尊い命を失った人たちの半数以上が60歳以上です。地震は神戸から阪神間の町中を走っている断層を揺るがしたため、下町に大きな被害が集中しました。下町には長年住み続けているお年寄りが多く、沢山のお年寄りが命を奪われました。一方、命はながらえたものの住処を失った人たちが、20万世帯近くにも及びます。震災後すぐに、災害救助法という昔（1947年）に制定された法律にもとづいて応急仮設住宅が建設され始めました。

仮設住宅の建設は、市街地の被害が大きくて町中にその建設用地が確保できにくい状況にあったので、多くは郊外や臨海部の埋立地に建設されました。初期に建設された仮設住宅へは高齢者や障害者などの入居を優先したのに、住みなれた地から遠いということで不評でした。学校や体育館などの避難所は寒さが厳しく、便所なども使いにくい状況にあるのに、お年寄りたちは遠くの仮設住宅へはなかなか移ろうとしません。また、老人ホームなどに一時的入所したお年寄りのために、市街地内の公園などに小規模単位で建設されたのが、「高齢者・障害者向け地域型仮設住宅」です。

地域型仮設住宅は、兵庫県下で約1800戸（うち神戸市内に1500戸）が建設されましたが、建物タイプは、「学生下宿型・寮型」と「コモンルームをもったコレクティブハウジング型・グループホーム型」の2種類があります。神戸市は「寮型」でケアサービスはII類型（生活支援員派遣型）に近似しており、阪神間4市（芦屋、西宮、尼崎、宝塚）は「グループホーム型」でケアサービスにはI類型（グ



＜芦屋市等／平家＞



＜神戸市／2階建＞

図1　高齢者・障害者向けケア付地域型仮設住宅の平面図

ループホームケア事業型）とII類型です（注2）。神戸市の「寮型」はいずれも2階建てで、廊下をはさんで居室が並び、各階に共同のトイレと炊事場、浴室が設けられ、戸外に共同洗濯機置き場があります。居室は一人世帯は4.5帖に押し入れ、二人以上世帯は6帖に押し入れというものです。芦屋市等の「グループホーム型」は平屋で、1棟に14室あり、棟の中央に約70㎡のコモンルームがあり、その内容は浴室2カ所と職員詰所、調理台4カ所と食堂兼談話室です。居室は約16㎡で押し入れ、トイレと洗面台が付き、6帖の和室と洋室のどちらかを選べます（西宮市のは2階建てで、1棟に6～23室）。

芦屋市等のケアサービスは24時間体制で、生活支援員の配置は1棟につき昼間は1～2人、夜間は1人です。地域のボランティアの支援があつく、食事づくりの支援もあり、入居後居住者の健康状態がよくなったり、痴呆や精神障害の症状が専門医が驚くほどに緩和されるなど、効果が大きいということです。居住者は人の顔が見たくなったら、コモンルームに集まってきます。各棟のコモンルームは時間が経つとともに居間のような雰囲気がでてきて、棟ごとの様子も個性があります。震災で生まれた国内では珍しい混合型のグループホームとなり、神戸協同病院の上田院長は「地域に開かれ、支援があり、入居者が自由に生活できる点がいい。超高齢化社会を迎える21世紀の福祉の在り

図3　同右、住人のNさんは草花が大好き

図2　芦屋市呉川町の高齢者・障害者向けケア付地域型仮設住宅の外観

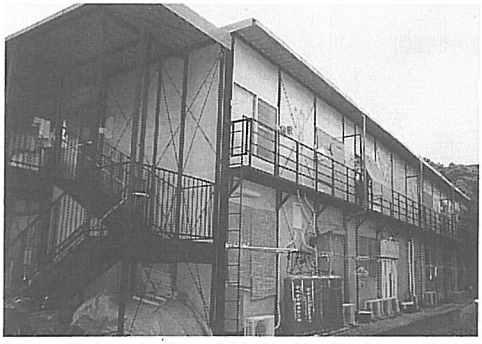


図4　神戸市長楽公園の高齢者・障害者向けケア付地域型仮設住宅

図5　同左、戸外でのくつろぎのひととき

方を示すモデルのひとつ」と評価しています。

「ドアを開ければ誰かがいる。こんな住まいはほんまにええ。今までは寂しかった。友だちは自分でつくれるけど、こんな住宅のこんな住まいは方は自分でつくられへん。死ぬ前に幸せつかみたい。こんな住宅を建ててほしい」と、尼崎市小田南公園ケア付き地域型仮設住宅を訪れた時、そこに住むMさんのつぶやきを聞きました〔注3〕。

一方、神戸市の地域型仮設住宅はその供給戸数の多さから、建物内容もケア体制も芦屋市等のそれと比べると貧しいものでしたが、共同便所や共同台所で毎日顔を合わせることで、必要な協同居住のルールができ、相互扶助が育まれ、生活支援員やボランティアのサポートがあり、安心した生活が展開されました。

図6　尼崎市小田南の高齢者・障害者向けケア付地域型仮設住宅のコモンルームでのくつろぎ

この地域型仮設住宅の生活が災害復興公営住宅でのコレクティブハウジングの誕生のきっかけのひとつになりました。そこには神戸市職員の鈴木三郎さんの熱い想いがありました。彼は2種類の地域型仮設住宅の様子を目のあたりにして、少しのハードのちがいと適切なソフトのサポートにより、非常に大きな生活の違いをもたらした良い事例であると痛感し、「協働居住方式」〔注4〕の採用が公的賃貸住宅供給上の多くの課題を解決するキーポイントになる可能性を秘めているのではないだろうかと考えたのです。震災直後に発想したわたしのコレクティブハウジン推進の想いと結びつき、実現に向けて協働していくことになります。

〔注2〕ケアサービスの差異によって、Ⅰ類型（グループホームケア事業型）とⅡ類型（生活援助員派遣型）がある。Ⅰ類型は、「入浴、炊事、衣服の着脱等に一部介助を要する程度の高齢者等」が対象で、介護員は1棟（概ね14人）当たり2人、看護婦は1人を配置し、夜間対応に別の介護員2人を配置する。サービス内容は身辺介助、家事援助、夜間における臨時的対応、生活相談である。

Ⅱ類型は、「Ⅰ類型の対象者ほどではないが、身体上、精神上の理由で避難所での生活が困難と認められる高齢者等」が対象で、生活援助員を住宅戸数概ね30戸に1人を配置し、夜間対応に別の1人を配置する。サービス内容は生活指導・相談、安否の確認、一時的な家事援助、緊急時の対応、関係機関等との連絡、その他日常生活上必要な援助である。（兵庫県グループホームケア事業運営要綱」より）

〔注3〕Mさんは今、尼崎市の地域型仮設住宅から発展した「グループハウス尼崎（災害復興グループハウス整備事業）」に暮らしています。彼女のつぶやきは現実のものになりました。

〔注4〕鈴木三郎さんは「協働居住方式」という字を使われていますが、わたしは「協働」よりもう少しゆるやかな「協同居住方式」という字を使っています。

図7　神戸市六甲アイランドに建設された一般仮設住宅群

◇一般仮設住宅〔注5〕での悲しい死

震災で家を失った人たちのための仮設住宅は約4万8千戸が建設されました。その多くは郊外や臨海部の埋立地に建設されましたが、住み慣れた地域を離れて移り住んだ仮設住宅で、隣人たちとのふれあいがなく、亡くなった後に発見される人、震災で家族や仕事を失い、生きる気力を取り戻せないで自殺する人、アルコール依存による病死者など、「孤独死」と呼ばれる悲劇が続きました。県下の仮設住宅での孤独死は約230人にのぼります。仮設住宅から多くの人が移り住むコンクリート造の災害復興公営住宅は鉄の扉を一枚閉めると、全く外部と遮断された空間で、仮設住宅よりももっと隣人たちのふれ合いはなくなります。恒久住宅に移り住んだ後も仮設住宅での悲劇が繰り返されないようにと、わたしたちコレクティブハウジング事業推進応援団は被災地のコレクティブハウジングの事業化を支援してきました。

付記：「孤独死」はひとり暮らしの被災者がだれにもみとられず死亡し、警察が変死として検視したケースで、兵庫県警の検視統計にもとづいて報道されています。大かたの仮設住宅が解消された99年秋までの4年半の間の孤独死は233人と報道されています。その内訳は、男性が68%、女

性が32％です。女性は80代などの高齢者が多いのに対して、男性は60代、50代の若い人が最多です。この孤独死に対して、「仮設住宅以外でもあることなのに特別視はおかしい」「孤独死＝必ずしも孤独ではない」という批判もあり、一面ではわたしもうなづけますが、地域型仮設住宅や震災前の下町ではこんなに集中して起きなかったということを考えると、やはり隣人とふれあって生きることの必要性を強く感じざるをえません。

〔注5〕地域型仮設住宅と区別するために一般仮設住宅と呼ばれることがありますが、普通は単に仮設住宅と呼ばれています。

◇生きる気力を育んだ「ふれあいセンター」

郊外や埋立地の砂漠のような地に軒を接して並ぶプレハブの仮設住宅は同じ外観が続くため、外出すると自分の住宅が見つからず迷子になる人たちもいました。お風呂の浴槽が高くて高齢者等には入りにくい、住宅の出入り口に高い段差がある、近くに医者や日用品店をはじめポストや公衆電話もない等々、入居者に対応しない立地や住まいのミスマッチが日々報道されました。多くのボランティアが改善の手をさしのべ、行政も夏を迎えるにあたってエアコン設置など改善をすすめました。しばらくして、大きな仮設住宅団地には「ふれあいセンター」が建てられました。プレハブの平屋建てで、台所設備をもつ集会所です。

そこでボランティアや元気な居住者によってお茶会や食事会が企画され、少しずつ仮設住宅団地ににぎやかな声が聞こえはじめました。人恋しくなれば、そこに行くといつでもだれかに会えるという協同の居間のような雰囲気です。ふれあいセンターを核に隣人たちとのふれあい、仲良しができ、おかずのおすそ分けなどが交わされ、長屋形式の仮設住宅町に震災で消失した下町の生活が蘇りはじめました。

図8　神戸市西神ニュータウンの仮設住宅町のふれあいセンター

図9　同上ふれあいセンターのふれあい喫茶でくつろぐ人たち

仮設住宅でのつらいニュースが続いていましたが、明るい元気のでるニュースとして報道されはじめました。

わたしもいくつかのふれあいセンターを訪れました。居住者やボランティアたちによってつくりだされたふれあいセンターの雰囲気は場所によって千差万別。趣をこらした喫茶コーナーを設けたところ、マッサージ器具のある健康コーナーのあるところ、クリスマスのようなにぎやかな飾りがはりめぐらされているところ。ふれあい喫茶をはじめ、食事会、ラジオ体操や踊りクラブ、カラオケ、折り紙や手芸クラブなど、わいわいがやがやの集いが繰り広げられ、居住者たちにはしゃぐ気分が少しずつ蘇ってきたのを感じました。和やかでとりすまさない下町生活の協同の居間が生まれました。いま思えば、これがコレクティブハウジングの協同室のイメージです。

このふれあいセンターは災害公営住宅に継承され、50戸以上の団地でコミュニティプラザとして建設されました。しかし、ふれあいセンターのように気軽に使えて、和やかな雰囲気が育っているところはまだ多くないようです。ふれあいセンターに元気の素を吹き込んだのは、居住者を巻き込んできっかけづくりをした生活支援員やさまざまなボランティアグループなど、外部のサポーターの働きが大きいで

パンやお菓子を持ち寄り、コーヒーを味わう住民たち＝神戸市中央区、ポートアイランド第1仮設住宅

モーニングで分かつ安らぎ

ポーアイ第1仮設

「ふれあい喫茶」開店

住民協力　コーヒーを無料で提供

モーニングコーヒーを安価で楽しめ、と、神戸市中央区のポートアイランド第一仮設住宅に七日、住民が運営する「ふれあい喫茶」がオープンした。コーヒーを無料でふるまい、パンやお菓子を自宅から持ち寄るスタイル。喫茶の専門学校から譲り受けたすを使い、くつろげる空間をつくり出している。

喫茶店が開かれたのは、同住宅の集会所「ふれあいセンター」。住宅内には一人暮らしの高齢者が多いため、「皆で集まって朝食を食べたほうがおいしいので」と、約一カ月前から自治会が準備を始めた。

"本格派"の店をーと、喫茶関係の専門学校から、震災後に使わなくなったいす十八脚を譲り受け、汚れを落として再生した。コーヒーメーカーで作ったコーヒーは無料。今後、持ち寄ったパンを焼くトースターも備え付ける計画で。

"営業時間"は午前十時から正午までで、定休日なし。ウエイター、ウエートレス役は住民が当番制で担当する。震災前、喫茶店を経営していた住民も多いだけに、サービス面でも本格派を目指している。

初日は入れ代わり立ち代わり住民が訪れ、用意したいすだけでは席が足りなくなる盛況ぶり。震災で長田区の自宅が全壊したという岡部芝助さん(八八)は「震災前は近くの喫茶店によく通っていたが、仮設住宅に来てからはほとんど行かなくなった。気軽にお茶を飲みに来られる場所ができてうれしいですね」と話していた。

図10　ポートアイランド第一仮設住宅で開かれた「ふれあい喫茶」をとりあげた新聞記事(神戸新聞96年2月8日)

す。仏つくって魂入れずではダメです。器づくりには共生を育むしかけ＝居住サポートが必要であるということを、わたしが身をもって痛感するのは、コレクティブハウジングの入居が始まってからのことです。

豊かに育てる環境づくりを

神戸大学都市安全研究センター　室崎益輝

コレクティブハウジングが、そう簡単に時代の波を乗り切れるとは思えない。いまやわが国では、過去にもっていた集住のしきたりや作法がすっかり忘れられてしまっているからである。かってあった裏長屋の人間関係、それぞれが個を確立したうえで互いに認め合い支え合う関係を、どう再構築するか。コレクティブの居住者はその前線にいると思う。

そこで、前線にいるコレクティブの居住者とその応援団を孤立させないよう、コレクティブが豊かに育つ社会環境をつるくために、わたしたちは力を注がなければならない。

そのためには、まずコレクティブの住環境、とりわけ交流環境（地域の人々の交流環境も含め）の充実をはかること、第2にその交流環境を使いこなすソフトの充実をはかること、第3に居住者の自律的集住を支援する社会システムの確立をはかること、第4に、これが一番大切なことであるが、住み方教育の社会基盤を整備すること、が欠かせない。

となると、コレクティブハウジングの運動は、幅の広いしかも息の長いものとならざるをえず、性急に功を求めたり、短期的に結論を急いではならない。

「人間を幸せにするシステム」への挑戦

特定非営利活動法人玉川まちづくりハウス　林　泰義

阪神淡路大震災では、量的には復興計画の目標が達成された。しかし、コミュニティの再生、被災者の生活の質、人間性の尊重という観点からは、大きな問題があったことが多方面から指摘されている。

コレクティブハウジングはその中で唯一といって良い人間味溢れる住まいの先駆的提案であり、実現した貴重な事例となった。日本という硬直したシステムの中でこの提案を推進した人々がとくに重視したのは、計画・設計のみでなく完成後の運営であった。このために手を尽くした多くの関係者なくしては、被災者のこころを癒す運営を模索することも出来なかったであろう。

一方、このアイディアを実現するために奮闘した行政職員の存在も忘れることが出来ない。とりわけ復興期の忙煩をきわめた状況の中で、これほど短期間に新しい住宅タイプを導入するための格闘は、想像を越えるものがあったと思う。

大災害という非日常が求める痛切な要求を、日本の「人間を不幸にするシステム」＝行政の枠組みが如何に受けとめ、如何に拒否してきたか。コレクティブハウジングという優れて人間的な住まいが、この枠組みの中でどのように何を実現し得たか。その過程自体が、ひとつの充分興味ある物語である。

Collective Housing

2

第1号神戸市営「真野ふれあい住宅」の取り組み

協働の計画づくりと居住サポート

全国初の公営コレクティブハウジングのひとつ、神戸市営真野ふれあい住宅の誕生には、震災間もない非常事態にありながら短期間の周到な出産準備がありました。その生みの親（発案者）は鈴木三郎さん（当時は神戸市住宅局住環境整備課長）で、外部から彼を勇気づけ、自信づけたのは小林・石東をはじめとするコレクティブハウジング事業推進応援団です。発案から誕生（入居）までの3年余りとその後の生育期（入居後の協同居住の助走）には、行政と応援団などによる協働のドラマが展開されています。

（1）「神戸市コレクティブハウジング研究会」の流れ

◇地域型仮設住宅からの発想

鈴木三郎さんは自ら指揮をとった神戸市地域型仮設住宅について次のように述べています。

住宅復興の最も大きな課題は、甚大な被災を受けた「木造賃貸住宅」に居住していた「高齢者世帯の居住の確保」である。それらの人たちは、①低所得であること　②生活がコミュニティ依存型であること　③福祉施設対象者数が大量であること、など質的にも量的にも困難な課題がある。神戸市は応急対応として1500戸の高齢者・障害者向け地域型仮設住宅を町中に建設した。

神戸市で初めて地域型仮設住宅を発想した時のコンセプトは、「学生下宿」と「コレクティブハウジング」の二つがあった。それぞれの特長は「学生下宿」は土地の有効利用と被災市街地での供給の可能性が高いということ、「コレクティブハウジング」は高齢者の集住対応ができるというものである。最終的には神戸市の地域型仮設住宅はその供給数の多さから学生下宿に近いものにならざるをえなかったが、芦屋市等のそれはコレクティブハウジングに近い施設内容になっており、運営内容も福祉施設に準じたもので、居住者の生活は仮設住宅でありながら相当安定したものとなっている。少し落ち着いて芦屋市の地域型仮設住宅を知ったとき、神戸市のものと比較すると、少しのハードの違いが適切なソフトのサポートによって非常に大きな生活の違いをもたらしていることが分かった。災害復興公営住宅の供給に際しても同様の課題が発生するのではないかと思われた。「協働居住方式」の採用が公的賃貸住宅供給上の多くの課題を解決するキーポイントになる可能性を秘めているのではないだろうか（鈴木さんは〝協働〟という字を使っています）。

（コレクティブハウジング事業推進応援団発行「コレクティブハウジングの実現に向けて」96年3月より）

そこで1995年の9月18日に鈴木三郎さんを座長とする「神戸市コレクティブハウジング研究会」の第1回会合が開かれました。研究会のメンバーは神戸市住宅局、神戸市住宅供給公社、住宅・都市整備公団および建設省住宅局からの参画と、民間の都市計画プランナーとして小林さんと石東が呼ばれました。研究会では日本初のコレクティブハウジングの供給の可能性の検討とモデルプロジェクトの設定方針から検討を始め、ワーキング・グループを設けて、被災地で緊急に事業化するにあたってのいくつかの具体性のあるモデルを検討しました。研究会は12月末までに数回開かれましたが、11月初めの第3回研究会では神戸市営住宅での「モデル事業」として供給することになり、三つの方針がほぼ確認されました。

そのひとつは、第1号モデルの立地場所は従来から地域住民でまちづくりがすすめられているような地域が適切であろう、二つめは仮設住宅にいる仲良しが連れもって入居できるようなグループ入居が望ましい、三つめとして、シルバーハウジングプロジェクト〔注6〕の展開のひとつとして実施するというものです。なお、現段階での公的住宅でのコレクティブハウジングの実施は「モデル事業」にならざるをえませんが、反面モデル事業ならではの少し頑張った取り組みが可能ともいえるという神戸市の意気込みがあり、研究会の検討過程では「そんなんできへんわ」とか「こんなん無理やで」とかいう従来のような行政発言がほとんどありませんでした。

しかし研究会の結果を受けての事業化決定までには、協同居住の稼働のためのサポート体制、協同スペースの家賃や管理費・住宅管理上の問題・補助事業対象化、空き家発生時の入居者補充方法など事業実施上の課題が山積みで、庁内コンセンサスを得るために越えなければならないハードルは高く、鈴木さんは庁内では孤軍奮闘をしていたようです。わたしたちは精いっぱいの側面支援をしました。

わたしはコレクティブハウジングの必要性や事例などの紹介を「きんもくせい（阪神大震災復興市民まちづくり支援ニュース）」や新聞に積極的に投稿し、コレクティブハウジング事業推進応援団は公開ミーティングやパネル展の開催を重ねました。わたしはそれらの記事や情報を神戸市の馴染みの職員たちに配って廻りました。親しい職員からは「また、コレクティブハウジングのマインドコントロールに来たんか」とか、「コレクティブハウジングの石東さん」とか言われるようになりました。

〔注6〕87年に建設省と厚生省が連携して創設された制度で、高齢者向けの設備を備えた公的賃貸住宅に生活援助員がつき（常駐あるいは巡回）、緊急時の対応や見守り、情報提供等の生活サポートがある。

◇研究会で検討した神戸型コレクティブハウジング

9月からスタートした「神戸市コレクティブハウジング研究会」の正式な会合は年末に終了しました。後は庁内での意志決定を待つことになりますが、研究会では神戸型コレクティブハウジングのおおよそのイメージと課題などがほぼ整理されました。それは次のようなものです。

【① 公的住宅供給に際しての留意点――住宅建設の選択肢のひとつ】

これは先にも触れましたが、地域型仮設住宅から学ぶ「協働居住様式」の重要性と有効性を確認し、協働居住様式の採用が今後の（被災地の復興公営住宅の供給だけでなく21世紀を見据えた超高齢社会の）公的住宅供給上の多くの課題を解決する対応策を内包しているということです。コレクティブハウジングの導入は福祉需要の軽減と魅力ある都市集住の実現の可能性を秘めています。福祉需要の軽減は震災対応という緊急避難的な取り組みではなく、超高齢社会に向けての基本的な長期の取り組みとしても大切な課題であり、集まって住むことにより相互扶助が育まれ、高齢者世帯や一人世帯で必要とされる福祉サポートの需要が相互にサポートできます。それともうひとつは、集まって住むことによってより充実した豊かな生活が実現できるということです。

これらのことは先進地のスウェーデン等のコレクティブハウジングをみてもうなづけます。コレクティブハウジングが家事や育児の合理化のニーズがきっかけとなって建設され、その後は小規模家族や高齢世帯、単身世帯等が顔見知りになって住むことの安全性と、小規模家族では味わえない充実した楽しい大家族的な雰囲気を求めあう人たちのライフスタイルの選択として展開されています。そうです。居

住者はあくまでも自己のライフスタイルとして選んでいるので、神戸での試みも今後の住宅建設の選択肢のひとつであるということをおさえておくことが必要だと思われます。

【② 神戸型コレクティブハウジングの考え方――ゆるやかな協同居住】

神戸市でのコレクティブハウジングの導入は北欧のような本格的なコレクティブハウジングを供給しようとしているのではなくて、コレクティブハウジングのもつ「協働性」に着目し、協働性を育む居住方式をとりあえずコレクティブハウジングと呼ぶことにします。「日本型コレクティブハウジングの協同居住のイメージについて、何を、どこまで協働をすすめるか」は議論の分かれるところです。また、協働の内容と程度により、協同スペースの整備内容も当然異なってきます。とくに高齢者を主体にしたコレクティブハウジングでは、北欧のような日常的な食事の協働は難しいでしょう。さらに協同スペースの住民による維持管理やその費用分担を考えると、大掛かりなものを設けるのは無理です。ということで、ゆるやかな協同居住方式を方針とすることにしました。

これは、わたしがいつも言っている「いつでも誰かに会えるし、いつでもひとりになれる」「ひとりで食事をするよりは、たまには大家族のように集まって食べよう」という住まい方のイメージです。

【③ コレクティブハウジング導入の現時点での課題のいろいろ】

全国で初めて、それも高齢者を主体にした公営コレクティブハウジングの事業化にあたっては、考えれば考えれる程、課題がでてきます。その主たるものとしては、

- 協同居住という新しい住まい方を入居と同時に始めることができるのか、支援者（ライフコーディネ

イターなど）を配置する助走期間が必要ではないか
- 公営住宅の「公募」型では、協同居住上の問題がより多く出てくるのではないか
- 空き家発生時の入居者補充にはどんな工夫がいるのか
- 協同スペースの家賃と維持管理費の負担、協同スペースの必要備品の初期整備の負担方法について
- 協同スペースの補助事業対象化の可能性について

などなどが考えられますが、どれも決定的な問題ではなく、今後、居住希望者の意向を把握しながら実現の道を探っていこうということになりました。

（2）疑似居住者参加の計画づくりワークショップ

5月下旬（震災の翌年）になって、神戸市から電話がありました。神戸市営コレクティブハウジングを「真野地区」でモデル事業として建設することになったので、打ち合わせに来てほしいと。

先の「神戸市コレクティブハウジング研究会」は年末で終ったので、わたしはその後の進展状況をずっと気にしていました。しかも新年度になって、庁内でのコレクティブハウジングの先導役だった鈴木さんが他部局へ異動されたので、余計に気になり、そろそろ一度聞きに行かなければとも思っていた頃でした。

◇建設場所はコレクティブが育っていく可能性の高い真野地区に

神戸市庁内では先の研究会での結果を受けて、建設場所捜しが地元の意向も聞きながら行われていました。市営住宅の新たな建設用地の確保は、被災直後のため非常に困難な状況にありましたので、用地の確保の見通しがあり、加えて地域の中で新しい住まい方のコレクティブハウジングが育っていく可能性の高いところとして「真野地区」が選定されました。

真野地区は神戸市長田区の東南部にあり、古くから住民主体のまちづくりが進められており、長屋や木造賃貸住宅と中小工場が混在した地域です。地区内には日用品店、食堂、喫茶店、散髪屋、クリーニング店などの日常生活の利便施設が多く、隣人どうしの助け合いやふれあいが豊かで、町全体がコレクティブタウン（協同居住の町）でした。今回の地震で大きな被害を受けましたが、震災直後の混乱期から住民が個人あるいは組織として消火救出活動、避難所の開設、食糧の確保などの活動を推進し、地域としての力を発揮し、住民に安心感を与えることができた地区です。地区内には小規模な仮設住宅3カ所が建設されていました。

このような地区で全国初〔注7〕のコレクティブハウジングをたちあげる方針が決定され、事業実施に向けての計画策定のスタートは、まず庁内の担当職員と設計担当の建築家、真野地区のまちづくりに長くかかわっているまちづくりプランナー（宮西悠司さん）とわたしとで、3回の準備委員会をもち、96年6月18日に「真野コレクティブハウジング研究会」が発足しました。研究会のメンバーは神戸市職員（保健福祉局総務部計画調整課、同高齢福祉部在宅福祉課、住宅局住宅部計画課、同建設課、同管理課）と外部委員として学者二人（建築学と社会学）と設計担当建築家、宮西さんとわたしです。

メンバーの神戸市職員の部局をみると、高齢者向けコレクティブハウジングを主体にしたいということと、建設後の公営住宅としての新たな管理の課題を計画段階からおさえておかなければという姿勢がうかがえます。

準備委員会では神戸市の建設方針を受けて、大急ぎで研究会で検討するためのたたき台（計画案）を作成することになりました。神戸市の建設方針は、

① 建設戸数は敷地規模（約１２００㎡）からみて、30戸前後になるが、仮設住宅からの受け皿住宅になるようにシルバーハウジングプロジェクトをいれたい。シルバーハウジングプロジェクトから発展した型のシニアコレクティブハウジングとし、シルバーハウジングプロジェクトとのちがいは何なのかを明確にしたい

② 仮設住宅から仲良しがつれもって入居できる新しい入居システムを考えたい

というものです

まず、たたき台を策定するにあたつて、何を協同化するのかを検討しました。協同スペースは各住戸の面積を少しずつ（10％程度）出し合ってつくることになるので、大きな面積はとれません。災害公営住宅の住戸面積は従来の公営住宅に比べてかなり小面積の基準になっています。例えば、Ｓ型（１ＤＫ）は40㎡、Ｍ型（２ＤＫ）は50㎡、Ｌ型（３ＤＫ）は60㎡です。また、真野地区内には銭湯が３カ所もあるので、コレクティブハウジング内の協同浴室は不要と考え、最低限必要と考えられる協同スペースとしては、協同台所と食堂、談話室、和室（ゲストルームを兼ねる）、協同洗濯場などがあれば十分でしょう。後は設計上の工夫で小さなたまり場や屋上利用を考える。その他の設計条件としては、上下足の履き替えは一般の共同住宅と同様に各住戸の入り口までは下足とし、協同室に入ったところで上履きに履

図1　真野ふれあい住宅のイメージとしたイギリスのチェスターの町並み

き替えることにする。住戸タイプの配分は単身用住戸を主体にするが、1DKから3DKまで多様な住戸プランを盛り込むことにしました。

駐車場と駐輪場は高齢者住宅を主体にするなら、神戸市営住宅として付置義務のある台数ほどはいらないのですが、とりあえず付置義務台数を設置せざるをえません。将来はこの駐輪場等のスペースを活用して、必要となった共同施設、例えば、共同浴室や巡回移動浴などの設置スペースにもできるだろうと、わたしは密かに考えていました。

建物の全体のイメージは下町長屋の再生をイメージし、町中に溶け込むようなものにしてほしいというのがわたしの希望で、イギリスの中世の町並みを今もうまく活用しているチェスター（CHESTER）の町の写真を提示しました。2階、3階の続きバルコニーが建物全面に廻わっていて、歩廊（Rowと呼ばれる）となっており、通りに面して妻側のとんがり帽子の家並みが連なっています。ちょっと大きめですが、日本の長屋の町並みとおなじ雰囲気があり、歩廊は長屋の路地に共通します。このイメージ案が生かされて真野ふれあい住宅は完成しました。

〔注7〕公営の協同居住施設としては、94年に岡山県が創設した「ひとりぐらし老人共同生活支援事業」があり、岡山県下に6地区（95年度までに）が事業化され、ミニコレクティブハウジング的な生活が展開されていますが、福祉施策としての事業であり、住宅施策としては被災地でのコレクティブハウジングが全国初になるのではないかと思います。

◇疑似居住者参加の計画づくり

準備委員会で作成したたたき台をもとに検討を始めた研究会の第2回目に、延藤安弘委員（千葉大学教授）が「計画づくりを建設予定地の周辺住民や仮設住宅の人たちによる疑似居住者参加型のワークショップ（＝計画づくりの意見交流会）でやろう」と提案された時、わたしは声には出しませんでしたが「エッー！」と思いました。入居者が決定していない段階で、しかも仮設住宅の多くの人はできれば地元の公営住宅に入りたいと熱望しているのに、入居できるのかどうかの保証なしでワークショップに参画してもらうのは、あまりにも酷なのではないかと思ったのです。

ワークショップはコレクティブハウジングを知ってもらい、共に住みこなすための意識を喚起し、また安心して住みつづけられるための運営・管理のあり方を住み手自らが考えていくのによい方法です。しかし、これはすでに入居予定者がほぼ確定している場合の話だと思うのです。しかし一方で、行政と専門家が独りよがりの計画を策定しているのではないだろうか、コレクティブハウジングのニーズは確かにありそうですが、わたしたちの思いが本当に受け入れてもらえるのだろうかという不安もないわけではありませんでした。

これに対して延藤安弘さんの意見は、「今回の計画は、公営住宅という点から現時点での入居者の特定はできないが、建設予定地周辺の住民等が疑似的に居住者の役を演じてワークショップをやることは、さまざまな問題のあぶり出しが期待できるとともに、入居者選定後の協同居住の学習と協働トレーニングをワークショップでやる場合のよい参考になる」というものでした。

そこで、ワークショップ実施前に次のような点について「研究会」で検討を重ねました。

図2　疑似居住者が参加しての計画づくりワークショップ

- ワークショップで提案された住み手側の生の声が、どこまで計画に反映できるか
- 協同スペースと住戸専用スペースの役割分担がどこまで自由になるのか（例えば、協同風呂を設けるとしたら、住戸はシャワーのみの設置で可能か）
- 真野地区に建つとはいえ、公営住宅なので原則では入居者は公募形式を取らざるを得ないが、早期の入居者の確定やグループ応募制度の実現の可能性はあるのか
- 入居予定者決定後、入居までにできるだけ長い期間をとり、入居前の協同居住の学習や協働トレーニング等の集いをもつことが実現されるか

これらのことは神戸市だけですべてが決定できるものではなく、建設省の了解も必要なものもありますが、神戸市は第1号のモデルとしてできるだけ対応したいという意気込みをもっており、「まぁ、ワークショップをやってみよう」とゴーサインが出ました。

ワークショップは実施設計に入るための時間的制約もあるので、3回程度をめどに次のような枠組みを決め、当日は主として延藤研究室のスタッフに任すことにしました。

第1回（1996年8月3日）

〈暮らし方イメージ〉ワークショップ／コレクティブハウジングを疑似体験してみよう！

- 夢を語り合い、不安を解消する知恵をみんなで出し合う

第2回（8月17日）

〈デザインゲーム〉ワークショップ／第1回で語り合った夢や提案はどんな形になったかな？
・設計者による二つの計画案を確認し、よりよいものにしていく

第3回（10月27日）

〈マネージメント〉ワークショップ／管理・運営と入居者選定等に向けての今後の流れを考えよう！
・誰が住むのか、どうやって住むのか

8月3日の第1回のワークショップは、それでもわたしはまだつらい気分で迎えました。当日の参加者は、真野地区の仮設住宅入居者やまちづくり推進会の役員と住民の方々、それに離れた地区から自転車に乗って来られた久二塚6まちづくり協議会の仮設住宅入居者、延藤研究室のスタッフ、まちづくりプランナーや学生、神戸市職員等々、総勢70名を超えました。

第1回は内容も盛りだくさんで、ワイワイ、ガヤガヤすすめられました。震災後ワイワイ、ガヤガヤと夢を語る機会がなかったので、ひとときのお祭り気分で、多くのサポーターに乗せられて進んでいきました。

ワークショップが始まってしばらくした頃、「わしらこの住宅に入れてくれるんやったら、なんぼでも意見ゆうけど……」「入れるかどうか分からんのに、こんなん殺生や……」という声が聞こえてきました。

その声に丁寧に対応できないまま、住民を上回る数のサポーターに乗せられて、自分の問題というよりも、この目新しい住まい方に対して夢を語り合いました。

ワークショップが終わる頃、「まぁ、入れる人は少ないわな。全戸が地元優先入居というわけでもない

やろうし。入れんかっても、また工場跡地こうてもろて、次にもこんな住宅建ててもらお」という声が聞こえました。わたしは心から頭を下げました。

自分たちのことと決まっていないので、そんなに真剣になることもなく、こんな住まい方もあり、それが案外夢でもなさそうだナーということが、住民も含めて多くの参加者に分かってもらえたようです。

第2回のワークショップは研究会で検討した二つの設計案について意見交流をしました。どちらの案も大きな設計方針は変わりなく、3階建てで、続きバルコニーを設けて立体路地をイメージし、1階のメイン入り口に大きな協同スペースを配置し、住戸は1階の一部と2階と3階にあります。A案とB案のちがい（それぞれの特徴）は、A案が個人の住戸内の設備は共用しない、各階のたまり場はつづきバルコニーやエレベーター前に配置しており、全体がひとつのコレクティブ単位です。これに対してB案は、向こう3軒両隣を形成するしかけとして、住戸の台所やお風呂を共用する数戸グループと、ちょっと大きめの台所（共用台所とする）をもつ住戸をとりまく数戸グループがあり、分節型のグループ住戸配置です。そして、各階のたまり場は共用台所に面して設けています。

参加した15名の住民だけに旗上げアンケートで賛否を聞きました。A案がB案のほぼ2倍の支持を得ました。食事や入浴などの生活行為や隣人たちとの付きあい方が現実と大きくかけはなれていないA案が支持されたようです。密なふれあいがすでに育まれている間柄どおしや、協同居住を自分のライフスタイルとする人たちの住まいなら、B案は望ましいものとされるでしょう。現実は、見知らぬ人たちが当選して入居することになる住宅では、一朝一夕にはそこまでいけないでしょう。わたしの言う「いつでも誰かに会えるし、いつでもひとりになれる」「ひとりで食事をするよりは、たまには大家族のように集まって食べよう」という住まい方のイメージが支持されたようです。

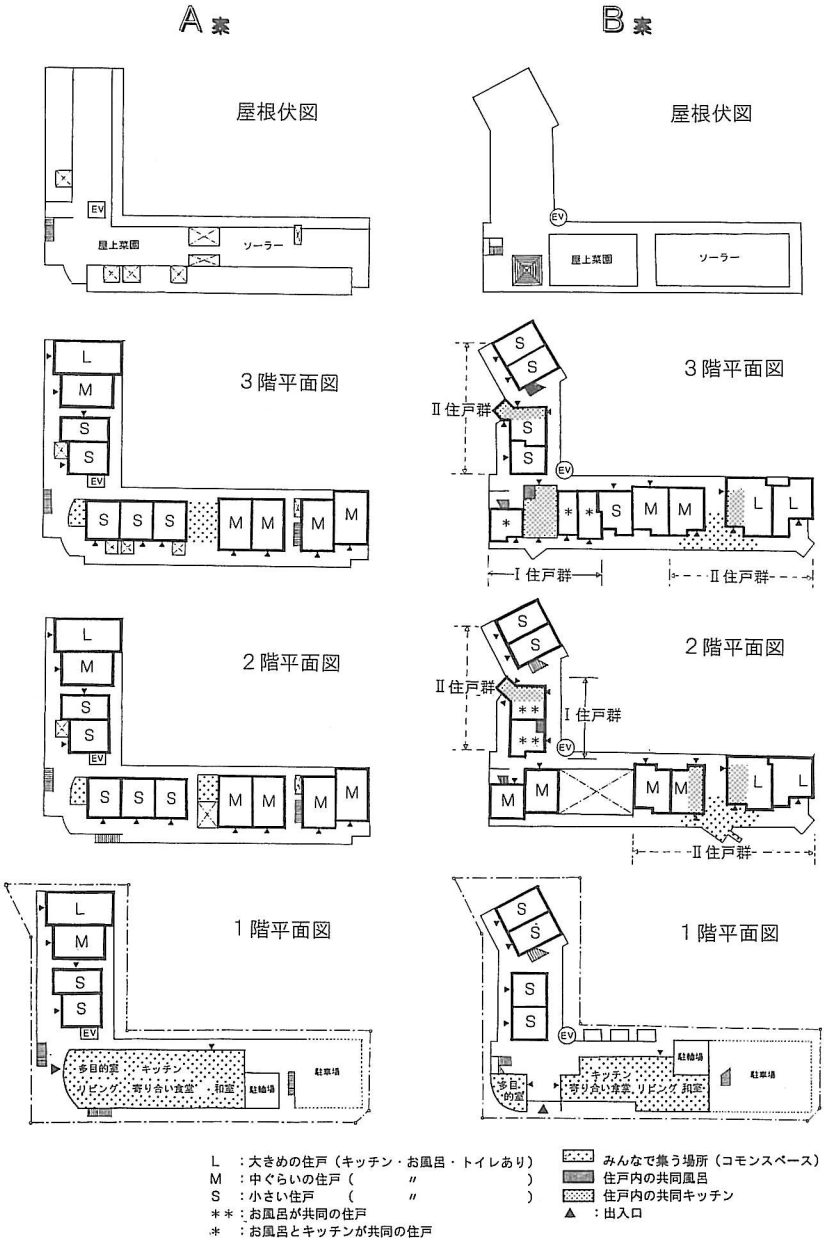


図３　疑似入居者参加のワークショップで検討した二つの計画案、A案が支持された（出典：真野コレクティブハウジング研究会「神戸市営災害復興住宅コレクティブハウジング・（仮称）浜添住宅基本計画報告書」1996年12月）

なお、実施計画は、B案の建物のデザイン的なアイデアもとりいれたA案とB案の合作になりました。

第3回ワークショップも前2回同様お祭り気分ですすみました。参加者が居住者となって、日常生活行為のひとつひとつ、例えば、洗濯物を干す、夕涼みをする、協同台所・食堂での食事づくりと会食、草花を育てたい、家庭ゴミの置き場などなど、図面上にマークしていきました。こんな話になると、生活者としてベテランの女の視点は現実的で説得力があります。このワークショップで出た意見のいくつかは、実施設計に反映され、現実のものとなりました。たとえば、共同洗濯場はいらない、共同物置の設置(ちょっと大きめのロッカールーム)、つづきバルコニーに井戸端会議のできるようなたまり場の設置と邪魔にならない位置での洗濯金具の取り付け、日よけ簾をかける金具の取り付け、協同室に床暖房コーナーの設置などです。

つづいて協同生活をうまく育てていくための方策について意見を出し合い、仮設住宅で仲良くなった人がつれもって入居できるグループ入居制度や、入居予定者をできるだけ早く決定して、入居までに協同居住について話し合う会合をもつことなどが、ぜひ必要なことと支持されました。

お祭り気分ですすめられたワークショップについて、仮設住宅から参加した人たちの内心は複雑だったようです。現実の仮設住宅の生活や公営住宅にいつ当選するのかという不安など、現実のつらい気分の日々をもっと知ってほしいというやるせない気持ちがずっとありました。ワークショップの本題からはずれて、いろんな声が聞こえてきました。

「こんなん夢や。ひととき夢をみようと説得されて出て来た」

「今まで公営住宅を建てるとき、住民の声を聞いてくれたことがないのに、こんなことしてくれるのはなんでや」

「今、一番欲しいのは家だ。こんな住宅ができるんだと知った。仮設住宅では不自由だが、みんな仲良くしている。コレクティブハウジングに連れもって入居できたら、もっと協同生活を膨らますことができるという自負心はある。地元優先入居を考えてほしい」

3回のワークショップにすべて参加し、ぜひ入居したいという人も何人かでてきました。この人たちは後に採用されたグループ入居制度に応募しました。

◇難産の末のグループ募集制度

ワークショップと平行して進めてきた真野コレクティブハウジング研究会の第3回では、住宅管理課の方針が出されました。公営住宅なので公募が原則で、地元の優先枠はとれない。今回の地震では市街地が被災しており、被災の大きかった長田区には災害公営住宅が多く建設できないので、地元優先枠をとるのは難しいということです。真野地区のまちづくりを長く支援している宮西さんは研究会の当初から地元優先枠を強く要望していたので、彼にとってはとても残念な話になりました。

そしてもうひとつ、仮設住宅で仲良くなった人たちが連れもって入居できるグループ入居を採用すると、その仲良し核が入居後も固定してしまうのではないかということです。これに対してわたしは全く反対の見方をしています。新しい住まい方の住宅には、個々の世帯単位で入居するよりも、協同居住を理解したグループ核がいくつかあるほうが、全体の協同居住は立ち上がりやすい。沢山の小さなアメーバーがひとつにまとまる時間よりも、いくつかの大きめのアメーバーがたくましい触手を伸ばしていけば、ひとつにまとまる時間は早いし、まとまりやすいと思うと主張しました。

第4回研究会では住宅管理課から、グループ募集制度は公営住宅法に抵触はしないので、理論的には可能性はあるが、技術的に課題が多いという話が出されました。技術的課題とは、募集の時に建物の住戸配置図上に、グループ募集住戸と個人募集住戸との色分けが必要であるということ。そうなると、グループ募集の戸数を全体の建設戸数の中でどれぐらいにするのかを決めなければならない。なお、検討の結果、グループ入居と個人入居とは当選確率上には問題がないということは分ったが、さらに県との調整も必要であるなど、管理課としては新制度の創設に対して検討課題が多く、内部で各視点からの検討をすすめているとのことでした。でも全体としては、この件は実現に向かって前進しているようであり、うれしく感じました。

10日ほど後、ある新聞紙上に兵庫県と神戸市がコレクティブハウジングにグループ募集制度を採用するという記事が掲載されましたが、これは記者の勇み足だったようです。

さらに数日後の9月17日に、真野コレクティブハウジングの基本計画の内容を、真野コレクティブハウジング研究会の名でプレス発表しました。グループ募集については今後の検討課題ということにしました。翌日の各新聞には大きく紙面をとって、建物や協同居住のイメージ図が載らせれました。わたしはやっと夢が実現する保証を得たと思い、胸躍る気がしました。

今後のスケジュールは、10月に実施設計をあげ、12月に着工し、97年の夏の完成を目指すというものです。研究会は今までの住宅事業課の窓口から住宅管理課に移って、入居者の募集方法、協同スペースの運営・管理方法や協同居住のルールづくり、入居者の支援などについて検討をすすめることになり、研究会のメンバーも少し入れ替わり、ハード面からソフト面の検討に重点をおくことになりました。

11月の研究会で保健福祉局の方針として、コレクティブハウジングは住民の自主的な協同居住なので

長田・真野地区の高齢者協同居住型集合住宅

南側に廊下 交流の場

市と研究会

建物の基本計画まとまる
下町長屋風で計29戸

高齢者が共同生活をする「コレクティブハウジング」（協同居住型集合住宅）を、神戸市長田区の真野地区に建設する計画で、神戸市と真野コレクティブハウジング研究会（宮西悠司座長、十人）は十七日、建物の基本計画を発表した。公営住宅としては全国で初めて廊下を南側に配置し、太陽の光を楽しみながら交流できる空間を設けるなど、コミュニティースペースの確保に配慮。建物は周辺の下町風情に合わせた三階建ての「下町長屋風」にする。

来年夏の完成めざす

コレクティブハウジングして生活できる一方、共同は、入居者が各住戸で独立の食堂や台所、談話室もあり、入居者が助け合って暮らせる工夫をしている。

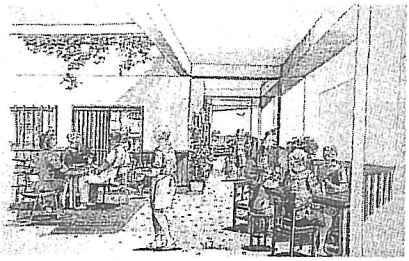
高齢者の孤独死の防止のほか、高齢者が社会とつながりを持って暮らせる新しい居住形態として、震災後、注目されており、神戸市が真野地区、県も市内五カ所で建設することになった。

基本計画では、真野地区内の長田区浜添通三の千二百平方㍍の市有地に、鉄筋三階建ての集合住宅を建設し、1DK－3DKの二十九戸を確保。そのうち、二十一戸を高齢世帯、八戸を一般世帯向けとし、一階には食堂、談話室のほか、地域住民が集える多目的室などの共同スペースを設ける。

公営住宅では通常、採光条件のよい南側に住戸の窓を並べ、北側に廊下をつくるが、コレクティブハウジングでは、あえて南側に廊下を設置。下町長屋の軒先で住民が集うような雰囲気を演出するほか、廊下には入居者が集える「たまり場」もつくる。また、共同スペースの維持費の節約のため、屋上に太陽光の発電整備を設置するほか、屋上菜園も用意する。

一方、今後の検討課題として、気の合った高齢者によるグループ入居、入居者決定後の「協同生活」のためのトレーニングの実施、入居者間のルールづくりなどを挙げており、市はさらに検討を進める方針。

市は今回示された基本計画をもとに十月には実施設計を確定、十一月着工、来年夏の完成を目指している。



真野地区に建設されるコレクティブハウジングのイメージ

図4　真野コレクティブハウジングの基本計画を報じる新聞記事（神戸新聞 1996年9月18日）

災害復興公的賃貸住宅募集

親しくなった人とどうぞ
県がグループ入居採用

来年二～三月に予定されている災害復興公的賃貸住宅の第三次一元募集で、兵庫県は十三日、仮設住宅から友人や知人らで一緒に同じ団地に転居できる「グループ入居」を採用することを明らかにした。第一弾は神戸市長田区内に建設中の県営片山団地。具体的な募集方法は検討中で、県は「単身の高齢被災者の皆さんに友人同士で入居してもらえれば」としている。

同日開かれた県議会決算特別委員会で、溜水義久副知事が質問に答えた。

県によると、これまで過去二回の募集で、仮設住宅の入居者から「せっかく親しくなった人たちと離れたくない」という要望があった。アンケート調査でも「友人同士で入りたい」とする希望があり、「コミュニティーを維持する方策の一つ」（県都市住宅部）としてグループ入居を検討していた。

片山団地では六戸を予定。居間や食堂を共用する高齢者用コレクティブ・ハウジング（協同居住型集合住宅）の形式で来春完成する。

グループを何人単位とするかなどの募集方法は検討中だが、県は「他の応募者と公平性が欠けることのないよう配慮したい」としている。次回以降の募集でも、すでに事業化しているコレクティブ・ハウジングの県営四団地（百二十五戸）、神戸市営一団地（三十戸）に採用する方針。

図5　グループ募集制度の採用をとりあげた新聞記事（神戸新聞 1996年12月14日）

コーディネイター（協同居住のための推進役）をおくことは考えていない、地域力のある真野地区でモデル事業を展開しようとしているのだから地元で支えてほしいと提示されました。ただ、真野コレクティブハウジングのシルバーハウジング（高齢者賃貸公営住宅。29戸のうちの21戸が該当する）に対する生活援助員がコーディネイターの一員として係わることは可能であるということです。しかし、シルバーハウジングプロジェクトの生活援助員の業務は全般に居住者の安否を見守るという消極的な係わりで、コレクティブハウジングのコーディネイターは協同居住の展開を促すために積極的な係わりが必要なので、生活援助員にそれを期待するには新たな方策の裏付けがいると思われます。

住宅管理課はグループ募集制度については建設省が難しいと言っているといいます。公営住宅法の改正によって、社会福祉法人等が公営住宅を借りてグループホームとして使用できるようになり、そのための団体募集は可能だが、その際は家賃補助は認められないので、コレクティブハウジングでグループ募集するとそれに準ずることになるということです。わたしたち研究会の委員からは、今回のグループ募集の提案は、震災復興の経験からきており、「共に住む」ということのメリットを実現するためには仮設住宅からのコミュニティの継続が重要であるということを主張しました。震災によってそれまで長らく住んでいた地域のコミュニティが消失し、仮設住宅で築いたコミュニティからも散り散りになって、また新しい地でのコミュニティを築くというのは、高齢者にとっては、大変しんどいことです。社会福祉法人のグループホームとしての団体募集でなく、オープンなグループ募集として新しい制度が必要であると主張しました。

「ニーズや必要性は十分にあるんやから、国を説得するのは、もう神戸市の担当者の話術にかかっていると思うよ」と、ひどいことをわたしは言いました。

12月に入っても国はまだ難色を示していたようですが、住宅管理課長が国に説明に行きました。一方、12月半ば県の都市住宅部建設課長に電話をすると、「建設省の住宅局長と審議官は、地元がちゃんとした方法をもって来れば良いと言っている。県営の片山コレクティブハウジングは6人のグループ募集をする。コレクティブハウジング以外の復興公営住宅でもグループ募集制度を取り入れたいと思っている」との返事です。前後して県副知事は県議会での質問に答えて、グループ募集制度を採用することを正式に発言し、それが新聞に載りました。

市と県はなんでもっと仲良く意志の疎通をはかれないのかしら…。

（なお、市、県、国のやりとりの詳細はわたしたちには伝わらないので、このくだりはあくまでも神戸市から伝えられた内容からの記述です）。

（3）募集要項の検討・出前説明会・応募者像

96年の年末にグループ募集ができることが決まり、建物の建設も始まったので、募集に向けての要項の検討とパンフレットづくりが急がれました。募集は97年2月末ぐらいということです。パンフレットは初めてコレクティブハウジングのことを聞く人たちが、どんな住まいなのかをイメージができ、グループ募集のことや協同居住のための費用負担などのことを理解してもらえるような分かりやすいものをつくらなければならなりません。これまで役所がつくっていた募集案内冊子では到底だめです。

◇募集要項の検討

募集にあたって決めなければならないことがいっぱいあります。

- 住宅のネーミング
- グループ募集のグループの大きさ
- グループ応募枠と一般応募枠の比率
- グループ応募と一般応募の抽選方法
- 申し込むための条件／入居資格のある人像（災害復興公営住宅の全般的な申込資格に加えて、コレクティブハウジングへの申込資格。例えば、コレクティブハウジングの理解度の審査など）

図６　真野ふれあい住宅のパンフレットの一部

・協同居住のサポーターの必要性（協同居住の核になるような人／シルバーハウジングプロジェクトに生活援助員の設置が制度化されているように）
・リーダーとなるような人（またはグループ）の特定入居の可能性
・入居前の協同居住の学習等のプログラムと入居予定者の参加義務
・募集前のＰＲの方法と説明会（一般的な説明会と応募者が見えてきた時の説明会）
・協同居住のための共益費の予測額の算定

などなどについて、研究会では侃々諤々議論しました。

たとえば、住宅の抽選時、最後に３戸が残ったが、それに５世帯のグループが当選した場合、５世帯のうち３世帯をどうやって決めるのか。災害公営住宅に早

く入りたいので、コレクティブハウジングに申し込むというのでは、入居後の協同居住をつぶしてしまう恐れがあります。コレクティブハウジングがいやな人には応募を見合わせてもらうにはどうすればいいのか（これについては入居後にいくつかの住宅で現実の問題となっています）。

住宅事業課や管理課の課長はじめ担当者は、ともすれば舞い上がりそうな研究会の発案に手綱をかけ、研究会のやりとりの後では庁内調整をするということを何回か繰り返し、募集要項が決定しました。住宅のネーミングは、「真野ふれあい住宅」ということで落ち着きました。パンフレットには次のように記しています。

☆コレクティブハウジングって何やの？

それぞれの住戸は、台所、浴室、便所も備えた独立した住宅で、その延長としての共用スペース（協同の食堂、台所、談話室など）がある集合住宅。真野ふれあい住宅は、高齢者だけでなく一般世帯も入居し、多世代が共に住む暮らし方で、日本では初めての試みです。

☆だれが入居できるの？

申し込みできる人は、次の①～③すべての要件と、④または⑤の要件に当てはまる方です。

①災害公営住宅の入居資格を有すること。

②コレクティブハウジングの趣旨を理解し、円滑な生活が営めること。

例えばこんな人…

- 近所付き合いに楽しさを見いだせる人
- 時にはいっしょに食事をつくったり食べたりすることを望む人
- 共用スペースで草花を育てることが好きな人
- 共用スペースを掃除することをいとわない人、など。

③協同居住をするための運営規則や協同生活のルールを遵守できること。

---

④シルバーハイツ〔注8〕の単身者向き住宅は、60歳以上の方で現に一人で住んでおり、今後も同居しようとする親族がいないこと。世帯向き住宅は、いずれか一方が60歳以上の夫婦のみの世帯か、60歳以上の者のみからなる民法上の親族関係にある世帯であること。

⑤一般世帯用住宅は、面積による申し込み制限以上の世帯であること。

☆シルバーって何やの？

「シルバーハイツ」とは、お年寄り向けに住戸内の段差をなくしたり、もしもの時には自動的に報知器が鳴ったり、緊急時の通報装置などがほどこされている住宅のことです。また「ライフサポートアドバイザー」という生活援助員が、安否確認、生活相談などに応じてくれます。

☆募集はどうなってるの？

●募集について

この住宅の募集については、1世帯でもグループでも応募できますが、グループで応募できる方は、応急仮設住宅に入居されている方のみです。

グループで応募された場合、次の組み合わせのグループとします。

シルバー世帯とシルバー世帯、シルバー世帯と一般世帯、一般世帯と一般世帯の組み合わせのグループ。

ただし、シルバー世帯と一般世帯の場合は親子関係にないこと、一般世帯と一般世帯の場合は親族関係にないことが必要です。

グループの規模は2世帯から最大5世帯とします。

●抽選方法

仮当選の抽選は、1世帯の申込書とグループの代表者の申込書で抽選します。

抽選は、コレクティブハウジングの特性上、最初にグループの中から3グループを抽選した後、1世帯での申込書とグループでの申込書を合わせて抽選します。

住宅の種類別戸数に達するまで抽選を行います。このため種類別の残戸数以上のグループを引き当て

た場合、残戸数にあたる世帯のみ当選とします。（ただし、グループのうち、1世帯ででも入居を希望するグループに限ります。）

仮補欠の抽選は、仮当選以外のグループでのうち1世帯ででも入居を希望するグループの世帯申込書と仮当選以外の1世帯とでの申込書を抽選します。このため仮補欠者は1世帯単位となります。

●資格審査について

グループのうち、失格者がいればその方のみ失格とし、他の方は当選とします。

※募集についての詳細は、「災害復興（賃貸）住宅入居申込案内書」の中の市営浜添住宅（真野ふれあい住宅）のご案内を参照してください。

☆申込む前にちょっとご了解！

当選者および補欠者となった方は、協同居住の仕組みについて、一定の学習・擬似体験等（トレーニング）に参加していただきます。参加されない場合は、当選・補欠の資格を取り消されることがあります。

入居者全員で協同生活に必要なルールを決めていただきます。

協同のスペースで使用するテーブル、椅子、電化製品、什器等の備品類は、入居者の皆さんで購入していただきます。

協同スペースは入居者全員が利用するためのものですので、ここで必要な光熱水費やエレベーター等の電気料金等は、入居者全員で負担していただきます。（月額4000～6000円の見込み）。

協同スペースの清掃や簡単な修繕等は、入居者の方で実施していただきます。

これはできるだけ分かりやすく書いたつもりですが、まだ理解しにくい点も多くありそうです。特に募集に関する項目はややこしく、現実にはグループ応募はしっかりしたサポーターの助けが必要になりました。

〔注8〕神戸市はシルバーハウジングプロジェクト神戸市営住宅をシルバーハイツと名付けています。

◇仮設住宅を巡っての出前説明会

8300戸余りの災害復興公営住宅の第3次募集（97年2月27日から3月19日）が始まりました。県営、市営、公団住宅などを合わせて一元化して募集するもので、募集案内冊子は分厚く、小さな字でぎっしり書かれており、本当に分かりにくいものです。そのため、神戸市では全仮設住宅を対象に募集相談会をスタートさせ、訪れた居住者に個別の希望や事情を聞きながら申し込み方法をアドバイスしたり、仮設住宅のふれあいセンター50カ所に設置されたパソコンで各住宅ごとの応募状況が分かるようにしました。

今回の募集には、新しい試みが三つあります。コレクティブハウジング、グループ入居制度およびペットと住める住宅です。コレクティブハウジングは神戸市営真野ふれあい住宅と兵庫県営片山ふれあい住宅の2カ所で、グループ入居制度はコレクティブハウジングと他に6住宅でも適応され、ペット共生住宅は県営の2住宅です。

コレクティブハウジング事業推進応援団は、コレクティブハウジングの意味を本当に理解し、協同居住を希望する人が入居できるようにしたいという思いから、仮設住宅を巡っての独自の説明会を展開することにしました。グループ入居制度についても募集要項が複雑になっており、分かりやすい説明が必要です。

出前説明会を前に、コレクティブ応援団は公開ミーティングをもち、応援団のメンバーやボランティ

神戸のコレクティブハウジング

入居者募集を前に説明会

初のグループ応募

ボランティア団体　仮設住民ら聴き入る

全国にさきがけて神戸市長田区の二カ所に建築される「公営協同住宅集合住宅」（コレクティブハウジング）の入居者募集（今月二十七日から）を前に、同住宅の実現に向けて活動してきたボランティア団体「コレクティブハウジング事業推進応援団」のメンバーらが十三日、同市西区狩場台の狩場第二仮設住宅のふれあいセンターで、住民を対象にした説明会を行った。仮設住宅で育まれた良好な近所づきあいを大切にした「グループ募集」など初めての試みが盛り込まれているだけに、応募要綱も複雑になっており、住民らは真剣に聞き入っていた。

コレクティブハウジング　みんなでふれあうことができる防止し、孤立感をやわらげる効果があるとされる。

今月二十七日から始まる災害復興賃貸住宅の第三次募集に盛り込まれた神戸市長田区の「公営片山住宅」（六戸）と「神戸市営浜添住宅」（二十九戸）が、コレクティブハウジングとして設置され、入居者募集の対象となる。

今回の募集では、仮設住宅で育まれた近所づきあいを壊さないように、仲の良い住民が複数で申し込む「グループ申し込み」も奨励されるため、応募要綱が複雑になっている。このため、同団体が被災地の仮設住宅を回り説明会を行っている。

この日は、説明を聞いたお年寄りから「何世帯までグループ応募ができるのか」「高齢者などの弱者には有利なのか」などの質問が出た。

講師を務めた石東直子さんは「初めての試みなので、戸惑いがあるかもしれない。出来るだけ多くの仮設住宅を巡回してバックアップしたい」と話した。

コレクティブハウジングの入居者募集についての解説をするため、ボランティア団体が開いた説明会＝神戸市西区狩場台の狩場第2仮設住宅ふれあいセンター

図7　コレクティブハウジングの出前説明会が掲載された新聞記事（産経新聞 1997年2月14日）

アなど40名余りが集まって、説明方法などを検討しました。ほとんどの被災者は元いた地域に戻りたいという強い願望があり、元いた地域に建つ災害公営住宅に申し込むので、長田区に建設される二つのコレクティブハウジングの応募者は元長田区にいた人たちがほとんどでしょう。そこで、長田区内の仮設住宅と長田区の被災者が多く入居している西神ニュータウンに建てられている仮設住宅に、出前説明に行くことにしました。実際に活動できるメンバーは限られているので、真野地区内の仮設住宅、長田区の地域型仮設住宅、西神ニュータウンのいくつかの仮設へは応援団のメンバーが出かけることにし、他はいろんな人に協力を求めて、独自のPR活動をお願いしました。

応援団の強力なメンバーの一人上田耕蔵さん（神戸協同病院の院長）は、「コレクティブハウジング・シルバーハウジング・グループ募集について」というとても分かりやすい説明用冊子を作成してくれました。一問一答形式で、誰にでも分か

りやすく、出前説明会スタッフの手引書になりました。彼にとっては専門外の住宅のことなのに、専門家顔負けの出来栄えです。下町で多くの高齢者と日々接している病院の医師ならではの心くばりに、上田さんの才覚が結び付いたものです。

まず、出初めに長楽公園地域型仮設住宅に上田さんとわたしは出かけました。ふれあいセンターに30名程の入居者が集まられました。多くがお年寄りです。上田さんは説明もうまい。ユーモアを交えて、事例を出しながら、コレクティブハウジングとはどんな住まいなのか、どこに建つのか、ひとつひとつ吸収してもらえるような分かりやすい解説です。参加者は熱心に聞き入っています。彼の人柄の良さと説明のうまさに加えて、お医者さんの社会的信頼度の大きさを痛感しました。わたしたちが都市計画プランナーですといっても、何屋さん?、なんで来たん?ということになりそうですが、院長ですというと、みんなの目が違ってくるように感じます。グループ入居制度については、頭で理解しても対応できるものではなく、グループのまとまりから、申し込み用紙の書き方まで、誰かが具体的にサポートしなければならないようです。

上田さんは殊の外熱心で、その後に再度この地域型仮設住宅に一人で出前説明会に出かけた

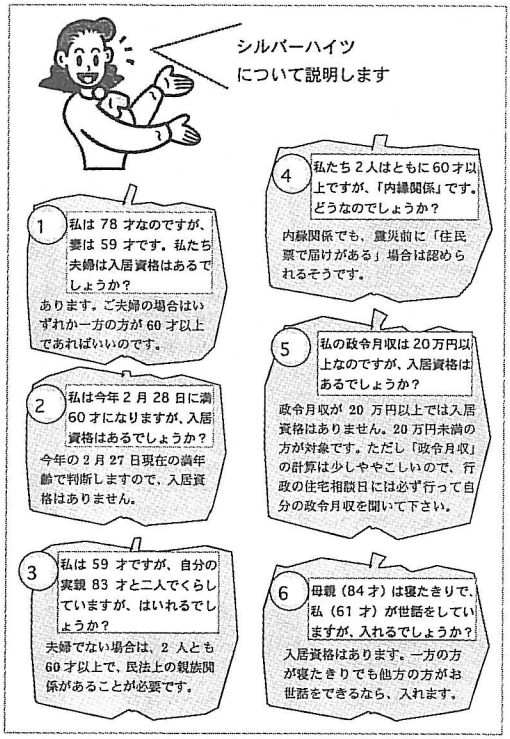


図8　上田耕蔵さんが作った「コレクティブハウジング・シルバーハイツのグループ募集の手引きについて」より

図9　出前説明会で説明する上田耕蔵さん（長楽公園地域型仮設住宅で）

り、他の仮設住宅でも出前説明会をしました。

以下は出前説明会についての上田さんの感想文です。

これまで3カ所で「コレクティブ、シルバー住宅、グループ応募」に絞った説明会をコレクティブハウジング事業推進応援団として行ったが、仮設住宅によって反応にかなりの違いがあった。

① 2月21日、長楽公園地域型仮設住宅（約50世帯入居）：住民は約30人集まり、食い入るように熱心に聞いてくれた。大半はコレクティブ住宅を知っていた。（長田コレクティブケアネットワークでは96年7月頃、仮設居住の改善策について懇談したが、その際、コレクティブ住宅についても紹介したので）。説明の後、真野ふれあい住宅への希望者を聞いたが、4名の手が上がった。うち2名は40才代の若い世帯を含んだグループであった。「片山ふれあい住宅」も4名くらいの手が上がった。やや活気のある高齢者の方々であった。シルバー住宅の希望は東尻池第2住宅に3名くらいの挙手があったが、なんとか地元で周囲の援助を期待したいという印象の高齢者であった。うまく住宅ごとの違いが希望者にも反映しているように思った。グループづくりは生活支援員の坂本さんがうまくエスコートしてくれているようだが、3グループができそうとのことである。

② 2月26日、星陵台第3仮設住宅（約200世帯）：ここは今年の1月18、19日に仮設住民健診をしたところで、当日は結果の解説日であったが、「ついでに」住宅募集の説明もさせてもらった。約40人の方が参加された。長楽公園地域型仮設住宅ほどではないが、熱心に説明を聞いてくれた。コレクティブのことを知っていた人はほとんどいなかった。説明のあと希望があるかどうか聞いたが、コレクティブに手を挙げる人はい

なかったが、シルバー住宅は5人くらいが希望していた。西神南住宅を希望している人が2〜3人いたが、理由を聞くと「駅前で便利」という答えが返ってきた。その他は前居住地近くのシルバー住宅（東尻池）を希望する人がいた。北舞子第4住宅のグループ応募には数人が考えていた。

③　2月28日、下中島地域型仮設住宅（約30世帯）：会長さんは僕の患者さんである。約20人が集まって、最前列の男性のお年寄りが居眠りされた以外はよく聞いてくれたものの、やや活気がなかった。コレクティブ住宅について知っている人は2〜3人程度であった。関心は非常にもってくれたが、コレクティブに手を挙げる人は出なかった。シルバー住宅は二人ぐらいの手があがった。グループ応募に手を挙げる人はいなかった。仮設住宅に馴れたのでここに一生住んでもよいという雰囲気を少し感じてしまった。3カ所の説明でコレクティブ住宅の応募に一定の条件があるのに気づかされた。まず長田南部に帰りたいと思うことである。住宅の形態より場所が優先されている。その次に「コレクティブ住宅を選択するかどうか」がくるが、事前に知っていることが必要である。始めて聞いただけでは必ずしも応募意欲までに繋がらない。地域型仮設住宅では生活支援員の捉え方・助言も大きな要因であると考えられた。

もう一人出前説明会に熱心な人に、森栗茂一さん（大阪外国語大学助教授）がいます。彼は一人で仮設住宅を個別訪問して説明したり、西神ニュータウンの仮設住宅での説明会を次々とセットし、車の用意もしてくれました。仮設住宅での出前説明会は直接飛び込んで行ってできるものではありません。今までその住宅でボランティアなどをしていて、入居者との信頼関係が築かれていて、「コレクティブハウジングの説明会に来てもらったらどうお？」との問いかけに入居者の納得があってはじめて、約束の時間に入居者が集まってくれることになります。小林さん、天川さんとわたしはセットされた説明会をこなしていきました。わたしは当時はまだ千里ニュータウン（北大阪）に住んでいたので、遠く神戸西部

図10　真野地区内の仮設住宅を1軒ずつ回って説明する森栗茂一さん（右端）

の郊外ニュータウンに建つ仮設住宅まで出かけるのは2時間余りかかりました。氷雨の降る日の西神ニュータウンはとても寒かったですが、ふれあいセンターには沢山の人が待っていてくださり、熱心に耳を傾けてくださいました。行きは張り切っていて元気いっぱいでも話を終えての帰りはグッタリ疲れを感じる日が少なくありませんでした。

そんなある日、出前説明会の会場で思いがけない人に再会しました。わたしの出た高校（長田区にある兵庫高校）のそばの本屋さんのご夫婦です。住宅が全壊してこの西神ニュータウンの仮設住宅にいるとのことです。兵庫高校の南の室内（むろうち）商店街は被害がひどく、アーケードもろともぺっしゃんこになった様子が、テレビで映し出されていました。高校時代に馴れ親しんだあの町も消えてしまったんだ……。本屋のおっちゃんの顔を覚えていたわけではなく、話の中で偶然にも分かったことなのですが、40年近くたっての再会に涙が出ました。

◆応募状況

97年2月27日から始まった復興住宅の第3次募集のコレクティブハウジングに対する応募状況が気になっていました。日々の住宅ごとの応募状況は仮設住宅のふれあいセンターや三宮のフェニックスプラザ（震災復興支援館）のコンピューターで知ることができます。わたしは三宮に出るたびに、フェニック

スプラザに立ち寄ってチェックしました。出足はよくありません。2週間目に入って真野ふれあい住宅はやっと0.8倍になりましたが、片山住宅は応募なしです。

ここで再び、上田さんの感想を紹介しましょう。

3月12日のコレクティブハウジング事業推進応援団第6回ミーティングで、僕はコレクティブについての申込者の捉え方をネガティブに紹介した。翌3月13日、長楽公園地域型仮設住宅の申込状況を生活支援員の坂本さんに聞いてみた。11日に5世帯ごと2グループ合計10世帯が申し込んだとのことである。続いて最も僕が気になっている点、「なぜコレクティブに申し込んだのか?」「7日の話しでは、みんなはふれあい住宅の意義を消極的に捉えているように聞こえた。とにかく場所の問題が優先されて、一緒に住む点は、まあなんとかやっていけそうだ、というように。実際そうなんだろうか?」と再度聞いてみた。坂本さんは「コレクティブな住み方に期待は大きい。ただ実際住むとなると、不安が大きいため期待について言えなかった。先生はがっかりしただろうと思った」と教えてくれた。

彼女からの聞いたことをもとにコレクティブ応募者の考えをまとめてみた。不安は共益費をみんなちゃんと払ってもらえるか。いちばんもめるとしたらお金である。共益費が一体いくらになるか不安である。年金で生活がキチキチの人は多い。生活保護の人も共益費までもらえない。「住宅の空きができたら負担が増えるので早く埋まって欲しい」という人もいる。最低レベルの人の生活に合わせた運営がいる。わがままな人が入ってこないか心配である。訓練期間は猫をかぶっていてもその後で態度を変えてくる人がいないか。仮設住宅ではそういう人がいた。次に(空き室に)入ってくる人がどうなのかも心配である。せめて入居後1年間くらいは第三者が入ってフォーローしていってもらいたい。

期待は実は大きく、若い人も希望している。年いってから親類縁者がいない人は特にそう思っている。母と

二人暮らしの40才代の女性は「自分の老後を考えると知った人がいる方がいい。にぎやかな所の方がいい」、寝たきりの母の介護をしている60才代の女性は、「お母さんに無理言われた時、愚痴聞いてくれる人が横にいる方がいい」と言う。高齢者はもっと期待は大きい。「さみしくない住宅だ」「ひとりきりでは生きられへん」と言う。さらに普段から頼れている人の存在が大きい。「わたしは字が書けない。あの人やったら書いてくれる。よう世話してくれるし。困った時は助けてくれる」。リーダーとなる若い人、あるいは高齢者を軸としてグループができており、みんなは「真野でなくて、なぜこの長楽公園の近くにできへんのやろか」と言っている。高齢者にとって知っている土地と頼りになる人がいることが大事。

最終の応募状況は真野ふれあい住宅は住戸型によってちがいますが、全体では2.3倍で、グループ応募は5件でした。片山ふれあい住宅の応募はゼロでした。片山ふれあい住宅の募集条件は高齢者の一人世帯が6人でグループをつくって応募することというものであり、わたしは当初からこの条件では応募者はいないだろうと思っていました（この話については、後章で述べています）。

真野ふれあい住宅の応募者像をみてみましょう。

29戸に68世帯の応募があり、その内訳はシルバーハウジングは2.2倍（1DK＝15戸募集）と0.8倍（2DK＝6戸）で、一般住宅は2.7倍（2DK＝6戸）と7.0倍（3DK＝2戸）です。仮設住宅で仲良くなった人のグループ応募は5件（24世帯）です。応募世帯の84％が震災前も同じ長田区に住んでいました。神戸市内のシルバーハウジングが軒並み高倍率なのに当住宅の応募が低かった原因のひとつは、高齢者にコレクティブの生活イメージが十分に分かるような情報が届かなかったことによるものと思われます。

一般世帯向けの住宅は募集戸数が少ないですが、応募者にいくつかの属性がうかがえました。2DK

の応募者（16世帯で21人）は単身世帯が11、母子世帯が3、夫婦と母の世帯が3で単身者が7割を占めます。21人の年齢構成は20代と30代で1／3、40代と50代で1／3、60代以上が1／3で、比較的若い層です。3DKの応募者（14世帯で49人）は母子または父子世帯が7、夫婦と子供世帯が5、夫婦と母世帯が2です。母子世帯が半数を占め、子供が18歳未満の世帯がほぼ半数を占め、49人の年齢構成は18歳未満34％、20代と30代で26％と若年層が多くなっています。

ひとつの事例だけの分析ですが、共に住まうことの安全性と安心感、そしてふれあう暮らし方のコレクティブハウジングは高齢者に限らず、単身世帯、一人親世帯や幼児のいる世帯等にもニーズがありそうです。

（4）入居前協同居住の学習・体験ワークショップ／暮らしのこん談会

◇ふれあいの輪が結びはじめた感動の一日

97年7月1日は感動の一日でした。「やっと、ここまで来た！」という安堵と、「はや、ここまで来たの？」という戸惑いが交差しました。

神戸市営コレクティブハウジング・真野ふれあい住宅の入居予定者たちによる「入居前協同居住の学習・体験＝暮らしのこん談会」がスタートしました。

真野ふれあい住宅の入居予定者（28世帯43人、1住戸未定）は次のようです。

高齢者住宅1DK：　15人　平均年齢78歳
高齢者住宅2DK：5世帯10人　平均年齢67歳
一般住宅　2DK：6世帯9人
一般住宅　3DK：2世帯9人

10時半から、真野ふれあい住宅協同居住の学習・体験等運営委員会の専門サポーターと学生サポーター（合わせて30名弱）で進行の打ち合わせをしました。入居予定者の年齢を見ると、後期高齢者が圧倒

図 11　入居前の暮らしのこん談会でグループに分れ語り合う

的に多いので、事前に準備したワークショップの進行スケジュールにこだわらずに参加者の顔を見て臨機応変に対応しようということを確認しました。学生サポーターは数カ所の大学の大学院生と学生で、中にはワークショップのベテランもいますが、初めてで緊張気味の学生もいます。打ち合わせの後、会場を設営したり、各テーブルにワークショップグッズをそろえたり、図面の着色をしたり、準備がどんどん進み、サポーターたちの心がひとつになった感動の光景でした。

ワークショップは1時半の開始なのに、12時半にはもう一人がみえました。須磨区の仮設住宅からタクシーを利用して来られたとのことです。ステッキをもって帽子をかぶりポーチを抱えた86歳の紳士。今日の日を楽しみにしていらしたのならいいなーと思うのですが。1時すぎには数名が到着。お年寄りの到着は早いわ。サポーターたちは部屋の隅でまだホカ弁を食べていました。

主客続々到着。介添えボランティアに連れられた人、シルバーカーを押しての人、3〜4人で連れもっての人、杖をついた人、おめかししていらした人などなど。

グループ応募組は固まって座り、個人応募組は後寄りの離れた席を選ばれます。真野ふれあい住宅は4グループ（18世帯）が当選し、あとの10世帯は個人応募です。これからみんなが大家族のようになろうとする時、いつまでも同じグループ応募組が固まっていてはよくないので、茶話会の席はくじで決めました。入居予定者の中に数人の顔見知りがいます。コレクティブハウジング事業推進応援団が仮設住宅へ出前説明会に出かけた時会った人、真野ふれあい住宅

の計画づくりワークショップに参加していた人、仮設住宅に花の苗を植えに行った時に知り合った人たちです。その一人に元気なおばさんがいました。「えっ 当たったの。よかったねー」と声をかけると、「そう、そう、わたしらみんな当たったんよ。うれしいわー」と、両手でわたしの手をギュッと握ってこられました。そして、自分の椅子の半分を開けて「ここ座って」と。二つのお尻が小さな椅子からはみ出します。

入居予定者は3世帯が欠席で25世帯26名、それを上回る数のサポーター、神戸市住宅局建設課と管理課の職員、見学者と報道陣等の総出80名ほどでワークショップは始まりました。神戸市の若手職員が作成した真野ふれあい住宅1階にある協同スペースの1／30模型はなかなかのものです。まず、家主の管理課長のあいさつです。「全国で初めての試みの公営コレクティブハウジングは入居者の方々がモデルとなるような新しい住まい方を築いてほしい。そのために入居前のこん談会を、来年1月の入居までに何回か開きたい。今日のプログラムはサポーターに任せる」ということで、ワークショップ運営委員にバトンが渡されました。

続いて、サポーターの紹介、コレクティブハウジングの説明と進み、コレクティブハウジングの住まい方イメージを膨らませるためのスライドに入りました。ここまで運営委員主導で進み、少し場の雰囲気に馴れたところで、誕生月順に輪になって座り自己紹介に移りました。輪になって座れるようにサッと椅子を並べかえようとしましたが、ちょっと待って！　立ち上がりが困難で移動がスムーズにいかない人、誕生月に関係なく知り合い同士くっついて座ってしまう人、トイレにたってなかなか戻って来ない人……。まっいいか！、これからお付き合いしていく人たちの特性です。

誕生月と名前の自己紹介は進み、その座順から5グループに別れて、テーブルに移動しての茶話会で

す。1テーブルは4〜6名の主客とほぼ同数のサポーターが座りました。

さぁ、ここからが本番！

「なんでこの住宅に申し込みはったん？」

「この住宅でどんなことがしたいですか？」

「なにが得意ですか？」

「今、なにか不安に思ってられますか？」

などなど、おおかた孫や子供世代にあたるサポーターから問いかけられ、一人ひとりの思いが語られていきます。茶話会記録から何人かの住人像を写してみます。

- 今の仮設住宅から近いので申し込んだ。夕涼みしながらおしゃべりしている。入居してからはあんなこともしたい、こんなこともしたいと考えている。園芸が好き。ペットは嫌い。前からコレクティブに関心があり、自分の住みたいのはこれだと思っていた。計画づくりのワークショップに3回とも参加した。コレクティブハウジングの顔となる玄関は花いっぱいにしたい。
- みんなで集まってご飯をたべるのが大好き。まっ先にしたいことのひとつ。
- ひとりで入居するが不安はない。協同室でおしゃべりできるのが楽しみ。新しい出会いも楽しみ。同じ仮設住宅からの6人の当選者ときた。仲良しで、一緒にラジオ体操もしている。今日のワークショップだけでもみんな集まっておしゃべりできてうれしい。
- 馴れた人と住めるのは心強い。震災後息子の家に移ったが周りにしゃべる人がなく、ノイローゼになった。仮設住宅のふれあいセンターでみんなで話し合っていく中で治った。ふれあいセンターでカラ

オケ、体操、トランプ、おしゃべり等して仲良くなった4人でグループ応募した。2人は足が悪いので支え合ってあげないと。住戸の位置も隣同士になって住めたらいいのに。若い人としゃべると、わたしらも若返る。この輪を広げていきたい。新しいことにも挑戦したい。踊りを習ってみたい。

- 震災前、真野に住んでいた。コンピュター関係の事業をやっていたので、電気関係に強いよ。家内は新舞踊をやっていて、すぐに人と打ちとける。
- わたしは大家族で入居しますが、ひとりで入居されて寂しい人もいらっしゃると思うので、仲良くしたい。話をするのが大好き。夫は草花を育てるのが好き。
- 真野ふれあい住宅の生活で、プライバシーがどのように守られるか、老人のケアがどのように行なわれるかを、自ら見てみたいと思ったのが入居の理由。能の謡曲を若い時からやっていた。早起きなので皆に迷惑をかけないように気をつける。地震があったけど、こういう生活に移っていけて夢みたい。
- グループ応募に誘われて申し込んだ。ひとりだったら申し込まなかった。野菜作りなど見るのが好き。
- 好き嫌いはない。人見知りしない。真野ふれあい住宅の生活についてはまだよう分からへん。住みながらルールも決めていくのがいい。共益費の払い方は箱を用意して使った人がお金を入れて、他の人の負担を軽くするのもいい。みんなで食事を作りあって食べるのが好き。
- 真野ふれあい住宅の近くに住んでいた。どんな住宅か知らなかった。パンフレットを見てもよく分からない。今日のスライドを見てイメージできた。
- 昔は和裁をやっていた。今は散歩が大好き。人付き合いは好きなので、早く入居したい。建設工事の状況を見ている。
- 心配なことは共益費のこと。5千円位に収まればいい。

- 2年前まで寿司屋をやっていたが、その他いろんなことをやった。
- 長田が好き。15年くらい住んでいた。テレビで真野ふれあい住宅のこと知った。
- 不安は住んでみんと分からん。週3回医者に来てもらっているので、医者が来てくれるとうれしい。土日が寂しい。一緒に住んでる人とリハビリを兼ねた散歩がしたい。
- 申し込んだ時はどんな住宅か知らんかった。長田に住んでいたのでグループで申し込んだ。トランプやカルタして遊んで暮らしたい。自分のことは自分でやれる。早く引っ越ししたい。
- 真野に住んでいて、お菓子の箱を作っていた。去年の秋に夫が亡くなるまで仮設で二人で住んでいた。花が好きなのでふれあい住宅に花を置くところがあるのか心配。仮設での隣同士と一緒に移れてうれしい。お互い譲りあったら仲良くできると、地震を通じて分かった。不安なことは何もない。
- 調理師をしていたので、仮設でも料理を作って食べてもらっている。ふれあい住宅でもみんなで食べる時は作りますよ。400円や500円出せば、十分おいしいもんができる。3匹の猫を飼っている。犬だって猫だってみんな被災したんだからかわいそう。静かなもんやし、人に迷惑かけんように飼うから何とか一緒に暮らしたい。計画のワークショップに3回とも出た。みんなでいろいろできそうなところに魅力を感じた。老いも若きも一緒に生活できるのはいいな。大工仕事も得意なのでまかせてください。朝早く須磨の海に釣りにいき、釣ってきた魚を料理したりする。
- ひとりぼっちなので親切にしてくれる人と一緒に住みたい。花を買うのが好き。仮設の人がお風呂に付き添ってくれたりする。その人も一緒にふれあい住宅に当たってん。
- 家族みんなで昔から馴染んだ土地に住みたいと思った。心配なのは入居後の決めごとと掃除とか当番のこと。管理人みたいな人がいると助かる。門限はあるんやろか。真野ふれあい住宅は工場の中にあ

るので、緑をいっぱい育てたい。協同室は図書館みたいに本があり、くつろげるものにしたい。リラックス協同スペースを願う。

- 地震で48時間がれきに埋まっていたので足が悪くなり杖をついてる。写真が趣味。長田は自分の庭のようなもので70年間住んでいた。
- 体が弱いので知った人がいるとこに住みたかった。グループで申し込んだ。共益費のことが一番心配。

誰かと話をしたい、聞いてもらいたいという気持ちがいっぱい詰まったくす玉の紐が一気に引かれたように話が舞った。後期高齢者が多いということで準備段階で抱いていた不安は吹き飛んだようです。茶話会の間に撮影班が一人ずつの顔写真をポラロイドとデジタルカメラで撮り、写真はテーブルごとに作る「達人新聞」に張って、ユニークな5枚の壁新聞ができました。それをみんなの前で披露して、これから築く一大家族の顔ぶれを確認し、宴は終わりに近づきました。

入居前に集いをもち、心がふれあい、新しい暮らしへの不安を和らげ、希望を育んでいくことのすばらしさを実感しました。集団の中に40、50代、60代前半の若い人が混じると、その人数の2倍も3倍もの活気が感じられます。後期高齢者が多いですが全体として元気な人が多く、80歳を超えても気力があり、新しい生活に夢を抱いておられます。生活術を身につけた生活達人が揃っており、園芸、料理、大工、歌、踊り、語り部の役者も多く、楽しい協同生活が展開されそうです。

多世代が住み合うこと、グループ入居制度を採用したこと、入居前の協同居住の学習・体験等の居住サポート体制をもったこと等々は、公営住宅供給システムの大きな変革であり、神戸市にエールを送りたいです。コレクティブハウジング事業推進応援団もここまでくるのに、いくつもの関を越えたような

感があります。こん談会の散会の時、「楽しかった！うれしい！」と、一人のお母さんが抱きついてこられました。もっともっともたくさんの人が今日の笑顔をもてるようにコレクティブハウジングを増やしていきたいです。つらい体験をしたんやから、みんな一緒に幸せになろう。そのささやかなサポートをわたしたちはします。

◇意見書がでた！

第1回の「暮らしのこん談会」については、運営委員会の事前の打ち合わせで、入居予定者にかなりの高齢の方が多いので参加者の顔を見てからすすめ方を臨機応変に対応しようということにしていましたが、張り切りすぎたようです（無理をしすぎたようです）。ワークショップのベテランというサポーターに進行を任せてしまったので定番化しすぎたきらいもあったようです。

ワークショップはそれなりに盛り上がった雰囲気に包まれましたが、わたしたちサポーター側に声を発しない人への気持ちを読みとるゆとりがなかったようです。後日、一部の人たちから長田区役所へ意見書が出されました。その意見書に記されたいくつかの意見を拾ってみると、次のようです。

- サポーターは何者なのか。サポーターが多すぎる。
- 市があまりかかわっていないので心配である。市にいろいろ聞いてもらいたいことがあり、聞きたいことがある。
- 会合の時間が長すぎる。体の弱い人のことも考えてすすめてほしい（第1回の「暮らしのこん談会」

は2時間半以上に及んだ)。

- 若いサポーターのペースに高齢者はついていけない。そんなに次々問われても、意見を出すのは難しい。話し合いに慣れていない。
- サポーターの誘導尋問が多すぎる。言うてる言葉が難しくて理解できない。
- 住人での話し合いには限界がある。協同居住のルールづくりは市が中心につくってほしい。
- 集まって楽しくすごすことばかりでなく、プライバシーや静かに暮らしたいことも尊重してほしい。
- 夢みたいな話ばかりで、足をひっぱるようなことは発言しにくい。

「暮らしのこん談会」の翌日、疲れて寝込んでしまった人もいるということです。

この「暮らしのこん談会」の目的と運営にたずさわるサポーターが何者なのかについては、丁寧に説明したつもりでしたが、十分に理解されなかったようです。意見書によって、参加者と暮らしのこん談会の運営側とのズレが大きいことが分かりました。さらに、先進事例のスライド紹介の中で〝この真野ふれあい住宅もペットが一緒に住めるような暮らしに〟と話したのは、後々までも入居者間にしこりを残してしまいました。仮設住宅の居住者の中にはペットと共に暮らしている人が少なくはなく、真野ふれあい住宅の入居予定者の中にも大のネコ好きがいて、サポーターのこのひと言で、当人は大いに希望をもってしまいました(当然のことですが)。反面、ペットの嫌いな人、喘息やアレルギー体質の人には大きな心配の種となり、意見書の中にも「ペットは困る」「市営住宅なのにペットがなぜ飼えるのか」というものが複数ありました。サポーターの発言には細心の注意が必要です。限定された条件の下で協同居住という初めての試みをしようとする人たち、それをサポートする側は現実をよく見極めるべきで、

新しい生活文化の創造の場としてペットとの共生を提案するには、それなりの準備の段階が必要です。真野ふれあい住宅の場合はまだその段階にきていません。実現不可能な理想を述べると無責任さにつながり、サポーターへの不信感につながります。

この第1回の暮らしのこん談会（97年8月5日）について、入居者の得意技が多様ですばらしく、不安の声はひとつもなかったというのは、一面的な見方で、不安が出なかったのはなぜなのかを思うべきです。不安がなかったのでなく、言えないような雰囲気をつくってしまったのです。定番化したワークショップではなく、参加者の属性をきちんと把握し、それに適した企画・運営が大切であることを痛感しました。

◇夢を語れば語るほど不安がつのる

第2回の暮らしのこん談会（97年8月5日）は先の意見書を参考にして会合の開催時間は1時間半以内で終わるようにプログラムを組み、まず、当日のテーマのひとつ「真野ふれあい住宅のつくり（設計内容）を知る」を、図面で説明しました。これは図面を日ごろ見慣れない人たちにとっては分かりにくかったようです。図上で協同居住のイメージも合せて説明しましたが、現実感のない説明もあって、生活ベテランの方々に申し上げるような話ではないような気がしました。

次のテーマに移り、「今後、暮らしのこん談会で何を話し合ったらいいか」について、旗揚げアンケートなるものをしました。これは全く失策でした。アンケートの選択肢が複雑すぎて、参加者に理解できず、何をしたらいいのかよう分からんということになってしまいました。入居予定者にとっては、自分

たちの協同居住のイメージがまだ実感としてつかめていない時に、協同生活について何を話し合ったらいいのかを問われても、適切な答えがでません。さらに、子供を対象にしたような旗上げアンケートという行為も、大人たちをしらけさせたようです。これから住むことに対して、ワークショップで混乱させてはダメです。こんなことで協同居住がしんどいと思われるようになっては大変です。自分たちで生活イメージをつくりあげていけるような現実的な話、分かりやすい言葉や内容でのすすめ方が必要であり、ワークショップ運営側の独りよがりを感じて、わたしは参加者（入居予定者）とのズレがさらに大きくなったと悲しくなりました。

第2回暮らしのこん談会の後、運営委員会の一部の委員の間でワークショップのとらえ方に対して意見が対立しました。

「多数の学生がサポーターとして押しかけて来て、お祭り騒ぎのような生き生き（騒々しい）ワークショップはやめたい。入居予定者がゆっくりと発言でき、それぞれの発言を通してお互いが知り合えるような会合にしたい」と言うわたしの意見に対して、「居住者参加のデザインの研究・教育は現場が学びの舎である。このワークショップの準備・実施への参加はフィールドセミナーとして位置づけている」という学者の弁。

「これは大学のゼミの場ではない。理想でなくてもいい、着実に入居者の心がふれあっていけるようなやり方を、プロの仕事としてやっているのだ」という実務派の弁。

ワークショップの運営体制をはっきりしないまま、船頭多くしてスタートさせたことにも問題がありましたが、学者が研究テーマのフィールドとして係わるには、情況が複雑すぎる（特殊すぎる）と思います。『被災地である、災害復興住宅である、入居予定者の属性は年金生活者も多い、生活費にゆとりの

ない人が多い。超高齢者が多い、仮設住宅で共同生活を体験してきた人たちで共同生活のいい面もつらい面も身をもって感じている』。このように、暮らしのこん談会の参加者の属性は特化しています。この現実をよく知り、しんどい立場にいる被災者の気持ちを理解し、生活実感のある人がきちんとサポートすべき内容のワークショップにしたいと、わたしは主張しました。

ワークショップで協同生活の夢を語るよりも、体力的に協同（協働）生活に参加できるのか、協同室の光熱水費は負担できる額なのか、協同備品はだれが揃えるのか等々の不安があります。ワークショップで夢を語れば語るほど、一部の人たちには不安が深まってきます。コレクティブハウジングとしての夢を語る以前に、一人ひとりの気持ちが触れ合っていくようなプログラムが必要で、一人ひとりの悩みや不安を聞きあえる友だちづくりの段階を経て、協同生活の夢や得意技を語り合い、協同生活のルールづくりに向かうようなプログラムの展開が必要です。

◇意見交流によって知り合っていく

第3回暮らしのこん談会（97年9月16日）からは、雑談になってもいいから入居予定者の意見交流を主体にし、他人の発言を聞くことによって、入居予定者どうしがお互いの性格や考え方を知り合っていくようなやり方に転換しました。暮らしのこん談会運営委員会の専門サポーターがグループ討議の進行役となり、サポーターはあくまでサポーターとして控えめにし、サポーターが先導するようなやり方をやめました。

入居予定者が最も気になっていることは、新しい住まいと聞きなれない〝ふれあい居住＝協同居住〟

図12　住宅の平面図をみて希望の部屋位置を検討する

という住まい方についてであり、そのうち入居までに必要なことは、各自の部屋の位置決め、協同スペースの備品の調達、新しい生活設備機器（例えば電磁調理器、風呂の温度や水量設定のリモコン、緊急通報機器など）の使い方の習得などです。気にはなるけれど入居後にならなければ分からないものについては、その対応策の方向を見つけておけばいいでしょう。例えば、協同生活のルールや協同スペースの光熱水費の軽減方策などは協同居住がスタートしてから具体的に検討していく問題です。ただ、このような問題を入居者が話し合っていけるような住人自治のきっかけづくりはしておきたい。そのためには入居予定者の中からリーダーとなる人の発掘や世話役の選出が必要になります。

幸いなことに復興基金で創設された『被災者向けコレクティブハウジング等建設事業補助制度』は、住人からの申請があれば協同室の備品購入についての助成金がでるので、その制度の活用を促し、備品購入のための世話役を第4回暮らしのこん談会で選出しました。

第3回暮らしのこん談会の「部屋決めについてのグループ意見交流」は4グループに分かれて話し合い、自分の入りたい部屋の希望を言ってもいいし、部屋決めの方針について言ってもいいということで、分かりやすい住戸の図を見ながら意見交流をしました。

「わたしはできれば○○あたりに入りたい」と自分の入りたい位置の希望も多く述べられました。また、「一緒にグループ応募した人は近くに住みたい」という意見もありましたが、「小さな住宅なのでどこでも同じ」「足腰の弱い人を優先に」などの意見もありました。

「グループ応募で当選した人は4グループあり、18世帯ですが、残りの9世帯は個人応募です。グループ応募した人たちが、近くに住みたいというのは分かるけど、個人応募した人の気持ちも思ってみてほしい。いつまでもグループ応募に固執せず、29戸の人たちがひとつの友だち家族のようになってほしいと思っています」とわたしは言いました（この時点では2住戸の入居者が未決定でした）。

毎回のワークショップの後に提出してもらう『今日のこん談会についての感想』には、「今日の話の内容は100％よかった」「今日の会はだいぶん分かりました」というのがありました。

この日の会合が始まる前、87歳の女性が「ちょっと聞いてほしいことがあります」と、わたしのそばに来られました。

「わたしは高齢で協同生活の掃除当番などはできにくい。どうしたらいいのかとずっと悩んでいます。当番に参加できない人はお金を払うようなルールをつくってほしいです。今の仮設住宅では時々、果物などをみんなで食べてもらうようにと渡していますが、こんなにおお人数になったらそんなことできませんので」。

わたしはこの方のこのような意見を、入居後の住人たちによる協同居住ルールづくりに伝えていかなければと思っています。しかし、もしかしたら、わたしが言わなくても、ご本人がみんなに直接言えるような雰囲気が育っているかも知れないと期待しています。

◇コレクティブ生活のイメージが見えはじめた

第4回暮らしのこん談会（97年10月15日）は前回を受けて、「部屋位置の希望を提出しよう」というこ

とで、返信ハガキを渡し送り返してもらうことにしましたが、ほとんどの人が当日に提出しました。二つめのテーマ「協同スペースの備品購入について」は、まず神戸市から入居時に用意されている品目について具体的に示されました。それに加えて必要となるものは「被災者向けコレクティブハウジング等建設事業補助制度」を活用して自分たちで購入していくことになるので、グループに分かれて話し合いました。物を購入し、新しい生活の準備をしていくことを話し合うのは楽しいことです。生活イメージが沸いてきます。

入居と同時にそろえておきたいもの、入居後しばらく様子をみてから考えればいいもの、入居者の中で余分にもっていて提供できるものなどと、さまざまなことが話されました。生活体験に基づいた協同生活必需品の数々があがりましたが、「市から準備される備品の中に庭作業用の手押し一輪車があるが、使いにくいし危険なので台車にしてほしい」「協同食堂に公衆電話を設置してほしい」などは印象的でした。また、台所ゴミを分解して土に戻すためのコンポストは、わたしが提案し、賛同がありました。個人ではなかなかすすめにくいこのような自然環境に負荷をかけない生活スタイルを、協同居住では実行してほしいと思っています。なお、協同スペースの光熱費の軽減のために、屋上にはソーラーパネルが設置されています。

余談ですが、コレクティブハウジングは21世紀に向けての新しい住まい方のモデルとして、住人がふれあって生活するというメリットに加えて、環境共生や省資源のライフスタイルのモデルとしても推進してほしいと、わたしは願っています。

前回の会合で参加者から地域の様子を聞きたいという意見が出されたのを受け、この日は、地元の自治会長の歓迎のあいさつと地域の様子について話がありました。

この日、会場は華やいだ雰囲気に包まれ、違う仮設住宅の人どうしが親しく話しかける情景を目にするようになりました。

暮らしのこん談会が終わって、参加者が会場を出ていく時、わたしはいつも、一人ひとりの表情や状況を注意深く観察しています。第1回目は、緊張していて、終わってホッとした様子で帰られたような気がします。第2回目は、やや疲れた様子の人が多かったようです。第3回目から、ふれあう気分を感じての晴れやかな表情の人が目だち、第4回目の今日は、なごやかな雰囲気をたずさえて帰路につかれた人が多かったような気がします。帰りぎわ、いつも前向きの発言を丁寧にされる一人のお母さんが駆け寄ってこられて、「こんなことまでしてもらってありがとう。ほんまにうれしいわ」と、わたしの手をぎゅっと握られました。目には涙を浮かべておられました。わたしも思わず目が潤みました。

「入居しはったら、訪ねていくね」

「ほんま？　しょっちゅう来てね。泊まりに来て、お布団用意しとくから」

◇現実感が増してきた！

第5回の暮らしのこん談会は協同室と各住戸の台所に設置される電磁調理器の体験実習とお茶会を兼ねて、バスで電気メーカーの工場へ見学にいきました。

第6回暮らしのこん談会(97年11月11日)、今日は提出された希望にそって部屋決めを行う日で、会のはじめから何となく緊張した雰囲気に包まれていました。市も慎重を期し、管理課長から次のような説明がなされました。

「部屋決めは普通なら一般の公営住宅と同様に公開抽選で順番に決めていくのだが、このコレクティブハウジングはこれまでみんなで話し合ってきたので、みなさんの希望を取り入れて決めていきたい。しかし、後でやり方について一人でも不満がでるようなことになると困るので、部屋決めのやり方を入居予定者全員の同意の下にすすめたい」という確認です。

まず、部屋位置を示した大きな図面の上に、提出された希望者のラベルを張っていき、希望者が重なった部屋は、みんなの前で抽選をしました。希望者が重なった部屋は5つありました。第一希望から外れた人たちの2回めの希望提出でも希望者がダブッてしまって、2回も抽選をするはめになり心配そうにしていた人も2人程いましたが、はじめからどこでもええ、残り福でええよという人もいて、27帯全戸（2戸は空室）の部屋が決まり、市から「部屋番号仮決定書」が一人ずつに渡されました。さっそく運営委員会事務局は各部屋の位置の上に決定された世帯の名前を記入した図を作り、コピーをして配りました。まだ、全員の顔と名前が一致できない人たちも多いようですが、一応これで、ひとつの大きな関心事が決定され、ホッとした表情で帰路につかれました。少しずつ新しい住まいに現実感が増してきたようで、わたしたち運営委員も階段を一段上がったような安堵感がありました。

この後、9名の世話役が残り、世話役会をスタートさせることについて話し合いました。もうそろそろ、わたしたちサポーターは少しずつ手を引き、具体的なことを検討するのは世話役会にバトンタッチしていく時期にきていると思います。前回の会合で選出された世話役の顔触れを見た時、なかなかいい人選で、仮設住宅で共同生活を体験し、その良さを常々口にしている人たちが選出されたと思いました。この人たちがいれば入居後の住人自治もうまくいきそうです。

第7回暮らしのこん談会に先立って、12月12日に世話役会をもち、協同スペースの備品購入の検討の

ために、まだ工事中の真野ふれあい住宅を見学しました。この日、世話役でない人も何人か住宅を見にこられました。やはりみんな早く自分の部屋を見たいんですね。何しろもう自分の部屋が決まっているので。10日後の第7回の暮らしのこん談会は入居予定者全員の住宅見学会ですが、その時は世話役に案内役をかってもらうことになっており、まずは、今日はじめて見た自分たちの住宅について感想を述べてもらいました。次のような感想でした。

- 今まで狭いとこに暮らしてきたので、ちがう国にきたような気がする。協同生活の運営は急がずに話し合っていきたい。
- 協同スペースを見てびっくりした。すばらしい。夢が沸いてきた。
- 階ごとに環境が違うので、階ごとのルールをつくってもいいのでは。階ごとのみんなの写真がほしい。
- 一戸ごとの物置があるのはうれしい。
- 歳がいっているので、足手まといにならないようにしたい。
- 建物の外観はヨーロッパ風でしゃれている。1DKなので洋服ダンスを置くと狭いので住宅内にクロークのようなのがあればよかった。
- お風呂や手洗いが広々していてうれしい。
- わたしの部屋から見ると、正面は三星ベルトの工場だがしゃあないか。
- 今まで何回も見に来ている。今回とくにうれしかったことは、ドアがうれしかった。鉄の扉でなくて引き戸というのがいい。この住宅は人に自慢できる。

地元のふれあいまちづくり推進会の委員長も一緒に見学されたので、感想をひとこといただきました。

- このような住まい方が果たして日本に向くのかどうか、心配していたが、今日の皆さんの顔を見て安

心した。自律と連帯で暮らしてほしい。

このような感想を聞いた役所の職員の感想は次のようなものでした。

- これまで住民が喜んでもらう機会に出会うことがなかったが、今日はじめて喜びの場を見た（住宅建設課の若い職員）。〈役所の若いスタッフの中には震災後のつらい立場が続いて、ずっーと頑張ってきた人が多いんだと、彼の発言にわたしは改めて感動しました〉。
- やっと入居にこぎつけたという思いです（管理課職員で暮らしのこん談会の事務手続き等の担当者）。
- 管理というのは名が悪いが、暮らしのこん談会でみなさんの生の声を聞けて良かった（管理課職員）。

◇うれしい一日！

年の瀬が押し迫った97年12月23日、まだ外構が工事中の真野ふれあい住宅に入居予定者が集まりました。今日は全員に住宅のお披露目です。集合時間は午後2時というのに、数人は1時すぎにはもう来られて、自分の部屋を見ておられます。今日は現地集合で、楽しみにしていたという笑顔に包まれました。みんなうれしそうです。2時に協同食堂に続く10帖ほどの床暖房のスペースに肩寄せ合って座り、まず住宅の概要の説明を受けました。協同スペースの立派さ、床暖房の快適さにうれしさの声が上がります。みんなが気になっている住宅設備機器のややこしい使い方の説明は、入居の時に受けるということで、今日はまず各自の部屋をゆっくり見てもらうことにしました。歩きにくい人にはサポーターの介添えを申し出てほしいとも言いました。世話役が案内する人、仲良しと順番に廻って行く人、サポーターに説明を求める人、一人でじっくり見てる人、カーテンの準備のために窓の寸法を計る人、部屋でしゃがみ

図 13　真野ふれあい住宅の外観

図 14　続きバルコニー（立体路地）

図 16　屋上菜園

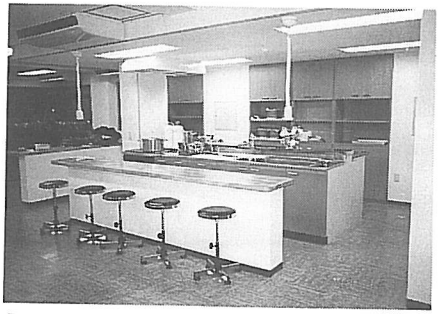


図 15　協同室の厨房コーナー

こんで話し込んでいる人、1時間ばかりはすぐに過ぎてしまった感じです。南側のつづきバルコニー（立体路地とよんでいる）と屋上にまでエレベーターが上って行くことに感激していた人がいます。立体路地に面した台所がええと言う人と丸見えでいややわと言う人がいます。エレベーター前の広いたまり場を歩きながら、ここにどういう飾り付けをしようかと考えてんねんと言う花が大好きな人がいました。今日はじめて同居の娘夫婦に暮らしのこん談会に連れてきてもらった高齢のお母さんは、ちょっと恥ずかしそうにしておられました。

各部屋の見学の後、再び床暖房コーナーに集まり、今まで誰彼ともなくから聞こえてきたことを提案しました。それは、引っ越しに際して必要となるカーテンや照明器具などを共同購入できないかということです。

「みんなで買えば安くしてもらえるのではないかしら」
「お年寄りでひとりで買いにいけない人もいるので、ここに店屋にきてもろたらええと思う」
「わたしは電球が切れたりした時、すぐきてもらえるように、いままでの馴染みの店で買う」
「みんなでこうたら、どこの家もみな同じカーテンになったらいややわ」
などなどの意見があり、希望者は共同購入しようということになって、世話役が店を見つけて、次回の集まりに店屋にきてもらおうということとなりました。

また、次回の集まり「鍵渡しの日」は、コレクティブ応援団が昼食会を予定しているので、いずれ必要となる協同食堂の食器を、前もって買っておこうということになり、世話役から食器購入担当が決まりました。県に『被災者向けコレクティブハウジング等建設事業補助制度』を申請して補助金がでるまでは、入居者たちが少しずつ立て替えておこうということも決まり、50人分の食器を用意してきれいに洗って準備しときますと言ってくれました。

一歩、一歩と協同居住の入り口に近づいたような、うれしい一日でした。

コレクティブ応援団も、ひとつめ、二つめの峠を越えたような充実感で、年末を迎えることができるのは、うれしいことです。

◇長く感じた道のり、ありがとう！

前述のようにして、半年間の「入居前協同居住の学習・体験ワークショップ／暮らしのこん談会」は終了しました。98年1月22日は鍵渡しで、翌日から入居がはじまります。

この「暮らしのこん談会」を通して、多くのことを学びました。

そのひとつはワークショップのやり方です。ワークショップは参加者の属性を見極め、それに的確に対応したものでなければならないということ。夢を語る生き生きワークショップの定番化では適応できないケースがあるということ。もうひとつは、入居前にみんなが知りあい、仲良くなることが、暮らしの安全＝防災、生きる楽しさの原点であるという確信です。

7月に「暮らしのこん談会」をスタートさせてから、その企画・運営についていろんなことがあって、一時はどうなることかと悩んだ苦しい時期もありました。

ずっと後になって、一人の入居予定者が次のように言われました。

「1回目、2回目の会合はボーとしとったけど、3回目ごろから真剣にならざるをえないようになった。1回ずつみんなに会うたびに自然に仲良くなって、違う仮設住宅の人でも出会ったとたんにニコッとしてもらってうれしかった」と。試行錯誤した半年間の暮らしのこん談会は着実にふれあいの根をはり、新春からは蕾が色づくのを待つばかりという状態までたどりつきました。多くの入居予定者からしばしば、「ありがとう、ありがとう」との言葉をいただきましたが、ほんまはわたしの方が、みんなにお礼を言いたいと思っています。震災直後、小林郁雄さんと二人で探しあてた夢のような種を、コレクティブ応援団のみんなで蒔き、その夢の種を現実へと芽吹いてくれたのは入居予定者の方々なのですから。

もちろん、市の職員の破格の決断と努力、多くのサポーターの支援があってのことだったのです。祝出発！

(5) みんな笑顔で入居したが…

◇待ちに待った入居の日

98年1月22日は待ちに待った「鍵渡しの日」で入居開始の日です。

その前日、入居者の世話役の方々とコレクティブ応援団は真野ふれあい住宅の協同スペースの掃除と翌日の昼食会の下ごしらえをしました。阪神グリーンネットからはイギリス製のガーデンベンチとふれあい住宅の各階の立体路地に置く大きな寄せ植えの鉢が運ばれました。応援団も各階のたまり場に置くベンチをプレゼントしました。そのベンチを組み立てる人、床に掃除機をあてる人、テーブルを拭いてまわる人、厨房では昼食会の下ごしらえをするグループなど、大童の心はずむひとときでした。

22日の「鍵渡し」は神戸市と入居者の重要な契約の日です。みんな緊張した面持ちで来られ、順番に名前が呼ばれ、必要な書類提出を終えて自分の部屋の鍵を受け取ると、一様にホッとされます。その間も協同台所では、たくさんのサポーターが参加して昼食会の準備がすすめられており、協同室には入居者に加えて地域の真野まちづくり推進会の役員、婦人会の方々、テ

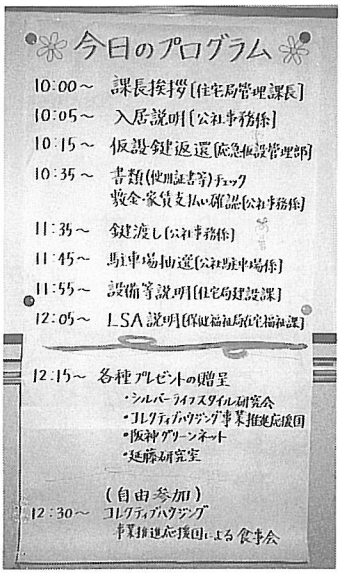


図17　入居説明会の日のプログラム

図 18　入居説明会の日、書類審査を受け、カギをもらう

レビ取材のクルーズや新聞記者、関西電力の職員、その他多くの関係者が集まり、てんやわんやでした。

昼食会のメニューは豚汁です。真野婦人会からは沢山おにぎりが用意され、総勢80名近くが一緒に昼食をしました。外は寒い一日でしたが、あったかい豚汁を味わいながら熱い気分に浸りました。わたしはこの日の豚汁の味が忘れられません。大きなおナベでたくさんいっぺんにつくる料理は、味がしみわたりとても美味しいです。いっぱい具の入った豚汁は応援団の天川さんのかけ声のもとに居住者や若いサポーターたちが協働で作りました。協同台所に設置された電磁調理器の使い方は関西電力のクッキング姉さんたちが指導してくれました。

その日の午後からもうさっそく引っ越しをしてきた人もありました。

「やっとここまで来たね」と、わたしたち応援団はそれぞれの思いをいだいて帰路につきました。

◇節約の訓練をしています

2月半ば、全世帯の引っ越しが終わり、自治会設立と自治会役員の選出準備のための会合で久しぶりに真野ふれあい住宅の住人になったみんなに会いました。真野ふれあい住宅の主になった居住者たちは、今まで会っていた時とちがって、リラックスした雰囲気で、半纏を着たり膝掛けをもって協同室におりてこられました。やっと落ち着いたという和やかな笑顔です。でも、まだ自分の部屋が片付いていない、

引っ越し疲れやちょうど流行っていた風邪をひき寝込んでいたなどで、今日初めて協同室に明かりがつけられたようです。

自治会長は70歳前の元気なお母さんが推薦されました。彼女は娘と二人で入居しているので、元気な二人は力になってもらえそうというみんなの推薦です。副会長二人、会計、会計監査、各階の世話役などを自治会総会をもって決めてもらうことにしました。

このまま自室に閉じこもってしまう生活が日常化してしまうと、コレクティブハウジングとしての意味がなくなり、残念なことになるので、3月半ばに協同居住スペース維持管理規約の検討会をもつことにしました。わたしは「真野ふれあい住宅協同スペースの維持管理規約案」をつくり、ひととおり説明して、後は居住者で検討してもらうことにしました。そして、まずは協同室を使って楽しむ手始めのイベントとして、神戸協同病院の上田院長にお願いして協同病院の地域支援センターグループの映画会と「健康と住まい」という院長の話をしてもらうことにしました。

映画会は昼間だったので、観客は12名ほどと少なかったですが、床暖房のコーナーのソファに好き好きに座って、大きなスクリーンに映し出された「一本刀土俵入り」というなつかしい映画を観ました。

「30年ぶりに映画を観たわ！」という声もあり、みんなはれやかな顔をしておられました。

居住者の中には協同室をどんどん使うと光熱水費が高くつき、共益費の負担が多くなるという心配があります。共益費は1世帯あたり1カ月4千円を集めています。この中には住宅共用部（廊下、玄関、駐輪場の電灯）の電気代とエレベーターの動力代、住宅周りの植木の散水のための水道代など（これらは一般の公営住宅でも必要とされます）の共益費と、コレクティブハウジングとしての協同スペースの光熱水費が含まれています。前者の共益費はエレベーターのある公営住宅では大体2千円から3千円で

すので、コレクティブハウジングの協同スペースの光熱水費としては1千円余りをプラスして集めていることになります。

全世帯の引っ越しが終わる2月末までは神戸市が電気代等を負担してくれることになっていますので、この間に協同室をどんどん使って、どれだけ使えば電気代がこのくらいかかるという試行期間にしましょうと提案したのですが、ダメでした。反対に自治会長は「できるだけ協同室を使わないで電気代の節約の訓練をしています」と言うので、がっくりきました。これがわたしのがっくりの始まりです。

図19　協同室の床暖房コーナーでくつろいで楽しむ映画会

わたしは関西電力の営業所に電話をして、真野ふれあい住宅の電気代の徴収明細の計算方法を詳しく教えてもらいました。

4月分（3／2～3／31）と5月分（4／1～4／30）の電気代の内訳を計算してみますと、4月分は住宅共用部の電気代は約4万6千円（うち基本料金が1万6660円）、協同室は約2万1千円（うち基本料金が1万4880円）で、合わせて1世帯あたりの負担額は約2400円（うち基本料金が1126円）です。協同室だけについてみると、1世帯当たりは756円（うち基本料金が531円）というものです。5月分もほぼ同じようなものです。

わたしはこの計算結果をみんなに説明しました。「3月と4月は協同室をほとんど使っていないので、基本料金が8割ちかくを占めています。協同室を利用しないで、基本料金だけを払っているというのはバカらしいことです。協同室を利用することによってここの電気代が高くなっても、みんながここに出てきている間は、自分の部屋の暖房や電気を使わないので、個人の電気代は安くな

りますよね。ここをどんどん活用した方が、トータルにみたら経済的なはずよ」と。

◇コレクティブを理解しない自治会長が仕切っている

5月の爽やかな季節になっても、協同室はほとんど鍵がかかったままです。真野ふれあい住宅の何人かの居住者を診ている神戸協同病院の訪問看護スタッフに聞くと、自室に閉じこもりがちでどうもみんな元気がなくなってるようだと言われます。そこでコレクティブ応援団は郊外の「しあわせの村（神戸市立総合福祉ゾーン）」に出かけて、日本庭園や芝生公園を散策して温泉に入るというバスツアーを呼びかけました。しあわせの村はわたしが都市開発のコンサルタント会社に勤めていた時、神戸市から委託されて計画を担当しましたので、殊の外愛着のある場所です。バスツアーの計画について直接わたしから話を聞いた幾人かはとても喜ばれました。そこで自治会長にみんなの希望を聞いてみてとお願いしました。その後いつまでたっても自治会長から連絡がないので電話をすると、みんな行きたくないと言っているという返事です。これについて後で何人かに聞いてみると、「郊外に出かけたら帰ってきて疲れて寝込むから行かんほうがええ」と、自治会長が説得してまわったとのことです。

また、建築雑誌の『日経アーキテクチュア』98年5月号に、片山ふれあい住宅と真野ふれあい住宅が紹介されました。その取材記事の中で、自治会長は「光熱費が高くつくので、協同室はできるだけ使わないようにしている」と述べており、文中には「居住者の中にはかなり足腰が弱っていて協同室まで出てくるのもままならない人がいるので、みんなの食事会を開くようなことはほとんどない」と書かれていました。これを見て、わたしたちは唖然としました。わたしは日経アーキテクチュアに抗議文を送り

ました。取材したのは入居後間もないまだ寒い時期の状況でしょうが、一人の発言、とくに協同スペースに批判的な人の片寄った発言だけを載せて暗い状況を紹介するのでなく、新しい住まい方を育てていくような少し暖かい目でみてほしいと。

その後も自治会長は相変わらず、「協同室を使わないようにして、光熱費の節約の訓練をしている」とか、「なるべくエレベーターに乗らないように。1回乗ると350円の電気代がかかる」とかむちゃくちゃを言って、まるで寮長のように居住者の行動を仕切り始めました。年老いた居住者はこの元気な自治会長に意見を言う気力はなく、口を閉ざしています。そんな中でなんとか入居前の笑顔をとりもどしたいとがんばっている人に対しては、悪口や陰口を言いふらしてまわるので、「自治会長は悪口の問屋さん、陰口の卸屋さん」と、陰では呼ばれるようになりましたが、彼女の言いなりに信じてしまう人もいます。

「応援団の石東さんがあれもやれ、これもやれと言うので、片山ふれあい住宅の会長は疲れて入院している」と、事実でないことまで言いだすほどにエスカレートしてきました。これを知った片山ふれあい住宅の会長は、「えっ、わたしピンピンしてるのに。今度は真野ふれあい住宅の会長に殺されてしまうんとちがうか」と冗談を言われました。

自治会長の娘が会計をしており、4千円の共益費を独断で３５００円に下げました。「今は協同室を使っていないので電気代がかかっていないけど、共益費は一度下げると必要になっても上げにくいので、下げるときは今の状況をよく考えてほしい」と、わたしはアドバイスをしました。そしたら、「石東さんが共益費を下げたらあかんと言ってる」と吹聴し、一部の居住者には石東は悪者だということになってしまったようです。

しかし、一部の楽しいこと好きなグループからは協同室がいつでも使えるように自分たちに鍵を渡し

てほしいとという声もありますが、超潔癖好きの自治会長は協同室が汚れるのを嫌って、鍵は神戸市から預かっているので責任があると言って渡しません。

◇外部からのサポートを受け付けない

コレクティブ応援団は居住者が自室からできるだけ出てくるようにと、その後もいくつもの企画を提案しましたが、自治会長の独断で断られます。「みんながしたくないと言っている」という理由で。神戸協同病院の地域センター支援グループは映画会の開催を強く提案しましたが、これも断られました。地域の婦人会やボランティアの食事会など、沢山の申し出がありましたが、すべて実現できません。唯一、夏休みに入って学生たちによる「朝のふれ愛喫茶」の開催が実現しました。これは久しく真野地区のまちづくりを支援してい立命館大学乾研究室の学生たちによるもので、地元のまちづくりニュースにその開催予告記事が早々と出てしまったので、やむなく了承せざるをえなくなり、協同室使用料として一日2千円を払うということで、自治会長は押し切られたようです。やってしまえばもうこっちのもんです。元気あふれる若いパワーが一週間ほど、「朝のふれ愛喫茶」を開店しました。地元の人達の参加が多くて好評でしたが、真野ふれあい住宅の居住者の参加は数名です。「ふれ愛喫茶は65歳以上のひとりもんだけの参加ということだが、わたしがまちづくり推進会の宮西さんに頼んだので、ここの住宅の人は誰がでてもいいよ」という、自治会長のひとことがあったために、居住者の中には参加を遠慮した人もいるということです。真野ふれあい住宅の居住者の何人かは少しずつ自治会長のやり方に息がつまってきたようで、元いた仮設住宅に息抜きに行く人が何人もでてきました。

◇全国から見学者が殺到

新しいタイプの公営住宅ということで、全国からの見学者が殺到してます。自治会長が案内してまわります。しかし、どこにも居住者の姿はなく、協同室は使われた形跡がありません。ある時、地元のまちづくりニュース（阪神大震災真野地区復興ニュース）「真野っこガンバレ!!」に協同室の利用状況が紹介されました。それによると98年10月の1カ月に協同室は20回以上もの使用記録があり、見学者が多くて協同室は大いに利用され、真野ふれあい住宅は内外から注目されているというものです。しかし、20回以上もの使用のうち居住者の独自の使用は2回で、後はほとんどが見学者の使用というものです。これに対して「こんな状況はおかしいよ、もっと居住者自身が使わなくては意味がないよ」というようなコメントもありませんでした。わたしは笑ってしまいました。

当時のわたしのノートには、真野ふれあい住宅の状況に対する苦悩を沢山、沢山綴っています。どうしたら今の暗い状況を打開できるだろうか。自治会長のコレクティブハウジングを理解しない独断的な行為を改めさせるのは難しい。しかもコレクティブ応援団との接触をできるだけ避けようとする状況になっているようです。

ひとつの方策は家主である神戸市住宅管理課の力添えが考えられます。全国初のコレクティブハウジングをモデルとして事業化し、事前には周到な準備をしたのですから、今の状況を軌道修正できる方向にもっていってほしいと頼みに行きました。神戸市としては大量の災害公営住宅の供給を抱えており、真野ふれあい住宅の状況は他の住宅での問題と比べると大したことではないとみているようです。事実わたしもそう思う面もあります。行政は民事不介入だし、真野ふれあい住宅の状況は痴話げんかみたい

なもんだという人もいます。さらに、コレクティブハウジングの事業化を決定したのは住宅事業課であり、住宅管理課は入居後のやっかいなことだけを担当させられるというしんどさがあります。

このところ、わたしは誰彼となく相談しましたが、「当分の間はそんなもんやで」「住民自治に外から介入できへん」などと言われて、真剣に受け止めてもらえず、悩む日々が続きました。よりにもよって最もコレクティブハウジングに無理解な人が自治会長になってしまったという思いで、悔しさがいっぱいです。このまま協同室が使われない生活が日常化してしまうのを避けなければという思いが強く、そこで思いついたのが、他のふれあい住宅と交流をして、真野ふれあい住宅に外からの風を吹き込もうという企画です。

コレクティブ応援団の小林・天川・吉川・石東の4人組みが98年7月から「ふれあい住宅居住者交流会」を開催することになりました。交流会はこの後、ほぼ2カ月に1回のペースで、各ふれあい住宅を巡ってつづけています。この詳細は5章で述べますが、真野ふれあい住宅からはいつもAさん一人だけの出席で、彼女はいつもどうにかしたいと苦悩を述べられています。

わたしはその後も神戸市の住宅管理課には訴え続けていましたので、やっと重い腰を上げてくれることになりました。98年の暮れに神戸市営コレクティブハウジングの第2弾として入居が予定されている久二塚西ふれあい住宅の参考にするために、真野ふれあい住宅の入居後の状況をヒヤリングしたいという名目で、10月半ばに住民に集まってもらって意見を聞くことになりました。当日わたしは先約があり同席できませんでしたが、自治会長の発言はほとんどなく、2、3の人から今の状況を脱して、入居前の暮らしのこん談会で話し合ったように協同室を使っていきたいという意見があったとのことです。神戸市も今の状況ではモデルとしてつくったコレクティブハウジングの意味がないので、協同室を活用し

て、協同居住を育んでいってほしいと説明しましたが、大部分の人はもう今の状況でええわという雰囲気だったようです。

（6）2年目の春は新体制で仕切り直し

◇ちょっとしたドラマが展開して

そろそろ入居後1年が過ぎようとし、自治会役員の改選の時期を迎えることになりました。協同室が閉ざされたままの今の状況の打開には居住者の中から自己主張がない限り外部がいくら気をもんでいてもし方がないので、わたしは新しい体制に望みを託していました。今の自治会役員の任期は3月末までです。自治会の役員会は開かれたことがなく、当初に選出された副会長は途中で自治会長の独断がイヤになって辞任しており、自治会長と会計を担当している母娘が全てを仕切っている状況です。

2月ぐらいから自治会長は、「この住宅の自治会長はわたし以外はできへんよ。地元の連合自治会の役員さんからもようやってる、次も頼むわなと言われてる」と、言ってまわっていました。しかし、自治会長は1年交代だという声が聞こえてくると、こんどは「次の会長にKさんをわたしが仕込んでいるからね」と言いだし、居住者の何人かにビールやら、じゃがいもやら、タマネギなどを届けて選挙運動を始めました。

時々の状況を知り、わたしはどうにかして今の体制が改められるような適切な人が役員になってほしいと願っていました。また、自治会長とかいう「長」がつくと「えらいんだ」と錯覚してしまう人がいるので、必ずしも自治会長に副会長というような一般的な役員体制でなくても、数人の世話役からなる協同居住運営委員会を設けて連合体で進めていくのも一法ではないかと、一部の人に話したことがあります。

「3月の半ばの日曜日に自治会総会を開き、新しい役員の選挙をする」というお知らせがまわり、その事前説明のための会合を1週間前の日曜日の夜開いたそうです。欠席者は3名だけで、ほぼ全員が協同室に集まったということなので、関心の強さがうかがえます。

そこでドラマが展開しました。誰かが言いました。

「ほぼ全員が集まっているので、この場で役員選出をやろう。選挙といっても字の書けない人もいるので」と。まず、自治会長が任期終了で降りるということは、拍手でもって賛成されました。次いで、2、3の人が新しい自治会長としてAさんの名をあげました。これについては大きな拍手はありませんでしたが、反対の声もなかったということで、Aさんに自治会長が決定されました。Aさんは今までのような自治会長という立場でなく、数人グループで世話役会をつくって運営していきたいと提案しました。その提案が賛同されて、その場でAさんを世話役会代表、会計二人、各階の世話役一人ずつという6人の新体制が誕生しました。

その日の夜遅くに、早速電話で報告を受けました。わたしはホッとしました。どうにも手の施しようがない長いあいだの歯痒い気持ちが少し緩んでいくのを感じました。しかし、これからしばらくひと悶着があるだろうと覚悟はしました。案の定すぐにコレクティブ応援団の事務局になっている天川さんに、

前自治会長の娘（前会計を担当）から電話が入り、Aさんが世話役代表になったのは気にいらんという憤懣やるかたなしの抗議がありました。その電話の内容やその後のいざこざについては、わたしはもう記すのをやめにしたい気分ですので、ここで筆をおきましょう。

とにかく改革の芽が出ようとしています。居住者たちの気持ちがこの1年よりは暗くなることはないという確信だけは、わたしにあります。

◇新体制の始まり

4月からAさんの発案で、今まで先方からの申し出を断わっていたボランティアの支援を受けて、食事会などを定期的にしていくことになりました。

昨年1年間の共益費の残額は37万円程あります。当然それは新年度に引き継がれるものなのですが、前自治会長はこれはわたしの努力で貯まったものだからみんなに返金すると言って譲りません。新世話役たちはこれからの活動資金として各戸に返さないで引き継がせてほしいと主張しましたが、各戸に1万1千円余りが返金され、10万円ばかりを新体制が引き継ぎました。

これを聞いて、わたしは情けなくなりました。入居前の半年間の暮らしのこん談会は何やったんやろう。半年間ぐらいで人が分かり合えると思いませんが、前自治会長は同じ仮設住宅で3年余りを一緒に暮らしてきた人たちとグループ応募

図20　映画会のお知らせ

図21　真野ふれあい住宅の協同室の窓に、通りに向けて張りだされた食事会などのお知らせ

して入居した一人なのに…。

4月からは月行事としていくつかの事をしたいというAさんの提案がありました。第1と第3の日曜日のモーニング（簡単な朝食会）は今まで居住者だけで行われていたのを地域の人にも来てもらえるようにしようということと、ボランティアの支援を受けて月に1回ずつ昼食会、お誕生会、映画会をしようということです。協同室のカギは世話役の3人がひとつずつ持ってカギ担当として責任をもつことにし、昼間は自由に使えるようにしました。夕方以降はカギ担当者に頼めば使用できます。さっそく神戸協同病院の訪問看護グループから新体制スタートに向けてのお祝いの花が届きました。

4月から月行事が始まりました。真野ふれあい住宅の協同室の窓ガラスには外を通る人に分かるように、地域の人に参加を呼びかけた月行事予定のお知らせが張り出されるようになりました。

◇落下傘部隊は地域のふれあいの核へと変身

【開店前はてんてこ舞い】

9月半ば、いっぺんゆっくり訪ねたいと思っていた真野ふれあい住宅の昼食会に出かけました。

真野ふれあい住宅はつらいトンネルから抜け出て、地域のお年よりたちの楽しみの場となってきているようです。11時前に着くと、もう数人のお年寄りが協同食堂のテーブルについてお茶を飲んでおられ

ました。厨房では10名ちかくの人がお鍋をのぞき込んだり、おかずを盛り付けしたり、お茶を冷やしたりして、和やかな協働調理作業が展開しています。11時をまわると次々と人が集まり、入口のカウンターに置かれた箱に200円の食事代を入れて、それぞれ思い思いの席につかれます。足元のしっかりしないお年寄りもいて、Aさんや若いサポーターが厨房を離れて、出迎えて席に誘導します。

今日のメニューは、炊き込み御飯、素麺のみそ汁、キュウリとチリメンジャコの酢の物、デザートの水羊羹。すべて手作りです。大きなボールにキュウリもみが入っています。これだけ沢山のキュウリを刻むのは大変だったことでしょう。ザルには刻みネギの山。

人がたくさん集まりだしたのに、炊飯器のご飯が沸騰してこない。大きな2升焚きの電気釜が二つ。11時にスイッチを入れたので、もうそろそろ沸騰してもよさそうな頃なのに、炊飯器に触れてみると、二つともたよりない熱さです。ぐずぐずしている(まさに煮えきらないんです)。どうやらコンセントの具合が悪いらしいということで、別のコンセントに移してスイッチの入れ直し。12時の食事開始には11時にスイッチを入れると、いつもほどよく炊き立てのご飯を食べてもらえるとのこと。しかしもう11時半に近い。今から焚き始めると12時までには間に合わないので、厨房スタッフはあわてます。すでに席に着いて待っている人たちに、今日はちょっと遅れそうということを告げて、その間カラオケを楽しんでもらうことにしました。カラオケをセットすると、やはりここにも歌いたがり屋さんがいて、マイクが回ります。鷹取カトリック教会のコレエダ・シスターは歌がとぎれることがないように心くばり、一人ひとりにマイクを渡していきます。

【席が足らない！】

12時ちかくになると、参加者が多くて席が足らなくなりました。和室と食堂の仕切り戸をはずして、

図22　昼食会は地域の人たちも参加して協同室は満員

和室の掘りごたつの回りにも座ってもらいました。厨房前のカウンター席にも座ってもらいましたが、それでも食堂の外のベンチに座って、4、5名が待っています。総勢で60名ちかくで、50名分用意した素麺が足らないということで、追加して茹でます。席に着いた人たちの中に真野ふれあい住宅のわたしの馴染みの顔が一人、二人しか見当たりません。Aさんに尋ねると、居住者は12時すぎに顔を出すか、席が空いてきてから来る人もいるということですが、いつも精々10名程度とのこと。すでに厨房で4名が奮闘しているので、後からは数名がでてくるのでしょう。

炊き込みご飯の醤油の香りが漂い、やっとご飯が炊き上がり、小ぶりの丼に盛り上がるほどによそいます。「えっ、こんなに沢山食べられるの?」とわたしが言うと、「いつもこんなんよ。お年寄りは食欲旺盛よ」とのこと。次々に席に運ぶと、待ってましたとばかり、食事が始まります。給仕スタッフは大忙し。ご飯をよそう人、テーブルに配ってまわる人、素麺にネギを乗せて出し汁を注ぐ人、配る人、お茶の追加に応える人。ご飯がひと通りゆきわたると、デザートの水羊羹を配っていきます。久しぶりにわたしもてんてこ舞いの輪に加わります。カラオケのマイクをまだ離さない人もいて、シスターは丁寧にマイク係を続けています。窓辺に腰掛けて背中に陽を受けて暑いのに、歌う人に優しい眼差しを注いでいます。厨房スタッフのてんてこ舞いは任かしたよ!という風で動じない。あぁ、これがほんまもんのシスターの姿かなとわたしは感動しました。

「ごちそうさん、ありがとう」の声が聞こえます。ご飯が済むのは意外と早い。Aさんは帰る人を出

口まで出て見送ります。「また来てくださいね。こんど17日はお誕生会ですから来てください」と。

【うれしい外部ボランティアの支援】

地域の人たちがおおかた帰られて席が空いたので真野ふれあい住宅の居住者の何人かに声をかけてまわり、給仕スタッフと一緒に食事を始めました。もうデザートは品切れになってしまっていますが、てんてこ舞いの後の食事は殊の外おいしい。大釜で炊き上げた炊き込みご飯のおいしいこと。醤油の香ばしい香りと沢山の具のほどよい彩りと味加減。「おいしいね、おいしいね」と言い合いながら、おしゃべりもはずみます。みんながお代わりをしに席を立ちます。

図23　昼食会で、居住者のSさん、「もう一杯お茶をどうぞ」

『ひとりで食事をするよりは、たまには大家族のように集まって食べよう』というコレクティブハウジングの理想の絵です。なごやかな、やさしい気分が漂います。毎月の第2金曜日の昼食会は鷹取カトリック教会のコレエダ・シスターと高橋さんがやってくださっており、いつも何名かのボランティアと共に来られて準備をしてくださっています。今日は3名の女学生が参加。それにコレクティブハウジングを研究テーマにしている千葉大と関東学院大の男子学生が2名加わり、厨房は大いにぎわいました。真野ふれあい住宅の世話役は毎回ほとんど決まった4、5人が担当しています。今日の炊き込みご飯の具は昨日から準備をしたそうです。ニンジン、ゴボウ、コンニャク、ササミなど、細かく細かく刻んでありました。たくさんのキュウリもみをつくるのも大変だったと思います。いったい何本のキュウリを刻んだのかしら。おしゃべりしながらゆっくり食事をして、後片付けにはいります。食器を洗う人、それを拭く人、つづいて食器棚に収める人、テーブルを拭いてまわる人。

流れ作業が心地よく、来月は何にしょうともう次回の献立の話が出ます。最後にシスターたちは床まで掃いて、さよならと言って帰って行かれました。

これだけのことを真野ふれあい住宅の人たちだけではとてもできません。外部サポートを受け入れようと提案したAさんと、それを快く了解してくださったシスターたちのお陰です。第3金曜日のお誕生会も今日の昼食会と同じようなにぎやかさで、こちらは日本パプテスマ教会の支援があります。参加費は昼食会は200円、お誕生会は100円ですが、食材費だけでもオーバーするのに、さらに真野ふれあい住宅の協同室使用のための光熱水費として1千円を出してくださるとのこと。地域からの参加者の中には、200円でこれだけのもの食べられへんわなと言う人もいるそうですが、200円以上は出してもらえないような雰囲気だと言います。いつまでも外部のボランティアに全面的に頼っているのも限界があると思われるので、何か自立の道を考えたいと、県のフェニックス活動助成〔注9〕に応募することにしました。

【落下傘部隊は地域のふれあいの核へと変身】

「真野ふれあい住宅は真野地区に落下傘部隊のように降り立った」と言った人がいます。住民主体のまちづくりの先進地区に、地区住民の要望からでなく、神戸市のモデルとしてのコレクティブハウジングが事業化されました。98年1月の入居が始まってしばらくは真野地区のまちづくり推進会（協議会）でもどう対応したものか戸惑っていたようです。一方、真野ふれあい住宅の入居者たちは真野地区に馴染みがない人が多く、かつ初期の自治会長が協同居住の意味を理解していなくて、居住者は住宅内に閉じこもりがちになってしまいましたが、2年目を迎えて、地域に根差した真野ふれあい住宅として脱皮しつつあるようです。1年間のつらいトンネルを抜け出たようです。

「地域の人が協同室に出入りしてくれるようになって、真野ふれあい住宅の居住者は外から来た人た

ちだけど、道を歩いていても挨拶ができるようになった」と、世話役代表のAさんは言います。今、真野ふれあい住宅の協同室は地域の協同食堂・談話室に変身しようとしています。まちづくり推進会や地区の自治会役員さんたちの対応にも少しずつ身内としての眼差しが感じられるようになったとも言います。この陰には、Aさんの大きな奮闘と世話役さんたちのバックアップが欠かせません。しかしわたしは、Aさんがあまり奮闘しすぎて疲れてしまわないかしらと心配しています。それを言うと彼女は「これはわたしの幸せよ」と言われます。

4月に昼食会がスタートした当初は20名程の参加でしたが、参加者はだんだん増えて現在は、昼食会は総勢で50名から60名の参加があり、お誕生会は40名前後になっています。ただ真野ふれあい住宅の居住者の参加が10名前後と少ないのは、まだトンネルの中にいて出てきにくい人もいるようです。しかし、時と共にこの気分も解決されるものと、わたしはまた楽観視してしまいます。あるいは真野ふれあい住宅の居住者の参加が少なくても、地域の中の真野ふれあい住宅になってきたのだから、真野ふれあい住宅の居住者だとか、地域の人だとかの区別をする必要がないのかも知れません。どちらもみんな真野地区の住民なんだ。それよりも来春の役員改選の後にもこのような状況が継続されることが大切です。むしろそのためには、真野ふれあい住宅以外からの参加者が多い方が継続の源になるだろうと思っています。とにかく今は継続のための活動資金の確保の道を探さなくては！

〔注9〕阪神淡路大震災復興基金による活動助成。被災者の生きがい創造、元気回復、学習を通した仲間づくりを目的とした活動等に対して、団体やグループが企画を申請すれば、審査によって活動費の一部が助成される。

居住者の生活をサポートする強力な助っ人

六甲道南再開発事務所・前神戸市住宅局　鈴木三郎

現段階でコレクティブハウジングをどう評価したらよいのであろうか。

実施主体はさらなるプロジェクトの展開を行おうとしているのか。居住者は今の生活をどう評価し、今後コレクティブハウジングの特殊性をどう活用しようとしているのか。積極的に評価する声は期待したほど大きなものではない。しかし、悲観することはないと思う。我が国で初めての取り組みであり、しかも震災復興事業としての特殊な取り組みである。「評価しない」のではなく「今はまだ、評価できない」のであろう。

神戸での取り組みに関心を寄せている自治体が多いと聞く。そんなニュースを耳にするとどんどんやってほしいと思うと同時に、少し不安を覚える。神戸の取り組みは「モデル的実施」であり、とにかく実施してみようと「拙速」の感は否めなかったが、他都市での平時の取り組みには、周到な準備を望みたい。

「居住者の生活をサポートするソフトはきっちり整備できますか。居住者は本当にコレクティブハウジングを望んでいますか。そして、そのプロジェクトを推進し、居住者の生活をサポートする強力な助っ人となる〈コレクティブ応援団〉のような人たちはいますか」。

コレクティブ住宅とコミュニティ

神戸協同病院　上田耕蔵

コレクティブ住宅は独立した各住宅と広い協同室とから成る。各住戸が内廊下で繋がり、1軒の大きな家のイメージを形成しているものもある。いずれも生活支援員が配置されるが、入居者の孤立を防ぎ、ふれあいと自治が図られる構造になっている。いわば下町長屋の助け合い生活を目指す。

公営コレクティブ住宅は入居して長い所で2年半、短い所では1年弱である。コミュニティを形成するには、まだ時間が短すぎるが、それでもうまくいっている住宅もある。またある時期「うまく」運営されていても、1カ月後に生じた問題で立ち止まっているところもある。リーダーに恵まれるかどうかが大きいとも言えるが、基本的には「うまくいかなくて当然」とみるべきかもしれない。旧市街地のコミュニティは何十年もの積み重ねの末に形成されてきているが、公営コレクティブは始まったばかりなのだ。

コレクティブ住宅は住まい方において「一定」以上の互いの関係、取り決めが必要となる。各入居者にとってコレクティブで暮らす必然性（動機）が一定以上ある場合には成立しやすいが、必ずしもそういった入居者ばかりではない。今後、協同空間における義務がそう強くなくても適度なふれあいが得られる「ゆるい」タイプも志向されるべきである。

Collective Housing

3

一度に5住宅を事業化した県営コレクティブ

いろんなパターンを試してみましたというが…

（1）兵庫県のコレクティブハウジングの事業方針

◇急ピッチで事業化決定、いろいろなパターンの実験的な試み

兵庫県が災害復興県営住宅にコレクティブハウジングを導入しようと、検討をはじめたのはいつからなのか、詳しくは知りません。しかし、1995年の9月から開始された神戸市の研究会の第3回（11月2日）に兵庫県の坂井豊さん（当時兵庫県都市住宅部都市政策課）たちが新たに参加されたのを覚えています。もちろん、それ以前の8月31日のいきいき下町推進協議会コレクティブハウジング勉強会、9月21日の第1回ミーティングからスタートしたコレクティブハウジング事業推進応援団などにも、大きな関心を寄せられていました。

震災の年の秋頃からはじまった兵庫県の取り組みは、急ピッチでかつ本格的なもので、翌96年3月には1週間あまり、北欧へ実態調査に行かれたほどでした。96年夏には神戸市内へ5団地（片山、南本町、岩屋北町、大倉山、脇の浜）131戸の建設が計画され、設計作業と並行して管理運営や入居者選定などのソフト対応への研究会も進められました。97年2月には、2団地（尼崎の金楽寺、宝塚の福井）101戸の追加建設が発表され、県営で7団地232戸が事業化されることになりました。

兵庫県のコレクティブハウジングのコンセプトは、①共同化することによって得られる豊かな生活、②居住者が共に支えあう安心生活、③地域サービスとのつながりのある生活、の3点です。

計画・設計方針としては、次のような特色があります。

1　コレクティブゾーンと一般住宅ゾーンは、明確に区分するが、居住者の交流空間を形成し、地域とのつながりなど、ネットワークを重視した配置構成とする

2　コレクティブ共用空間は最も日当たり等がよく、気持ちのよい場所に設ける

3　共同の履き替え線を設定し、共用廊下を含めて共用空間を室内化する

4　共用玄関廻りに事務室、共用洗濯コーナー、パッシブソーラーシステムなどを設ける

県営ふれあい住宅7団地は、いろいろなコレクティブハウジングのかたち（パターン）を実験的に試みており、それぞれ特徴を持っています。全てシルバーハウジングです。

1　**片山住宅**―木造2階建のひとつの大きな家の中に6戸があり、庭と一体となった協同室がある

2　**南本町住宅**―1階共用玄関脇に2層吹き抜けの大きな協同室があり、2～5階にも日当たりのいい協同コーナーがある

3　**岩屋北町住宅**―1階共用玄関脇にゆったりした協同室があり、2階に屋上広場、2・3階に薄暗い共用洗濯コーナーがある（共用洗濯コーナーは全ての県営ふれあい住宅にある）

4　**大倉山住宅**―1層8戸で4層のふれあい住宅が14階建ての1～4階を占め、各階中央に2戸分の協同室があり、各戸のバルコニーから続いていて、ここから協同室にも行くことができる。

5　**東部新都心・脇の浜住宅**―1・3・5階にそれぞれ2層吹き抜けの大きな協同室があり、2・4・6階のエレベータ廻りにもかなり広い協同コーナーがある

6　**尼崎・金楽寺住宅**―71戸もある戸数規模の大きな住宅で、シルバーハウジング以外に一般世帯がある。各階に大きな協同室と和室があり、さらに1階にはコミュニティプラザもある

7　宝塚・福井住宅―シルバーハウジングと一般世帯があり、1階に大きな協同室、2・3階に小さいが協同コーナーがある

(2)　県営第1号の片山ふれあい住宅

◇一回目の募集は応募者なし

97年2月の災害復興公営住宅の第3次募集で、全国初の試みであるコレクティブハウジングが二つ、兵庫県営片山ふれあい住宅と神戸市営真野ふれあい住宅が募集されることになりました。片山ふれあい住宅の募集と真野ふれあい住宅の募集が同時期だったので、コレクティブハウジング事業推進応援団は仮設住宅を巡っての出前説明会では、双方の説明をしてきました。しかし、説明会の段階から、片山ふれあい住宅は応募者はないだろうなーという感触を受けました。その思いをわたしは当時、次のように記しています。

97年3月17日午前現在、片山ふれあい住宅の応募は0です(募集締め切りまで後2日ありますが)。募集が始まる前から懸念していて、出前説明会でその感触がさらに強くなりましたが、やっぱりという気がしています。16日に森栗さんと現地を見てきました。やっぱりという気がさらに深まりました。それはこういうことで

図１　片山ふれあい住宅の外観

す。

住宅立地には、物的環境条件と社会的環境条件の適正化が大切だと思いますが、そのどちらもに片山住宅は適応していないように感じます。物的環境条件としては、坂の上の住宅地にあるということ。下のバス道から８％以上ではないかと思えるほどの急坂を登りつめた地点に建っています。８％勾配（１／12勾配）というのは、車椅子が使用できる限界の勾配です。福祉のまちづくり条例等の施設整備の基準値で、斜路（スロープ）の勾配は８％以下とされています。片山住宅そのものは2階建てで、内部にエレベーターが設置されています。しかし、この坂道にエスカレーターが必要なようです。最寄りの購買施設等の生活利便施設は、この坂道を下ったところに長田商店街がありますが、牛乳や果物、野菜など、日常食品の重いものを持ってこの坂道を登って帰るのは、高齢者にはしんどいと思われます。

社会的環境条件としては、周辺の住宅地が所得階層の高い戸建て住宅地であるということです。周辺住宅の多くが震災で全壊し、再建が進んでおりプレハブ系のハウスメーカーの住宅が目立ちますが、大きな規模のものが多いです。公営住宅の単身高齢者がこの地域に移り住んできても、地域との融合や地域からの支えは難しそうです。

建物設計上の課題もあります。住宅の造りが居住者の生活実態を知ったプランになっていません。例えば、６人（6世帯）で1機のエレベーターの維持費を持つことは、ひとり暮らしの高齢者にとっては経済的に厳しいものです。エレベーターはホームエレベーターのような小さなものでなく、共同住宅ということ

で共同住宅仕様のものが設置されています。また、木造2階建て住宅のエレベーターの設置位置からみて、運転時の音が住戸へ響きそうです。高齢者向け住宅といっても、2階ての6人用住宅にエレベーターの設置が必要なのでしょうか。他に代わるべき方法がありそうです。例えば、広い幅の階段があるので、階段に設置する椅子式昇降機(当初から設置する必要はなく、必要になった時に取り付けることができるようにしておけばよい)とか、ゆったりしたスペースがありそうなので緩い階段にするとかスロープにするとか……。なぜ設計段階でわたしに意見を聞いてくれなかったのという気分です。

次に、住宅募集条件の「ひとり暮らし高齢者が6人でグループをつくって申し込む」というのは、6人グループができるための適切なコーディネイトがなければ、一般にはグループ化が難しいでしょう。

福岡市に「ベウラの園」という女6名のグループハウスがあります。現在、居住者はかなり高齢になられましたが、彼女たちは20代のころから姉妹ともいえるような仲間たちで、ずっと独身でいらした方もあり、老後が不安だから、老人ホームに入るより気の合う仲間と自分らしく暮らしたいということで、89年から協同生活を始めたとお聞きしています。初期の段階はまさしくコレクティブハウジングとしての協働生活だったようですが、今は公的ヘルパーを活用しておられます。個人の状態によって公的ヘルパーが提供される時間数や内容も異なりますが、そこは6人がひとつ屋根の下に暮らしているメリットで、提供される時間なども合作して活用されているとお聞きしたことがあります。

片山ふれあい住宅の応募状況については締め切りまであと2日あるので、まだ結論をだすのは謹まなければと思いながらも、もし、今回の募集で応募者がなかったのなら、無理をして入居者を早く決めるよりも、いろいろな問題点を仕切なおして、入居前の協同生活の体験や協働トレーニングなどのシステムを確立して、全国のモデルとなるようなものをつくっていくことの方が、コレクティブの将来のために大切なことだと思います。それこそ県のコレクティブハウジングを事業化した心意気が生かされる方策だと思います。

◇新しい住まいの受け入れには醸成期間がいる

片山ふれあい住宅の応募者はありませんでした。今回の災害復興公営住宅第三次募集には新しいメニューが三つありました。コレクティブハウジングの供給、グループ入居制度、ペットと一緒に住める住宅の供給です。いずれも公営住宅としては多分全国初の試みだと思いますが、一部の住宅を除いて不調でした。しかし、わたしは不思議なことではないと思っています。不調に終原因を次のように考えます。

まず、情報が行き届かなかった。新製品開発の情報を、欲している人に届ける知恵が十分に出されなかったようです。次に、情報をキャッチして、それを自分の選択肢に入れるにはそれなりの時間が必要です。

新しい住まい方を自分のライフスタイルとして選択するには少し考える時間がいるでしょう。住まい方の意識はとても保守的なもので、募集の直前に新しい住まい方等の情報を知っても、それを自分の住まい方の選択肢として取り込めるものではあり

被災者向け共同居住型住宅

県、思惑外れ
応募者ゼロ

「PR不足が原因」
てこ入れへ
6日に見学会

阪神大震災で住まいを失った被災者向けに、兵庫県などが三月に行った災害復興住宅の募集で、公営住宅としては全国初の「コレクティブハウジング」（共同居住型集合住宅）や「ペット飼育可能住宅」が登場した。しかし、募集を終えてみると、県営コレクティブハウジングへの応募は「ゼロ」。県はPR不足が原因とみて、遅ればせながらの六日から現地で体験見学会を開く。

6日から見学会が行われる兵庫県営コレクティブハウジング

三万四千六百戸余りながらの仮設住宅での暮らしを余儀なくされている兵庫県。県は災害復興住宅として、低所得者向けに三百八十戸の公的賃貸住宅の供給を進めるとともに、高齢化対策として、ペットを飼育できる住宅や共同居住型の集合住宅を打ち出した。

コレクティブハウジングは、既成の住まい方にとらわれない新しい住まい方。各世帯がプライバシーを保ちつつ、食事など生活の一部を共にして、助け合いながら暮らすことを目的としている。

今回、県が建設したコレクティブハウジング（神戸市長田区）は、不遇、孤独との単身高齢者向け住宅。ふろ、トイレ付きの1DK六戸に加え、食堂や集会、居間など約五十三平方メートルの共用スペースを備えた。

「仮設住宅などでのコミュニティーを大いにたくさんいこうとの狙いに対応、県などは八年度までに、こうしたコレクティブハウジングを計二百六十一戸新設する」ことを予定している。一方、県は公営住宅の募集に先駆的な試みと自負している。

しかし、今年三月行われた災害復興住宅の第三次入居者募集では、余裕として六千三百十三戸の募集に対し約四百戸の応募があったものの、この中に片山住宅への応募はゼロ。同じ長田区内の神戸市営コレクティブハウジング（十九戸）、二度の応募を集めたのに対して、明暗を分けた。

年齢や世帯構成を考慮に設定した神戸市営住宅・応募資格を二十歳以上の単身高齢者に絞った不人気が応募ゼロの原因となった。

このため県は次回からの募集では、グループ募集に加えて、一人でも応募できるようにすることを検討している。

県は、六日から始まる見学会では、実際に料理などを体験してもらうとともに、アンケートを行い、応募者を募集する。

県は「完成したコレクティブハウジングを実際に見てもらうことで、理解を深めてもらえれば」（住宅管理課）と話している。問い合わせは☎078・341・7771（住宅管理課）。

図２　応募者ゼロを伝える新聞記事（日本経済新聞 1997 年 5 月 2 日）

なもので、募集の直前に新しい住まい方等の情報を知っても、それを自分の住まい方の選択肢として取り込めるものではあり

ません。日ごろからこういう生活がしたいなー、こういう生き方もあるらしいなーと、自分の問題としてとらえていなければ、新しい住宅が開発されたとしても関心はもてないものです。情報を自分のものにしていくには醸成期間が必要です。

グループ入居制度は、多くの高齢者が新しく移り住む地域の、新しい出会いに大きな負担を感じており、仮設住宅で仲よくなった人たちが一緒に移り住めるようにという暖かい配慮が感じられる制度です。とても画期的ないい制度だと思います。しかしグループ応募は、自分の中の醸成だけでなく、他者との共有の醸成も要ります。将来の生活を他者と共有するためには、例えば、一緒に草花の手入れをしながら、あるいはお茶を飲みながら、話し合う時間が必要です。

「こんど公営住宅に移っても、一緒にこんなんできたらええのにねぇ」

「グループ入居制度というのがあるんやて。今度の募集の時、グループで応募せえへん？」

「ふーん、そんなら○さんも誘うてみよか」

「△さんはどうやろ？」

というように、グループ応募の合意ができるものだと思います。このようにしてできたのがほんまもんのグループ入居で、誰かがコーディネイトしてグループ化を図るものではないと思いますが、グループをつくって応募するのは、かなりのエネルギーが必要なので、場合によってはグループ化のきっかけづくりの適切なコーディネイトが必要でしょう。なお高齢者がグループで移ろうという仲良しは2～3人で、4人、5人という大きさではないようです。それでは数世帯規模のグループはできないのかというと、それは皆無ではなくて、そのグループの中に夫婦世帯か、比較的元気な（やや若い）リーダー格がいれば可能性はありそうです。

コレクティブハウジング以外の災害復興公営住宅で適用されたグループ入居制度に対しての応募は21件あり、17件が2世帯のグループでした。なお、グループ応募が少なかった一因は、グループ入居ができる住宅が限られていて、その立地や住戸型に人気がなかったということにもありそうです。

◇仕切りなおしてオープンハウスの実施

5月末に先の募集で応募のなかった片山ふれあい住宅の体験見学会に出かけました。見学者の入りは順調なようです。まだ見学会の日が残っていますので、最終的な見学者数は200人を超えるでしょう。わたしが出かけた日までには約150人の見学者があり、県は来訪者に入居意向のアンケートを採っていました。来訪者の80％の人がこのような協同居住型集合住宅に住んでもいいと希望しています。そして5月末では約30名がこの片山ふれあい住宅の入居を希望し、その入居資格条件に適合しているようでした。わたしが見学に行ったときは数名の見学者がいらして、県の管理課の若い男の職員が説明をしていました。コレクティブハウジングとはどんな住まい方というような話よりは、ハードな説明（緊急通報や電気調理器の使い方等）に偏っていましたが、まぁ仕方がないでしょう。そもそもコレクティブハウジングについて、よう分かってはらへん管理課の人なんやから。計画課が勝手につくって、管理課は募集や建物管理だけ任されるんやから気の毒なことです。

当日の見学者からは、「知らんもん同士が入居してもすぐに協同生活なんかできへんので、初め2カ月ぐらいは県の人が来て、いろいろ面倒みてほしい」という意見がありました。一人の元気そうな高齢者が「みんなで住むんやから、協同生活の規則は守らなあかん。規則が守れんような人は住んだらあかん

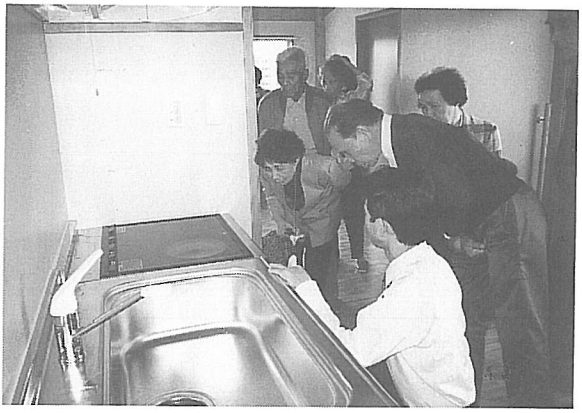


図3　住戸内の台所・電気調理器の説明をきく体験見学会の見学者

な」と、言っていました。先日放送されたラジオ番組の中で、県の管理課長は「最終的には50人ほどの応募があると思う。入居者の選定は抽選ではなく、本当に適した人に住んでもらうようにしたい。来月に入居者を決める」と話しておられました。

わたしは、そんなに早く入居者を決めて入居を急がないで、今しばらく自由な見学ができるようにしておき、もっと多くの人にPRすることが大切だと思っています。秋には県営のコレクティブがさらに4地区220戸ほども募集されるので、そのためにも片山ふれあい住宅の体験見学会というのでなく、コレクティブハウジングを分かってもらうためのモデルルームと協同調理などの体験場所としての活用が望ましいのではないかと思います。いずれまた、県に言ってみようと思いますが……。

県に言うといえば、見学に出かけた翌日、県に電話をかけてこんなやりとりをしました。

「各住戸の台所には、電気調理器とたっぷりした流しがありましたけど、調理台がないのはどうしてでしょうか。忘れてはるんとちがいます?」

「調理台って何ですか?」

「流しで野菜など洗った後、切ったり、火から下ろしたお鍋など置いたり、料理する時の調味料やお箸やおたまやなんか置くスペースです」

「そうですか。今日の午後、短大の先生が見学に来られるので、意見を聞いてみますわ」

「そうですか。よう見てもろてください」

電話を切ってのわたしの独り言。〈アホッ！　生活ベテランのわたしが言うとんのに、短大の先生に聞いて、それでどうするんや！〉。

そして後日、県から電話がありました。

「台所の流しは、現場で大きい方が便利やと思て大きいのを入れたので、調理スペースがなくなったらしいです。それで言われたように調理スペースは必要なようなので、流しの上に置けるようなステンレスの板を付けますわ。同じような問い合わせが見学者からもあったそうです」

またわたしの独り言。〈ほんまにアホやなぁ。生活知らんもんが、現場で思いつきで対応せんといてよ〉。

片山ふれあい住宅のコレクティブハウジング体験見学会は、5月の毎週火曜日と水曜日はコレクティブハウジングの説明の後、電気調理器を利用して湯茶をいれるなどの体験コース、木曜日は簡単な昼食を作るという体験コースが行なわれ、12日間で合わせて300余名の参加がありました。体験見学会での住宅の説明は県の住宅管理課職員が行い、電気調理器の使い方指導と食材の提供は関西電力が、調理補助は兵庫県栄養士会がボランティアで支援しました。コレクティブハウジングの住まい方や協同室の維持管理ルールづくりなどの話は、コレクティブ応援団が適任だと思うのですが、県からは体験見学会開催についての連絡もなく、支援の依頼もありませんでした。募集時の入居申込案内書の片山ふれあい住宅のコレクティブハウジングの説明は、印刷間際に分かりやすい説明文をわたしが書いてあげたといういきさつもあるので、何らかの連絡ぐらいがあって当然だと思うのですが…。

◇居住者選び、そして協同居住のスタート

片山ふれあい住宅の体験見学会は人気を呼び、全部で300人以上の参加者がありました。先の募集で応募がなかったので、あわててやった見学会ですが、初めからやっておけば、さすが新しい試みの住宅供給に対して気合が入っていると評価され、新聞等で叩かれることもなかったのに…。

見学会参加者に現地で受け付けた入居希望者のうち入居資格がある人は55人（男15人、女40人）でした。県は入居選考会議を設けて選考することにし、小林郁雄さんも委員の一人になりました。

希望者55人に対して、入居意志の再確認、協同空間利用方法、費用負担、協働意志などについてのアンケートを郵送した結果、半数が辞退してきましたので、残った人たちに再度現地で説明会を行いました。そこで必要となる共益費の見積額（7千円／月）や協同居住のイメージなどの説明を行った結果、最終入居希望者は20名弱になったそうです。入居選考会議の助言によって、残った最終希望者の男女比や年齢構成比からみて、入居者6人は「男2、女4に、年齢は男は60代1、70代以上1、女は60代2、70代以上2」となるような方法で抽選が行われました。

7月末に6人の入居者が顔合わせをして、部屋の位置決めをし、県からは自治会規約案や共同空間利用要綱案が提示されました。その要綱案には、毎月1回の全員の話し合い、全員参加の食事会、毎週1回以上のお茶会をもち話し合う機会をもつこと、協同室使用時間は原則として9時から21時、毎週1回の掃除の日と毎月1回の住宅周辺の掃除を持ち回りでやることなどが記されています。これらの協同居住のルールは本来なら居住者が決めていくものですので、県はかなりお節介をしているような気がします。しかし、これは既述のような難産の経過があったからでしょう。

8月初めから入居が始まり、入居後しばらくは報道陣が押し寄せました。また、オール電化住宅のため、関西電力の調理講習スタッフによる食事会開催のサポートや県の特別なサポートなども続きました。小林さんは阪神グリーンネット〔注10〕の活動として、庭に植える花の苗を山ほど届け、さっそく居住者と仲良しになり、コレクティブ応援団とのお付き合いもできるようになりました。

〔注10〕緑化まちづくりを支援するＮＰＯ団体。

◇入居１年を迎える片山ふれあい住宅の日々

ある夜、少し遅くに電話がありました。

「石東さん、元気？　わたし、誰か分かる？」

「……」

「片山ふれあい住宅のＡです」

「やぁー、Ａさん。もうすぐ一周年やねー」

「一周年のお祝いにみんなで神戸港のディナークルーズするんよ。敬老の日は高齢者の乗船が無料やから、６人のディナー代は共益費から出せるぐらいに貯まったから申し込んだんよ。そしたら地域の老人会の人、11人も一緒に行きたいということになって17人の大ツアーよ。やっとうまく落ちついたんよ。いっぺん来て」ということで、久しぶりにお訪ねしました。

木造ロッジ風の片山ふれあい住宅の庭には芝生が芽吹き花が育ち、一年の歳月を感じさせます。玄関

を入ると、「ひとつ屋根の下で」と書かれた額が目にとまりました。お邪魔してから3時間、次から次へと、たくさんの話をうかがいました。

ここには62歳から82歳までの、男2人を含む6人が入居しています。震災によって家族を亡くし、家財道具すべてを失い、またある人は倒れた家屋の下に長時間埋まっていました。仮設住宅からここに移って来た6人は、新しい暮らしに戸惑いながらも、今、一年の歳月を経て、友達家族のようなゆるやかな協同居住が育まれています。1階は協同スペース（厨房、食堂兼リビング、和室の談話室、便所に、シルバーハウジングプロジェクトの生活援助員さんの事務室等）と2住戸、2階に4住戸あります。それぞれの住戸は30㎡弱の1DKで、台所、浴室、便所があります。6人は年長順に、お父さん、お母さん、お姉さんと呼びあっています。二人の姉は勤めを持っており、わたしがおじゃました日は、妹格の会長と年長のお母さんにお話をうかがいました。協同居住を育むための、ずっしり重みのある言葉の数々です。わたしは忘れないようにと、感動した言葉は何回も頭にたたき込み、お暇して電車に乗ってすぐメモをしました。そのいくつかを、ここで紹介しましょう。

「自治会長を引き受ける時、陰口だけはやめとこう。言いたいことがあったら、本人に言う、皆の前で言うということをお願いした」

「何か提案したりする時は一番年長の身になって考えなあかん。わたしが80歳になった時、こんなん言われたらどう思うやろかという気持ちになって考えている」

「うれしいよ。楽しいよ。月一回の食事会は何になるのか楽しみ。ひとりでは作らへんようなものが、みんなでは食べられるから」

「コレクティブハウジングのこと、よう認識して、モデルになるような住み方せなあかん。全国で注目

されてんねんから」

「腹わって生活しとうから、自分が悪かったと思ったら、ごめんねと言える」

突然、会長が「焦げ臭いな。誰や。お父さんの部屋ちがうか」と走って行きます。「魚焼いてたわ」と、戻ってきて、「お父さんも料理できるようになったんよ」と。ここで自立生活の技も教わりました。服飾デザイナーの会長自身にも変革がありました。「遅ればせながら、福祉の勉強を始めたんよ。ある程度のことは知っとかなあかんので」と言われます。

◇入居2年半をへた日々

99年の晩秋、所用で近くまできたので片山ふれあい住宅を訪ねました。わたしはふれあい住宅の近くまできたら、時間の許すかぎりちょっとお訪ねすることにしています。突然お訪ねするのは悪いかなという気もあるのですが、それよりもちょっとだけ訪ねてみたいという気が勝ります。

玄関でAさんの部屋のインターホーンを押すと返事がなく、お留守かなと思っていると、突然ご本人が玄関に現れました。

「突然来て、ごめん。ちょっと顔みるだけと思って…」。

「上がって、上がって。うちの部屋で話しょうか。馬小屋みたいに散らかっとうけど」と、彼女の部屋に導かれました。

それから2時間近く話し込み、途中で「お母ちゃん呼んでくるわ」と、2階のBさんが呼ばれ、3人でまたしゃべりました。これまでにも時折うかがっていた話もありますが、入居から今日にいたるまで

図4　片山ふれあい住宅のおふたり、協同室で

の2年半余におよぶ6人の協同居住のものがたりをうかがいました。その一端はすでに前節で紹介していますが、またテレビによっても全国にしばしば放映されています。

片山ふれあい住宅は県営コレクティブハウジングの中の優等生です。県の職員は「Aさんのほうに足を向けて寝られへんな」というほどに、県にとっては復興事業の中の誇れるスターなのです。そこにはひとえにAさんの献身的な努力があります。97年の募集時にわたしが懸念したいくつかのことは、Aさんの的確な状況判断と努力によってクリアされています。そのひとつに地域との交流があります。Aさんは地域との交流をとても重要なことと考え、片山ふれあい住宅が地域の中で孤立したものにならないようにと、いろんな試みを展開しています。たとえば、夏休みに地域の子供たちを合宿に招き、食事を一緒に作ったり、居住者のじじ、ばばの戦争体験話などを語ったりして、子供たちにとっても居住者にとっても楽しい時間を共有します。そして、子供の親たちとの交流のきっかけをつくりました。また、近隣のお年寄りたちをクリスマス会に招いたり、食事会を開いたり、暮れにはおせち料理の注文まで受けました。さらに料理の達人Aさんは、500円で食べ放題、子供は無料という食事会も開催して、近隣の多くの人が参加するようになり交流の輪を広げています。今は、のど自慢の居住者が先生となってカラオケのつどいがもりあがっているようです。この地域にもひとり暮らしのお年寄りが多く、片山ふれあい住宅の催しを楽しみにしている人たちが少なくなく、片山ふれあい住宅の協同室は地域の憩いの家のような存在です。

居住者6人の協同居住では時には派手なケンカなども突然発生するそうですが、Aさんの的を得た仕切りのもとに、安心した、安全な日々が流れているようです。Aさんは6人家族の大黒柱的な存在で、みんなに頼られています。Aさん無くしては現在の片山ふれあい住宅の協同居住はありえないでしょう。「わたしは夜も自分の部屋の入り口を開けて寝とんよ」と、Aさんは言います。

入居2年半余りが過ぎて居住者にも変化が生じています。99年の初めにお一人が亡くなりました。また、別のお一人は高齢のために自立した日常生活が難しい状況になってきています。空室補充の人選や要介助の居住者の対応など、新たな課題がでてきました。時の経過とともに発生してくる新たな課題に対して、県は対応のシステムを構築していかなければなりません。これは片山ふれあい住宅だけの課題ではなく、すべてのふれあい住宅にも当てはまることですが、片山ふれあい住宅は6人という小規模グループ居住ということもあってより深刻さを増す課題です。

すっかり話し込んで気がつくと、外は闇が迫っていました。Aさんと連れだって外に出て、近くのお好み焼屋で夕食をごちそうになって、帰路につきました。

片山ふれあい住宅ものがたりをうかがって、Aさんの人柄とそのファイトに改めて感心しました。と同時に、わたしはちょっと考えこんでしまいました。

片山ふれあい住宅はコレクティブハウジングとは言わないのではないかということです。「居住者が協働で協同居住を運営する」という姿ではなさそうです。Aさん一人の捨て身のサポートのもとに協同居住が展開されているようで、他の居住者はサポートされる側の人になっています。Aさんはシルバーハウジングの住み込みの生活援助員以上の役を担っていて、Aさんがいなくなったら今の協同生活が続けられるような体制にはなっていないようです。また、今の状況では空室の新たな入居者選定も難しいよ

うに感じられます。もちろん、このようなグループ居住もすてきな住まい方のひとつですが、これがコレクティブハウジングだとテレビなどで全国に紹介されると、コレクティブハウジングを指向している人たちの足をちょっと引っぱってしまいそうです。Aさんのように誰かがあそこまで献身的に支えなくてはならない協同居住、あそこまで支えられては支えられたい人にとっては住み心地はいいが、協働で生活したい人にとっては二の足を踏んでしまうという逆効果もあるのではないでしょうか。

協同居住の運営に全力を注ぐAさんを陰でサポートしている彼女の娘さんからは「ママは今までにないほど輝いているよ」と、言われているそうです。

(3) 大団地の中のコレクティブ／大倉山ふれあい住宅

大倉山ふれあい住宅は500戸余りの大団地・県営大倉山住宅の中に組み込まれた単身高齢者世帯向け32戸で、すべてシルバーハウジングプロジェクトの制度がかかっています。地下鉄駅がすぐそばにあり、大きな下町商店街にも近く、町なかの利便性のいい環境条件です。団地の中の高層住棟の一番いい位置、南側に面した1階から4階にコレクティブ住戸がはめこまれています。32戸全体の協同スペースはなく、ワンフロアに8戸単位の小規模コレクティブが四つあるというものです。大倉山住宅は震災前から建設中だった民間のマンションを災害復興住宅として県が買いとったもので、コレクティブ住戸（1DK）はもとの1住戸を2戸に割って作られ、協同室はもとの1住戸分のスペースです。

◇入居前交流会（顔見知りになる集い）

年度末のわたしの大仕事のひとつ、確定申告を済ませ、ほっとした98年3月18日、大倉山ふれあい住宅の入居予定者に対する入居前の交流会（災害復興公営住宅入居予定者事前交流事業）〔注1〕を行いました。県営コレクティブハウジングに対する交流事業は、1月に行った岩屋北町ふれあい住宅と南本町ふれあい住宅につづいて三つめになります。コレクティブハウジングの交流事業は終わると、どっと疲れを感じます。でも、三つめの大倉山ふれあい住宅は、前の二つに比べて、うーんと軽くしようということで始めました。

図5　大倉山ふれあい住宅の外観、1階から4階がふれあい住宅の住戸

大倉山ふれあい住宅は昨秋の募集で32戸の住宅のうち31戸の入居予定者が決まりました。残り1戸については今年に入ってから再募集した結果、19倍の倍率でした。無事難関を突破して当選した人が、なんと書類審査で不適格となり、また、振り出しにもどった状態だそうです。

31戸の入居予定者は、男18名、女13名です。平均年齢は、男が65歳、女が72歳です。60代前半の若い人が10人もいます。この男女比と年齢構成は、神戸市営の真野ふれあい住宅や久二塚西ふれあい住宅とは大きなちがいあります。

わたしたち『コレクティブハウジング事業推進応援団』です！

わたしたち『コレクティブハウジング事業推進応援団』は、震災復興の住まいの中に《コレクティブハウジング＝協同居住型集合住宅＝ふれあい住宅》の実現を目指して、応援活動をしてまいりました。
コレクティブハウジングとは、それぞれ独立した住宅と、みんなで使える協同室（協同の台所、食堂、談話室など）をそなえた集合住宅です。
－いつでもだれかに会えるし、いつでもひとりになれる－
－ひとりで食事をするよりは、
たまには大家族のように集まって食べよう－

被災地では全国で初めての公営コレクティブハウジングが建設されました。県営片山ふれあい住宅は97年8月に入居し、神戸市営真野ふれあい住宅は今年の1月から入居が始まります。続いて県営コレクティブハウジングの岩屋北住宅、南本町住宅、大倉山住宅、尼崎金楽寺住宅、宝塚福井住宅などの入居が始まります。　わたしたち『応援団』は、コレクティブハウジングの実現に向けて、情報提供やPR、計画策定への参画、仮設住宅を巡っての説明会などの支援活動をつづけてきました。
また、真野ふれあい住宅では入居予定者たちの「入居前暮らしのこん談会」を企画・運営し、入居予定者の意見交流や協同居住のための備品の購入などについても準備をしてきました。

これから入居が予定されている県営コレクティブハウジングについても、入居前に知り合いになって、入居後の協同生活について意見交流をしたり、協同室の備品の購入や協同居住のルールづくりについて語り合い、準備するような会合が必要だと思っています。
そこでわたしたち『応援団』は、「入居前暮らしのこん談会」または「入居者交流会」を企画し、その運営などの支援をしたいと思っています。
みなさん方のなかで、そのような会合を希望される方は、下記の『コレクティブハウジング事業推進応援団の事務局』まで、ご連絡ください。
コレクティブハウジング事業推進応援団／応援団長　石東　直子

コレクティブハウジング事業推進応援団／事務局
電　話　078－842－2311
ファックス　078－842－2203
石東直子　小林都雄　天川佳美　吉川健一郎

図6　コレクティブ応援団のサポート呼びかけの案内、初めて入居予定者に会う日に配るお知らせ

その要因のひとつは、募集時に示された県営ふれあい住宅の協同室の光熱水費などの協同生活運営費の見込額が高いことにあると思われます。協同生活運営費と公営住宅の共益費（エレベーター、廊下灯、散水のための光熱水費などで大体2千円から3千円／月）を合わせて、県営ふれあい住宅は月額1万2千円程、市営真野ふれあい住宅は4千～6千円と説明されました。県は家賃の他にこの1万2千円が必要であるということを強調して説明し、入居者をふるいにかけた結果になりました。一般的に年金額の高いのは女よりも男であり、まだ現職についている人にとっては負担しえる額と考えられるという点から、県営ふれあい住宅の入居者属性がでているのだと思います。他の県営ふれあい住宅もほぼ同じような入居者属性です。

なお、県が見積もった1万2千円の共益費は、入居後しばらくして多くのふれあい住宅は6千～8千円に下げています。協同居住を育むためには居住者にある程度の経済的なゆとりがなければ難しいと思います。さらに経済的なレベルがほぼ同じ状態の人たちであることも必要条件のひとつと考えられるようです。

今日のサポーターは、コレクティブ応援団のいつもの4人組（小林、天川、吉川、石東）と神戸芸工大の卒業間近の原田陽子さんと三吉孝典さん、建設会社勤務の若い藤本千絵さんです。プログラムは、

午前11時に神戸文化ホール多目的室に集合して、そこからゆっくり歩いて10分ほどの距離にある大倉山ふれあい住宅を見学し、また文化ホールに戻ってきて、グループ（階ごとの8人のコレクティブ単位）に分かれて昼食をとりながらミーティングをするというものです。ミーティングの主な内容は協同室に必要な備品の準備についてです。文化ホールの予約や使用料の支払い、各入居予定者への案内状の発送および住宅見学の際の建設担当者の説明依頼（まだ工事中のため）までの段取りは、県管理課の担当です。

〔注11〕「災害復興公営住宅入居予定者事前交流事業」は阪神・淡路大震災復興基金によって創設され、交流事業を行う支援団体に事業のための活動費助成があります。一般の災害公営住宅では1～2回の交流事業ですが、コレクティブハウジングの場合は、1住宅につき2回ほどの食事会とその他に数回のサポートを短期間にすることになります。

◇工事中の住宅見学と昼食会ミーティング

集合早々に、今日のプログラムを説明して、2班に分かれて現地に向いました。ひとり暮らし世帯ばかりのはずなのに夫君らしき人と寄り添って歩いているカップルがいたり、娘につきそわれて来た人、おしゃれな服装の人、ちょっとダンディに帽子をかぶった紳士、和服をしゃきっと召した婦人もいてと、一人、二人は足元がおぼつかない人がいますが、みんなはまだまだ元気です。

ふれあい住宅は60㎡ほどの協同室の両隣に35㎡ほどの1DK住戸が4戸ずつ並んでいて、各住戸と協同室の入り口は北側の通路に面してありますが、南側のバルコニーは各戸の仕切がなくつづきバルコニ

図7　入居前の住宅見学会で、工事中の住宅へ向かう

ーで、そこからも協同室に出入りできます。日常的には協同室への出入りはここからが主となるでしょう。協同室の前のバルコニーは4mほどの奥行きがあり、テラスとしても活用できる広さです。こじんまりしたコレクティブハウジングとして使いやすいタイプのようです。

まず、協同室からの見学です。

「いいねー」「ひろいねー」と感嘆の声があがりました。

「ちょっと待って、ここは各自の住宅じゃないのよ。8人で使う協同室よ」というひとこまから始まり、バルコニーから各自の住宅を見学にいきました。大きな部屋を見た後では、住宅の狭さを感じてしまいますが、作りつけの収納スペースが割と広く、「タンスいらんね」とか、「この押入の棚をはずして、タンスが入るね」とか、「仏壇どこにおこう」とか、メジャーを持参して要所要所を計っている人とか、新しいわが家への引っ越しを楽しみにしておられる様子が感じられ、心なごむ風景です。男に比べて女は素直にうれしさを表されます。つづいて団地全体のコミュニティプラザ（広めの厨房設備等がついた集会所）の見学に向かいました。明るい造りのコミプラですが、ふれあい住宅の入居者にとっては自分たちの協同室があるので、ここは余り使うことはなさそうです。

見学を終えて、8人のコレクティブグループに分かれて、昼食をとりながらミーティングに移りました。お弁当はコレクティブ応援団の名物になっています。高齢者の口に合いそうな内容のおかずがぎっしりつまっています。天川さんが特注してくれました。わたしと藤本さんは2階グループの進行役を務めましたので、ここでは主に2階グループのミーティング状況を紹介します。

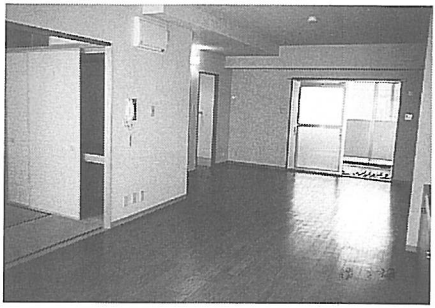


図９　入居前の住宅見学会、協同室

図８　住戸内を見学する

「このお弁当、すごいでしょう。なんぼやと思われますか？」と、わたし。

「そやなー、２千円ぐらいかな」「いや、そんなにせえへんで、１２００円ほどとちがうか」「いや、700円ぐらいやで」「700円で買えるかいな」と、値段付けには幅がでます。

わたしが「ほんまわね、480円なんです」と言うと、みんなはびっくり。

「これは、水道筋商店街のお惣菜やさんの特製です。今後、みなさんがたまには集まって食事をしようというような時、自分たちで作るのはまだ無理そうなら、注文できそうです。または３、４人が出前を頼もうかという時にもお願いできそうです。みんなで一緒に食事をする機会ができれば、協同生活がすべりだすと思いますのでご紹介しました」と言いますと、「ほんまや、どうせわしらは外食したりすることが多いしな」「ひとりやと、こんなにいろいろおかず揃えられへんし、ひとりの食事づくりてめんどうやしね」「それ、どういう名前の店ですの？　名前、書いとこ」などなど。

今日のお弁当はお昼ごはんなので480円ですが、駅弁でこれ程の内容のものなら800円ぐらいしそうです。南本町ふれあい住宅と岩屋北町ふれあい住宅の交流事業での夕食会では、１千円のお弁当を注文してもらったのですが、食べきれないほどの内容とボリュームでした。

食事がすすんだころをみて、自己紹介に移りました。２階グループは、男５人（うち１人は欠席）と女３人のグループになりますが、付き添ってきた夫君らしき人も同席です。

「わたしは健康。身体を動かすことなら、なんでも役に立ちたい」

「マージャンが趣味で毎日やってる。新しい住宅でも好きな人がいたら一緒にやってもええ。大きなお金はかけてへん」
「協同で買うものを早く決めたい。自分のものでも、協同室に出してみんなで使ってもいいというものなら出してもええわね」
というのが、お三方の女の自己紹介です。
「玉突がリハビリにいいのでやっている。協同のことは入ってみんと分からん」
「ビルの管理の仕事をしているので、昼は日曜日しかいないが、あらゆることに協力します」
「釣りと将棋が好き」
という男の自己紹介につづいて、最後の一人が尋ねる。
「協同室はどんなん？」（えっ！　今、見てきたやん。わたしは心の中で叫ぶ）。

◇協同室の備品希望はさまざま

お互いにグループの人たちのことが少し分かってきたので、今日の交流会でいちばん大事なこと、協同室の備品の調達について話し合うことにしました。備品購入資金は20万円を限度として、阪神・淡路大震災復興基金で創設された「被災者向けコレクティブハウジング等建設事業補助制度」があり、入居者が申請すれば助成金が受けられます。しかし、先に備品を購入してその領収書をそろえて報告し、審査に通れば助成金が振り込まれるというシステムなので、それまでは誰かが立て替えておく必要があります。岩屋北町ふれあい住宅と南本町ふれあい住宅は、コレクティブ応援団と家具屋さんが立て替えま

した。岩屋北町ふれあい住宅は協同室が各階にあるので3階分の60万円で、南本町住宅は5階分の100万円です。ここ大倉山ふれあい住宅では階ごとのグループに20万円ずつ助成されますが、わたしたちコレクティブ応援団はもう立て替えるお金がありませんので、大倉山ふれあい住宅では立て替えはしないという方針で臨みました。そこで、どんな備品を揃えたらいいかということと合わせて、購入資金をどうするかということも決めなければなりません。そういうことで、今日の交流会は少ししんどい気分で臨んでいました。みんなが出し合って立て替えておくことに賛同をしてもらいたい、でも、引っ越し等で出費も嵩む時にそれだけの余裕がある人たちなのだろうかと気になっていました。立て替えができなければ、備品購入は急がなくても、8人の小グループなので、しばらくの間は、各自の部屋から必要なものを持ち寄ればいいと思います。

まず、わたしのグループからリードして決めて、他の3グループに紹介をしたいとも思っていたので、早めに話を進めていきました。幸いなことに、協同室の電磁調理器とそれに合うヤカンとナベは、関連会社が寄付してくれることになったのでそれを伝えました（先の二つの県営ふれあい住宅は電磁調理器でなくて都市ガスなので、コレクティブ助成金からガス調理器やヤカン、ナベなども調達しました。なお、片山ふれあい住宅は協同室と各住戸とも電気調理器が設置されており、大倉山ふれあい住宅は協同室は電磁調理器が設置されていますが各住戸は都市ガスです。住宅によって場当たり的な対応がなされています。これについては電気供給会社と行政とのいきさつがあるのでしょう）。

あと協同室に必要なのは、テーブルとイス、カーテン、和室に置くホームゴタツは要りそうです。大体ここまでは、みんなの意見が一致しました。その他として、テレビ、掃除機、湯飲み、ポット、トイレの小物、スリッパ、コーヒー沸かしなどなど、思いつくままにたくさん意見がでました。このような

話になると俄然女の意見がにぎやかで、男は寡黙です。突然、意見をリードしていた女が言います。「洗濯機がいる。協同室に洗濯機置き場があったよ」と。「洗濯機？　なんで要るのん。要らん、要らん」「要るんちがう」と、やや険悪ぎみです。

「共同の洗濯機をどう使うの？　各自の洗濯機はもたないことにするの」と、わたしはたずねます。

「各自のはそれぞれ必要やけど、協同室の座布団カバーやコタツカバー、カーテンを洗うときに要るでしょう」「そんなもの洗うだけに共同の洗濯機を買う必要ある？　20万円しか予算はないのよ」。結局「コタツカバーなどは、順番に各自の洗濯機で洗うか、しょっちゅう洗うものでもないのでクリーニングに出してもええのんちがう？」ということで収まりました。

「備品購入のお金はどうしましょうか」と問いかけると、「8人やから、2万5千円ずつ出し合ったらええがな」と、一人の男が言いました。「そやな、そうしょう」と女たち。ということであっさり決まりました。

「次は、どこで、いつ、だれが買いに行くかを話し合いましょう」というと、「そんなんは、ボランティアの人がやってくれるんとちがうの」と言われたので、わたしは「いいえ、わたしたちはそこまでしません。こういう話し合いの場をもつ段取りをしますが」と、はっきり言いました。南本町ふれあい住宅と岩屋北町ふれあい住宅では買い物にも同行したのですが、もうそこまでサポートするのはやめることにしました。

「他のグループも一緒に買えば、少し安くなるかもしれないので、各グループから備品購入の世話役を選んで、あとは世話役におまかせするということでどうでしょうか。他のグループの様子をちょっとみてきますので、世話役を選んでください」と言って、わたしは他のグループの様子を見に行きました。

3階グループは原田陽子さんと県の係長が、4階グループは三好孝典さんが一人でサポートしてまとめてくれました。原田さんと三好さんは、真野ふれあい住宅や久二塚西ふれあい住宅でもサポートしてくれており、このようなワークショップのリード役としてのベテランです。二人がまとめたメモをみると、この2グループには元気な入居者が多そうで、自己紹介の内容も積極的です。希望備品のリストはカーテン、テーブルと椅子、湯飲みは同じくあがっており、テーブルなどはリサイクル品があればとか、テレビや冷蔵庫はボチボチ揃えよとか、グラス、お皿はBさんが寄付してくれますとか、細かく記されています。3階グールプでは協同備品の購入費を一括してCさんが立て替えてくれますと書かれており、みんなの意見では、20万円を超えても本当に要るものだったら買おうよとも書かれています。

しかし、1階グループは、ちょっと様子が違うようです。県が部屋決めをした時、足腰の弱い人で1階に入りたいと希望した人たちを1階の住戸にしたので、1階は年齢の高い人、足の弱い人、耳の聴こえにくい人などが集まってしまって、世話役のなり手がありません。このグループは、天川さんと吉川さんがサポートしていましたが、二人の奮闘にもかかわらず、意見もあまり活発でなく、ちょっとしんどそうです。

「このグループには、他のグループから手を差しのべてください」という天川さんの提案により、取りあえず一番お元気そうな声があったお一人に残ってもらうことにしました。

話は反れますが、真野ふれあい住宅の部屋決めの時も、足腰の弱い人が1階に入りたいという希望が集中しましたが、東須磨地域型仮設住宅の生活支援員さんからアドバイスがありました。足腰の弱い人たちばかり集まってしまったら、助け合いができないので、元気な人が隣にいなければダメよということでした。なるほどと、わたしは感心したものですが、大倉山ふれあい住宅の部屋決めはわたしたちが

携わることができなかったので、案の定、早くもしんどい場面が発生したようです。この1階グループのコレクティブ生活は先行きが案じられそうです。大倉山ふれあい住宅は階ごとに協同室が分かれていて、全体をつなぐ仕掛けがないのでよけいに気がかりです。

世話役に残ってもらって、協同室の備品の購入について話し合いました。後日の鍵わたしの日に、照明器具屋、家具屋、カーテン屋さんにきてもらえば、4グループ分の協同室の備品が一緒に注文できるし、協同室以外のものでも、個人で買いたいものが頼めて便利だということになりました。世話役の一人が店屋を紹介できるという提案があり、それが偶然にも岩屋北町ふれあい住宅でお世話になった家具屋さんだったので、この件については順調にまとまりました。こんなに積極的な人がいるとうれしくなります。これも県営コレクティブの入居者がかなり若いということがひとつの要因でしょう。しかし、参加者の中に「わたしは2万5千円の立て替えができない」と言った人もいたので、気を配る必要もあると思います。

◇「別注されたカーテン、いらん言うてはるのですが……」

先の交流会の後、天川さんと吉川さんが何度も家具屋さんなどと連絡をとったり、世話役からの電話を受けたりして段取りを整えてくれましたので、鍵わたしの日（4月10日）にカーテン屋、照明器具屋、家具店さんに来てもらって、入居者への橋渡しをすることができました。

さらに鍵わたしの日から何日かして、カーテン屋さんから電話が入りました。「1階の協同室のカーテンができあがったので届けたら、1階はカーテン代払われへんのでいらんと言われたのですが、別注さ

れたカーテンなので困っているのですが」と。そんなことまでわたしらよう面倒みんわよ。県管理課の担当者に電話をして、入居者の事情を調整してもらうことにしました。仏つくって魂入れずの県営コレクティブハウジングですが、その事後処理を一手に受けているのが、管理課の担当者です。コレクティブハウジングの事業化を決めたのは都市政策課、計画・設計・建設をすすめたのは住宅建設課、ここまではええわな、建物づくりです。尻拭いの住宅管理課の担当者は大変です。7地区（230戸余り）もの魂のない仏がどんどんつくられて、担当課の田中副課長と植田係長は夜や休日も関係なく、現地対応です。各ふれあい住宅を巡るわたしたちコレクティブ応援団のサポートの会合にもよく顔を出されます。応援団と彼らはともに魂入れ師です。

◇ここは面白い！　入居後3カ月経った初夏の夕

「こんにちは」「こんにちは、お久しぶり」「その節はお世話になりました」「長いこと来てくれはらへんので、僕らもう見捨てられたんかと思とった」「ちょっと肥えたんちがう」と、いろいろの言葉で迎えられ、大倉山ふれあい住宅の夕食会におじゃましました。

今日は3階と4階の住人を対象にした電磁調理器料理実習ということで、関西電力の料理スタッフやその他の関係者も顔をだされており、3階の協同室はいっぱいの人です。ホームパーティの準備をすすめているような華やいだにぎやかさです。

「Iさんがおいでと言うてくれはったんで来ました」といって、2階の人も1階の人も参加です。Iさんは3階の世話役で、調理の輪には加わらず見ておられたので、しばらくお話をうかがいました。

「仮設住宅にいた時ボランティアがいろいろやってくれたが、その時、僕は気ままにしてて何もしなかったので、今、その恩返しやと思ってやってる。少々独断かもしれへんけど、こんな住まい方は初めてのことやから、何でもやってみな分からへん。やってみて、問題があったら、やめたらええねん」と、Iさんは物静かに話されます。

「県営大倉山住宅は全部で500戸ちょっとあり、コレクティブハウジングが32戸ある。全体でひとつの自治会で、自治会費として世帯当たり3千円出している。あとは各階の協同室の光熱水道代がかかるけど、今のところはおおかた1カ月3千円ちょっとやから3階の分については僕が出してる。また、要るようになったら、かかった分だけ頭割りにして集めたらええと思っている。2階なんかは県の言ったとおりに月に1万2千円ずつを集めてるけど、貯めておく必要はない。かかった分だけ集めたらええと思ってる。コレクティブハウジングだけの自治会があったらもっとやりやすいと思うけど、今は各階の世話役を決めて、それぞれ好き好きにやっている。しかし、この3階の協同室は誰がきてもええし、いつも開けてある。この3階はAさんがようしてくれてる」。

「団地全体の自治会の会長はKさんで、副会長3人のうちの一人と会計がこのコレクティブから出ている。僕はこの人たちにいざこざに巻き込まれたらあかんと言っている。何か問題が起きたら、僕が出て行くからと言っている。僕は黒子でいようと思っている」と、話してくれました。

食事がそろそろ始まりそうです。献立はお好み焼き、紙鍋に電磁板をおいて水炊き、青とうがらしとチリメンジャコの炒めたのとデザートはお汁粉。神戸ビールもあります。にぎやかな声がとびかいます。わたしは他のコレクティブの食事会におじゃまして、こんなに黄色い声が響きわたるのを経験したことがありません。自治会長と副会長も顔をだされ、二人の若いLSA（生活援助員）さんも加わり、60㎡

図10　電磁調理器による調理実習

程の広さの協同室に総勢30人近くが集まって超満員です。でも協同室につづく広いバルコニーがあって開放感があります。バルコニーにテーブル出してのビアパーティも気持ち良さそうです。

食事が一段落すると、河内音頭のテープを流し、二人、三人が踊りだします。まったく下町のおばちゃんたちです。そんな中でもAさんはちょくちょくとバルコニーから出ていきます。隣の部屋の人が帰って来たかちょっと見てくるわとか、ちょっとお手拭きとってくるわとか気配りされます。ペースメーカーを入れているというおばちゃんに、電磁調理器のそばに近づかんように気をつけてねと注意してるのに、当人はもうビールでロレツがまわらない、珍ぷんかんの返事です。かなり高齢の彼女は「1階はね、女3人と男5人やけど、男はみんな60代で働きにいっているし、女は反対に高齢ばかりで何もできないので、わたしは時々この3階に寄せてもらっているの」と、言われます。

大倉山ふれあい住宅は階ごとにかなり様子がちがいます。協同室の備品の揃え方にも個性があります。20万円のコレクティブハウジング備品購入助成金だと、8人用のテーブルと椅子、和室の座机、それにカーテンを誂えたら、もうほかのものはほとんど買えません。湯飲みやコップなどは個人がもちよったり、和室の座布団は個人が提供したりしています。県から助成金が出るまで、3階はIさんが立て替えて購入しましたが、他の階はみんなが出し合って立て替えました。Iさんは言います。

「みんなで出し合って、みんなで買い物にいくのがほんまはええと思う。4階をみてたら、買い物を楽しんでた。それがほんまのコレクティブやと思う。僕とこはカ

ーテンを誂えて9万円もしたけど、4階は安い既製品のカーテンを買ってきて、長さを自分たちで調節したらしい。その分食器棚を買ってる。僕は4階の人に雑巾みたいなカーテンやがなと冷やかしてんねん」と。

帰りに2階の協同室に明かりがついていたのでのぞくと、男3人と1人の女がコーヒーを飲んでおられ、「入って、入って」と誘われました。ちょうど備品購入費の助成金が県から出たので、それぞれが立て替えていたのを返してるところとのことで、また一人帰宅した男が入ってこられました。ここの協同室はまだほとんど使われたことがないほど殺風景です。わたしはまた腰を落ち着けてしまって、おしゃべりの輪に加わりました。一人が入院中で精神的な病らしくて、みんなに迷惑をかけたらしいです。「コレクティブに入るにふさわしくない人やから、県も入居前に審査が必要やぜ」と言う人がいます。でも別の人は「お互いやから。気の毒やから、僕は何回かご飯炊いてあげたよ」と言います。

帰り際に、「1階と2階の食事会（電磁調理器料理実習）は7月10日やから、僕らのとこにも絶対に来てや」と言われました。

大倉山ふれあい住宅は面白くなりそう。階ごとにバラエティがあり、それがちょっとずつ刺激をし合います。わたしは長居しすぎて、しゃべりすぎて、疲れ果てて帰路に着きながら、まだまだ楽観しすぎたらあかんと、また自分に言い聞かせていました。

◇学生たちも気楽に泊まっていく協同室

99年9月に開催した第7回ふれあい住宅居住者交流会は、大倉山ふれあい住宅におじゃましました。この交流会については5章で述べていますが、ほぼ2カ月ごとに開催し、順繰りに各ふれあい住宅におじゃまして会場としています。

この日、大倉山ふれあい住宅からは次のような報告がありました。

団地全体の自治会とふれあい住宅の自治会とを別々にしたかったが、自治会は全体でひとつにしておいて、運営（会計など）を棟ごとにすることになった。全体の自治会費としてふれあい住宅は世帯あたり3千円を納めていたが、9月から2千円になった。団地全体の共益費の1戸あたりの実費がどれくらいになるのか調べてみるつもりだが、大体1300円程だと思う。残りの700円をふれあい住宅の運営にまわしたい。例えば、会合の接待費とか交通費に。／階ごとの8人グループのコレクティブなので階ごとに楽しいようにすれば自然に何かしたくなるもので、無理に何かをすることはない。協同室は自分たちが使って楽しんだら電気代などは安いものだ。／ふれあい住宅の居住者でボランティアグループをつくり、区の社会福祉協議会に登録してるので、いろんな情報が送られてくる。／わたしはこの前風邪をひいて熱をだした時、みんなに助けてもらった。遠い親戚より近くの仲良しというのを実感しました。

大団地の中のふれあい住宅は、団地全体の自治会に組み込まれて属するのか、ふれあい住宅だけの自治会を結成するのかは意見の別れるところです。同じ問題が脇の浜ふれあい住宅や久二塚西ふれあい住宅などでもあります。全体の自治会に組み込まれていると、団地全体にかかる共益費の分担方法などに

図11　3階グループの誕生会、食事の後はカラオケのマイクが廻る

ついて、ふれあい住宅の居住者は納得のいかない点が多々あります。たとえば、集会所ひとつをとってみても、ふれあい住宅には自分たちの協同室があるので団地の集会所を使用する機会は少ない（ほとんどない）のに、集会所の維持管理費を分担するのは不満です。余り深く考えないで、ふれあい住宅の協同居住の運営にかかる費用を余分に徴収すればいいではないかという意見もありますが、それでは共益費を二重払いしているようだという意見もでてきます。

大倉山ふれあい住宅でのふれあい住宅居住者交流会には10名近くの学生サポーターが参加していたので、交流会の後、3階の居住者はねぎらいの夕食を用意をしてくれていました。協同室にお弁当がたくさん届いていました。このお弁当は入居前の交流会で応援団が頼んだ水道筋商店街のお総菜屋さんのものだそうです。3階の住人のお一人が、お総菜屋の店主の小学校の先生だったことが分かり、以来、大倉山ふれあい住宅では食事会や誕生会やとこのあるごとにお弁当の出前を頼んでいるそうです（2000年のお正月のおせち料理も頼んだんだそうです）。同じ地域に長く住んでいると思わぬうれしい再会があるものです。3階グループは気さくな方が多く、協同室が自分たちの居間のように使われています。部屋の様子もゴチャゴチャしていてアットホームな雰囲気で、他の階からも自由な行き来があります。

4階グループは3階ほどにぎやかな集いはありませんが、ガーデニング愛好者がそろっていて、協同室前の広いテラスは見事なガーデニングで、気持ちのよい屋外協同スペースになっています。協同室も

絵や鉢植えが飾られていて、応接間のように整えられています。それぞれの協同室は個性があり、ここには小規模コレクティブハウジングのモデルがあります。

学生たちを交えての食事は住人たちにとっても楽しいひとときです。ここ3階の協同室には時々学生が泊めてもらっています。一泊どまりで来て誕生会に参加させてもらったり、研究調査に来た学生が宿代わりに泊めてもらったりしています。この日の学生たちは、いつも応援団を手伝ってくれている京都府立大学の古野素子さんたちをはじめ、関東から調査にきている学生もいて、お互いにコレクティブハウジングを研究対象にしていることを知り、さっそくネットワークをつくり連絡しあうことになりました。そして、コレクティブハウジング事業推進応援団を応援する学生応援団をつくろうということになったようです。若い力は頼もしいです。

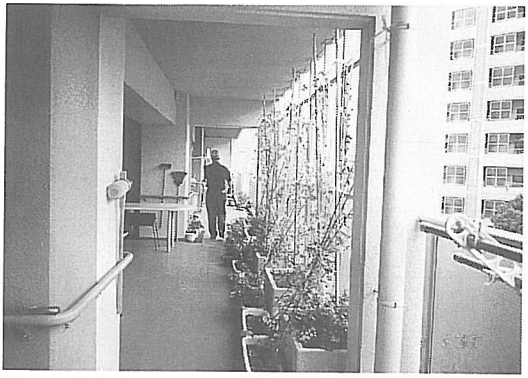


図12　続きバルコニー、一旦家に帰ってくるとここから協同室に出入りする。居住者は「裏から入る」と呼んでいる

図13　4階グループの協同室前のテラスはみごとなガーデニング

（4）神戸東部新都心のコレクティブ／脇の浜ふれあい住宅

神戸の東部新都心計画は震災後の神戸市復興計画のシンボルプロジェクトで、臨海部の大規模工場跡地の総合整備です。被害を受けた市街地の住宅をはじめ産業等の各種の都市機能の受け皿となる市街地整備の先導的役割をもっています。「ＨＡＴ神戸」と名づけられたここには、約1万戸の住宅建設が計画されていますが、その居住地区の西端に県営コレクティブハウジング・脇の浜ふれあい住宅が建設されました。

◇入居までに先人に学ぶ

脇の浜ふれあい住宅の入居は10地区のふれあい住宅のうちの最後で、99年4月から始まりました。44戸の住宅は単身世帯用（1ＤＫ）が32戸、二人世帯用（2ＤＫ）が12戸で、すべてがシルバーハウジングプロジェクトの制度がかかっていますので、60歳以上の高齢者向け住宅です。97年11月の第1回の募集の時にはわずかな応募しかなく、つづいて補充募集が2度あって、99年2月に入居書類審査と入居説明会があり、20世帯の入居予定者の部屋決めがおこなわれました。その時にわたしたちコレクティブ応援団は他のふれあい住宅と同様、説明会会場に出かけていって入居前後の居住サポートのお節介を申し出ました。しかし、ここ脇の浜ふれあい住宅の入居予定者の何人かとはすでに顔なじみになっていました。

というのは、98年7月から始めた2カ月ごとの「ふれあい住宅居住者交流会」の2回目から、脇の浜ふれあい住宅に当選して入居を待っている方々の数名がいつも出てこられていましたので。

先に入居したふれあい住宅の様子を知って、自分たちの入居後の協同居住の準備をしようという前向きの姿勢は、入居前後からその効力を発揮しました。第4回のふれあい住宅交流会（99年2月）に出席された時、「ふれあい住宅の住まい方について80％ぐらいイメージできたと思う。自治会役員の行動が大事だという気がする」と、発言されています。

入居前の3月にはコレクティブ応援団は入居前交流会として住宅見学会をおこないました。引っ越し前に各自の部屋を見て、さらに協同室に必要となるカーテン、テーブルと椅子、その他の備品購入などの相談をするためです。見学の後は近くにある南本町ふれあい住宅におじゃまして一緒に昼食をとりながら交流し、協同室の備品購入や光熱水費の節約のためのアイデアなどについて、先人から具体的な話をうかがいました。近くに頼もしい先人がいることは心強く、わたしたち応援団の気もかなり休まります。

図14　入居前の住宅見学会に向う入居者たち

入居後3カ月程たった6月末にコレクティブ応援団は脇の浜ふれあい住宅で暮らしの懇談会と昼食会を開きました。まだ引っ越ししてきていない人も含めて26世帯31人の参加と応援団サポーターとで、1階の協同室は満員になりました。わたしは初めての人のために、コレクティブハウジングの住まい方や他のふれあい住宅の様子などの話をしました。ここではすでに自治会が発足してお

図15　吹き抜けの協同室で説明を受ける

り、各階の世話役も含めた自治会役員名簿が準備されていました。入居したばかりなので、とりあえず月に2回、夕食会を兼ねて入居者全員の意見交流をしているということです。さすがです。先人に学んだ成果が発揮されています。わたしたち応援団はうれしい気分で帰路につくことができました。

入居当時20世帯23人の居住者はその後さみだれ的に入居があって、現在（99年12月）では、31世帯36人で、まだ13世帯（うち単身用は7戸）が未入居です。現在の居住者の男女比はほぼ半々で、平均年齢は男67歳、女69歳で、60代が22人と多くて、全般に若い人たちです。まだ勤めをもっている人も少なくありません。なお、居住者のうち仮設住宅から移ってきた人は半分ぐらいで、震災後は民間マンションなどに一時入居されていた人や、福島、東京、和歌山、大阪、広島などの県外に避難されていた人もいます。

建物は6階建てで、2階ごとのグループでひとつのコレクティブ単位を想定して設計されています。従って、3カ所の奇数階には2層吹き抜けの大きな協同室と共同洗濯コーナー、便所、倉庫があり、偶数階にはサブ協同スペース（共同洗濯コーナー、たまり場など）があります。エレベーターの昇降スペース兼上下足履き替えスペースと上下足箱は各階にあります。このようなぜいたくな協同空間の取り方は現実の協同居住に適応せず、入居者にとってはやっかいもんとなっており、ここではとくに設計についての不満が多いです。なお、現実には入居者は1階から6階までの全体をひとつのコレクティブ単位として協同居住をすすめています。

◇コレクティブ棟だけの独立した自治会になりたい

脇の浜ふれあい住宅の入居後はじめての大きな協同活動は、4棟の県営住宅からなる自治会から独立して、ふれあい住宅だけの自治会になる活動から始まりました。ここHAT神戸の脇の浜地区には12棟（1656戸）の災害復興住宅のうち県営住宅は4棟（253戸）が建設されています。入居直後に県の指導によって4棟がひとつの自治会を結成しました。4棟のうちコレクティブハウジングは1棟だけで、あとは普通の共同住宅です。各棟から代表が出て自治会役員が構成されていますが、自治会費の使途などをめぐって当初からいざこざが起きました。ふれあい住宅は協同居住の運営や協同スペースの維持管理のために、他の住宅にはない独自の共益費の徴収や居住者活動があります。全体の自治会の中に組み込まれてしまうと、自治会費の二重払いをしていると感じている人もでてきています。ふれあい住宅という独自性を大事にした自治会運営をするためには独立した自治会になって、4棟の県営住宅全体の自治会は連合自治会という位置づけにして、連合自治会として必要な経費は収めたいという声がでてきました。

このようなことについては大倉山ふれあい住宅でも同様で、先のふれあい住宅居住者交流会で大倉山ふれあい住宅の入居者から話を聞いていました。そこで脇の浜ふれあい住宅では居住者にアンケートをとり、7割強の賛同を得て独立した自治会になりました。ここまできた陰には居住者の何人かの誠実で熱心な努力がありました。4棟の県営住宅はそれぞれが独立した自治会になりました。4棟で250戸余りがひとつの自治会単位というのは大きすぎます。

余談になりますが、被災地では一挙に大量に建設された復興公営住宅の大規模自治会では、自治会費

の徴収額も大きくなり、その使途をめぐっていざこざが多発しています。さらに自治会費未払い世帯に対する対応も自治会にまかされており、自治会役員の苦悩は大きいです。住民による住みよい環境づくりや防犯対策という自治会本来の活動に至る前に、前述のような苦悩によってエネルギーを消耗してしまい疲れてしまっています。自治会運営のための研修やリーダーの育成、他の自治会とのネットワークなどサポート体制の必要性が指摘されています。

◇まぁまぁの生活よ、でも設計上の問題が多いわ！

前述の自治会のことも含めて、いくつか気になっていることがあって、年内にちゃんと話を聞いておかなければと思っていましたので、99年の年の瀬も押し迫ったある日、脇の浜ふれあい住宅のAさんを訪ねました。住宅に入る前に庭が見たかったので、裏に回ろうとしたら、わたしの前を白衣を着たお医者さんと看護婦さんがふれあい住宅に入って行きます。覗くと、1階の協同室に居住者の一人が待っていて診察を受けはじめられました。わたしは庭に回りました。1階の協同室の前に広がる庭はいつも手入れがいきとどいていてとてもみごとです。小さな芝生スペースには今日は保護用土が敷かれています。庭におかれたテーブルでタバコをふかしている人がいます。ここには近くの人たちもひと休みにきたり、幼な子づれの親子がおやつタイムをしている時もあります。協同室の前ということで遠慮せず憩うことができるのかもしれません。

庭には畳1帖分ぐらいの大きさの立体花壇が5本置かれています。これは車椅子の人でも土いじりが楽しめるようにというもので、近年あちこちにお目見えするようになりました。70センチほどの高さの

図16　協同室前の立体花壇

花壇で、幼児の目には高すぎて花床が見えませんが、高齢者にはしゃがんだり腰を曲げないでも土いじりができるので歓迎されているようです。この花壇はいつも花が絶えることがありません。今は春に向けての苗床がしつらえられており、潮風を避けるためにうすい不織布で温室のように囲ってあります。脇の浜ふれあい住宅にはガーデニングを愛でる人が何人かおられて、楽しみながらすすめられており、住宅内の協同スペースにもいくつもの植木鉢が置かれています。花の苗を買うと高いので、種からまいて育てており、種、用土、肥料などは共益費で購入しているということです。

Aさんを訪ねて1階の協同室で話をしていると、2階からわたしたちをみつけたお一人がお茶菓子をもってきてくださました。「もらいもんやけど、よかったら召し上がって」と。

陽がよくあたる協同室の窓辺にテーブルを並べてお布団が干されています。しばらくしてBさんが現れ、「うちの部屋は北端で陽があたらへんのよ。時々ここに干さしてもらってるの」と言って、取り込んでいかれました。協同室が自分の部屋の続きのように使われているようです。

Aさんは言う。「今はみんな、まぁまぁの生活よ。昼間は働きに出ている人もいて、それぞれが普通の生活がしたいというのが本音みたい。悪い人はいないわ。一人共益費を払わない人がいて困ってる以外は…。

共益費は入居当初県の提案どおり1万3千円だったけど、今は9千円にしているけど、もう少し下げられそうよ。途中入居の人には公平性を保つために入居後6カ月の間は1万3千円払ってもらうことにしているんよ。コレクティブ棟だけの独立した自治会になってすっきりしたわ。

今は毎月第4日曜日の朝からみんなで協同スペースの掃除をして、夕方6時から話し合いを兼ねた夕食会をしているの。お弁当を取って、汁物はここで作ってそえているの。この夕食会をその月のお誕生会も兼ねたものにして、順ぐりにお祝いしていくのもいいなーと思っているんよ。食事会の費用は共益費から出している。共益費は世帯単位なので二人世帯は食事会費用が2倍かかるという見方もあるけど、二人世帯は二人して協同生活に協力してくれているので同じでいいと思ってるんよ」と。お弁当は例の水道筋商店街のお総菜屋さんのものだそうです。

ふれあい住宅のなかには食事会などに二人世帯の二人がそろって参加する時は一人分の料金を自己負担してもらうようにしているところもあります。一人分の料金の全額負担でなくて、半額負担にすれば一人世帯も二人世帯も双方が納得いくのではないかという意見もあります。これについては意見の分かれるところです。いろんな方法がとられているということを知ったうえで、それぞれのふれあい住宅でみんなが納得いくような方法をとればいいと思います。

Aさんは続いて声を大にして話します。

「ここの住宅のつくりは分からんことばかりよ。しっかりした建物で感謝はしているけど、使い勝手が悪いわ。2階吹き抜けの協同室は冷暖房費がかかりすぎるし、照明器具を取りかえるにしても電球の位置が高すぎてできない。それに電球は特殊なものらしくて、スイッチをつけて完全に明るくなるまで数分かかるのよ。いっぺん消してまたすぐつけようとすると、また数分かかってその間真っ暗やみよ。太陽熱利用の省エネシステムだと説明に書いてあったようだけどその使い方が分からへん。ホラ、2階につづくこの階段の幅の広さ。両手を拡げても両側に手が届かへんということは、よろけそうになったとき危ないでしょう。それに三つも大きな協同室があるのに畳の部屋がないでしょう。1階には事務室な

図17　入居直後のコレクティブ応援団主催の食事会、吹き抜けの協同室は全員が集まると狭すぎる

図18　奇数階の協同室から偶数階へ続く階段（2層のみを連絡する大きな階段）

んかもあるでしょう。誰が使うの。協同室があれば十分やないの。共同洗濯コーナーや倉庫、共同トイレなど無駄なスペースが多いのに、1階から6階までつづく室内階段はないでしょう（階段は2層ごとのコレクティブグループをひとつにまとめるために設置されているので、2層ごとの連絡だけになっています）。いちいちエレベーターを使っていたら電気代もかさむし、万一エレベーターが停まったら大変やわね。地震の後の建物やのに何考えてはったんやろう。こんな無駄なスペース作るんやったら、住宅を少しでも広くしてほしいわ。全体でひとつの協同室を1階に作って、2階から上は住宅というこじんまりした設計が、共益費の節約にもなって理想的よ。ほんまに言うたらきりがないほどムチャクチャよ」と。

ふれあい住宅の設計上のまずさは他の住宅でもしょっちゅう聞かされます。この設計上の課題は後節で整理していますが、日本の生活習慣に適合したコレクティブハウジングの住まい方をしっかり検討しないままに設計され、さらに日常生活を実感できない男の手によって設計された結果です。何よりも協同スペースの維持費（ランニングコスト）がかからないような作りにすることが第一です。

脇の浜ふれあい住宅ではルールをもう

けて、奇数階にある倉庫に、個人の所有物を置けるようにしています。三つある協同室のひとつに畳を敷いて和室にしたいという声も出ています。和室があれば身内が来たときの宿泊も可能です。ソーラーシステムやボタンを押すと天井から下がって来て電球が交換ができるようになっている照明器具の操作方法などを説明してもらうような総点検会がほしいという注文がでました。

住みこなしのためのサポートが必要です。

（5）その他のさまざまなふれあい住宅

震災後に被災地に事業化された公営コレクティブハウジングは10地区（341戸）あります。前述の三つの県営ふれあい住宅と二つの神戸市営ふれあい住宅に加えて、さらに四つの県営ふれあい住宅とひとつの尼崎市営コレクティブハウジングがあります。

98年2月に入居が始まった県営南本町ふれあい住宅と岩屋北町ふれあい住宅は、いずれも日常の利便性がいい神戸の町なかにあって、戸数もそれぞれ27戸と22戸で、コレクティブハウジングとしてまとまりやすい大きさです。コレクティブ応援団は入居前の協同室の備品購入や入居後の食事会の開催などをとおして、協同居住を育むためのサポートをしてきました。ともに初代の自治会長はじめ何人かの方々は新しい住まい方を育てていこうと意欲的に世話役をつとめられました。その結果、南本町ふれあい住宅は入居後1年間は順調な協同居住が展開され、県営コレクティブハウジングのモデルだと、居住者たち

も県も胸をはってきました。わたしも何回もおじゃまして、その度ごとのうれしい状況を記し、いろんな誌上で発信してきました。2年目になって役員改正があり、今までの明るさがなくなり、ちょっとつらい状況になっています。

岩屋北町ふれあい住宅は入居後は順調にすすんでいたのに、人間関係がこじれてて初代自治会長が5カ月ぐらいで交代し、その後は小康状態でしたが、2年目の役員改正でつらい状況になってしまいました。

図19　南本町ふれあい住宅の入居説明会、27戸のうち11世帯の入居で始まった

ともに自治会役員の中に仕切る人が出てきたためです。その人の個人的な名誉欲や利害が優先されるようになると、住宅全体の雰囲気が暗いものになり、仲良しになった一部の人たちは自分たちの交流を大切にしていますが、全体のまとまりはなくなり、自室に閉じこもる人が出てきます。

ついで98年4月に入居が始まった宝塚市と尼崎市に建設された二つの県営コレクティブハウジングは、ともに高齢者世帯向け住宅（シルバーハウジングプロジェクト）と一般世帯向け住宅が混ざっており、多世代共住型のふれあい住宅です。

宝塚市にある福井ふれあい住宅は30戸のうち7戸が一般世帯向けの3DKです。入居当初、自治会役員をめぐってごく一部の困った人が派閥的なグループをつくろうとして、入居後半年ぐらいまでは、少ししんどい時期がありましたが、その後は自治会役員に若い世代も加わり、知的で堅実な自治会運営が行われるようになりました。地元のボランティアグループの支援もあり、協同室で

は毎週火曜日のお昼に地域にも開かれたふれあい喫茶が開店されています。宝塚歌劇がある住宅都市という土地柄もあるのでしょうか、または若い世代が共に住んでいるということもあるのでしょうか、静かで明るい雰囲気が感じられます。

尼崎市にある金楽寺ふれあい住宅は71戸、約120人が住む大所帯です。一般世帯向け住戸が17戸あり、幼な子のいる若い世帯も入居しています。住宅のつくりは4階建ての建物で各階グループに別れたコレクティブ単位を想定した設計になっています。しかし、実際は全体で自治会が結成され、協同居住のための運営も全体をひとつとして展開しようとしています。ここは入居当初から現在に至るまで、自治会役員をめぐって居住者間に派閥ができ、人間関係がぎくしゃくしています。自治会運営が政党活動の具に利用されているようで、自治会費の使途についても不透明な時期があったりして、つらい状況にあります。120人におよぶ大所帯がひとつにまとまるのは難しいです。わたしは、仲良したちが好き好きに協同室を自由に使ってふれあう生活をするようにとアドバイスしているのですが、いったんこじれた人間関係、自治会運営に対する不信はなかなか修復できそうもありません。しかし、シルバーハウジングプロジェクトの住宅が32戸あって、生活援助員さんが常駐しており、彼女がふれあい喫茶を開いたりして、意欲的にふれあいの輪を育もうと努力されており、居住者たちにはとても歓迎されています。

もうひとつ、尼崎市営コレクティブハウジング久々知住宅があります。99年3月入居の22世帯で、全戸がシルバーハウジンプロジェクトの住宅で、生活援助員さんが常駐しています。この住宅の募集は尼崎市にあった仮設住宅が解消した後におこなわれたので、入居者に仮設住宅の体験者がいません。仮設住宅での助け合いやふれあい生活の貴重さを身をもって感じた体験がなく、行政の入居時の説明も十分でなかったようで、なかなか協同居住の意味が理解できないようです。監獄に住んでいるみたいという

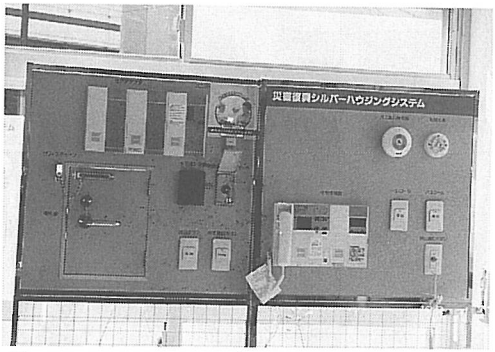


図20　シルバーハウジングの緊急通報等の機器〔注12〕

声も聞かれます。仮設住宅での生活体験がある人がいく人かでもいると、コレクティブの出足が弾むと思うのですが…。居住者は自治会運営やコレクティブハウジングでの住まい方が分からず、若い生活援助員さんが悪戦苦闘しており、彼女からわたしにSOSが続いていました。入居後4カ月程たったある日、わたしは南本町ふれあい住宅の前会長さんに同行をお願いして、久々知住宅にコレクティブハウジングの住まい方についてなどの話をしにでかけました。

被災地に誕生した9番目のコレクティブハウジングなので、わたしは居住者の多少のいざこざにはもう悩まない肝っ玉母さんになりました。昔の子だくさん時代の母さんのような気分です。20代から次々と子供が生まれ、下の子が生まれるころには母は年をとってきて、体がついていかないので、上の子に接したように細やかな育児ができません。しかし、母が手抜きをしても上の子たちの何人かは下の子たちの面倒を見ることができるように育ってきました。

ということで、長子役の南本町ふれあい住宅の前会長に、「先人に学ぶ」ということで、南本町ふれあい住宅の体験談を話してもらうために同行をお願いしたのです。

10地区のふれあい住宅の協同居住の展開にふれてきて、「今日の日和は明日まで続くとはかぎらない、しかし、今日の冷たい肌さす風はそのうちに止んで、暖風が吹いてくるようになる」ということを実感しています。

県や市は、公営住宅の共用部分にかかる費用の管理を入居者の自主管理に委ねているので、入居開始と同時に自治会の結成を指導しています。しかし、わたしは居住者たちがよく知りあうまでしばらくの間は、自治会は暫定的なものにしておくのも一策ではないかと思います。とくに、コレクティブハウジングという新しい住ま

い方を育くみ運営していくには、当初から固定した自治会運営ではなくて、世話役会のような形で、3カ月、6カ月と様子をみていくのが望ましいのではないかと実感しています。

また、戸数の多い大規模コレクティブハウジングは初期からひとつにまとまって何かをやろうとするのは困難です。何十人ものひとが一同に会しての食事会となると、それはもう協同居住ではなくて、従来の公民館などでの食事会のような雰囲気のものになってしまいます。食事クラブ、手芸クラブ、園芸クラブ、囲碁クラブ、ウォーキングクラブなど、好き好きに同好のクラブを立ち上げて、自由な活動をする中でゆっくり全体のふれあいの輪が拡がっていくのが望ましいです。

さらに、大規模コレクティブハウジングでは集められた共益費の額も多くなり、自治会運営には予期せぬ（しかし、よく聞く）金銭上のトラブルが発生しやすいです。

〔注12〕シルバーハウジングの緊急通報等の機器ははこんなにたくさんある。入居説明会で説明を受けても一度では理解できない。なお、わたしたち応援団は、ひとつひとつの警報音を実際に鳴らしてもらって、その止め方も示してもらうように要求しました。

（6）設計上の課題――日本的な協同居住とのミスマッチ

あれよあれよという間に10地区、341戸も建設されてしまったふれあい住宅（コレクティブハウジング）

には、建物の設計上の課題もたくさんあります。

空間計画は居住者たちの協同居住の始動や活性化を左右する大きな要素のひとつであり、そのためには協同居住の運営や後々までも続く維持管理（とくに維持管理費＝ラニングコスト）のことを見定めた計画が必要です。しかし、建設されたふれあい住宅では現実の協同居住の生活には適合しないようなミスマッチが多く指摘されています。それは震災復興のための住宅建設ということで、平常時では考えられない程のスピードで事業を進めざるをえなかったという厳しい条件下にあったということもありますが、計画段階で生活文化や生活習慣をふまえた現実味のある協同居住のイメージを的確に設定できないで、北欧のコレクティブハウジングの事例から部分をつまみ食い的に導入したり、従来の老人施設のイメージから脱却できないで設計してしまったからのようです。しかも、生活実感が希薄な男の手によって設計されたことにも起因していると思います。

県が言うようにモデルとしてあれこれいろんなパターンを設計してみましたというのなら、住みはじめてからの生活実態を検証し、具合の悪いところが改善されるような対応システムが必要でしょう。

神戸市営の二つのふれあい住宅の場合は計画段階で疑似入居者や専門家が参加して建物の空間計画に修正を加えてきましたので、県営ふれあい住宅ほど大きなミスマッチは今のところ指摘されていません。それでも住んでみなければ分からないという問題は少なくありません。

ふれあい住宅を訪れるたびに居住者から訴えられる設計上の課題や、プランナーとしてのわたしの目でみた課題は数多くありますが、主なものを整理しました。

なお、神戸市営久二塚西ふれあい住宅を除いた9地区のふれあい住宅はすべて太陽熱を利用したソーラーシステムが設置されており、計画段階では冷暖房費の節約を考えています。しかし、以下に指摘す

るようなことが抜けているのです。

◇コレクティブ単位の大きさと建物全体の空間構成

コレクティブハウジングとしてまとまりやすい戸数規模は25戸前後が適正のようです。居住者数は30～40人程度になると思われます。この大きさだと全員が一同に会したとしても、みんなの顔が見渡せるし、日々の生活の中でお互いの性格や健康状態も分かり合える大きさです。全体でまとまって何かをしようとする時、元気な声も上がってきますし、反対に不参加でも目立たない隠れができる大きさのようです。また、共益費も少しまとまった額になるので、数のメリットを生かした協同居住の運営がしやすくなります。全く知らんぷりして無責任を決め込む人も存在しにくく、住民自治も育ちやすい規模のように思われます。

この大きさが独立したひとつの建物にあることが理想的です。建物周辺も含めた責任をもつ維持管理の範囲が明確なら、それにかかる費用も全員が負担することに同意がえられやすいです。

しかし、脇の浜ふれあい住宅や金楽寺ふれあい住宅のように戸数規模が大きいので、複数のコレクティブ単位を想定して、単位ごとに区分されるような設計がなされて、それがひとつの建物の中に入っているという空間構成は現実的ではありません。

脇の浜ふれあい住宅は44戸で、うち高齢者家族世帯住戸が12戸なので、最大居住者数は56人になります。建物の2層ごとがひとつのグループで、6階建の住棟に三つの独立したコレクティブ単位を想定した設計になっていますが、現実には全体でひとつのコレクティブとして運営しています。従って、6階

建ての奇数階ごとにある広い協同スペースが無駄で、維持管理面の大きな負担になっています。金楽寺ふれあい住宅は階ごとがひとつのグループで、四つの独立したコレクティブ単位を想定した設計ですが、ここも全体でひとつのコレクティブとして運営しています。しかし、ここは71戸のうち一般世帯向けの住戸が17戸あって居住者は総勢120人余りという大所帯が、ひとつのコレクティブとして運営していますので、大きすぎてまとまりにくいです。自治会は強引にひとつにまとめようとするので、居住者の発意からでなく押しつけられた形の協同居住になりがちです。無用の協同スペースも多くあります。

ではなぜ、脇の浜ふれあい住宅や金楽寺ふれあい住宅が計画段階で想定したような複数コレクティブグループごとに、それぞれ独立した協同居住が展開されないのかというと、これについてはいくつもの原因があります。まずひとつは、住宅供給主体である県が建物のつくりに応じたコレクティブ単位のまとまりとその住まい方について適切な説明やサポートをしていないということがあげられます。建物全戸数の募集をしただけで、入居時に器に沿った（設計に沿った）住まい方の具体的な説明はなく、建物だけつくってみましたという状況です。もうひとつの原因は、一時期に全戸の入居が完了したのではなく、第1陣の入居からしばらくの間は空室が多くて、想定されたグループごとでは居住者数に多少があり、2、3戸しか入居していないグループもできるので、全体でひとつの協同居住がスタートしたということです。さらに、想定されたグループの大きさ（戸数）は一律ではありません。1階グループは建物全体のエントランスや事務室などがあるので戸数が少なくなっていますので、集められる共益費の総額は他のグループよりも少額になります。そのうえ1階の居住者には不公平感が拭えません。例えば、1階グループは1階だけで完結したコレクティブハウジングと想定されているのなら、共益費でエレベーターの経費を分担することに抵抗感があります。一方、エントランスの掃除や照明の電気代、訪問者

の応対など1階に負担が集中しがちです。

ひとつの建物の中に複数のコレクティブ単位を想定するためには、グループごとの維持管理の範囲やそれにかかるランニングコストの公平性を明確にしなければなりません。しかしこれはやっかいなことです。問題が多発しやすいパターンのようです。大倉山ふれあい住宅のように各階が完全に完結した建物のつくりになっていて、階ごとでひとつのコレクティブ単位になっているような場合はこのような問題は生じていません。

◇協同スペースに無駄が多く、ランニングコストが高くつく

ふれあい住宅の協同スペースは各住戸の面積の10～15％程を出し合って計画されています。従って、各住戸の面積は一般の災害公営住宅の同型住戸のものより少し狭くなっています。

ふれあい住宅の居住者たちからは無用の協同スペースが多くあり、そのための維持経費が高くつくということが多々指摘されています。その筆頭が県営ふれあい住宅の各階に設けられている共同洗濯コーナーです。各住戸内にも洗濯パン（洗濯機置き場）があります。この共同洗濯コーナーは当初から使われていません。現在の日本の生活習慣に洗濯機の共同使用は馴染まないようです。特に高齢者は一度に洗う洗濯物も少なく、汚した下着類を人目のつく場で洗うのをいやがる人も少なくありません。また、共同洗濯コーナーから洗いおわったものを自室のベランダまで干すために運ぶのも大変だという声も聞かれます。さらに、洗濯機は誰が購入するのか、水道代と電気代の負担方法はどうすればいいのか（世帯当たりか人数当たりか、またはコインランドリーのようなものにするのか）など、運営にかかる問題

もクリアした結果の計画が必要です。欧米のコレクティブハウジングには必ず共同洗濯コーナーがあるので、それを真似たというのでは、設計者としてお粗末です。

現在は福井ふれあい住宅では1階の共同洗濯コーナーに居住者から提供された中古の洗濯機が置かれていて、協同スペースの清掃に使った雑巾などを洗っているとのことです。他のふれあい住宅では全く使われていません。

しかも、共同洗濯コーナーの水栓は家庭用の20ミリ口径よりも大きい25ミリのものが設けられているところがあり、これには大口水栓として水道代に基本料金がかかります。水は使っていないのに基本料金は払わなければならないという理不尽な状況が生じています。

次に無用のスペースとして指摘されるのがサブ協同スペースです。例えば、5階建て、27戸の南本町ふれあい住宅には1階にキッチンコーナーと和室がついた全員が集える広い食堂（メイン協同スペース）があります。2階から5階には各々5～6戸の住戸がありますが、各階のエレベーターの横にサブ協同スペース（1住戸分よりやや小さめの広さ）があって、そこには湯沸かしコーナーと共同洗濯コ

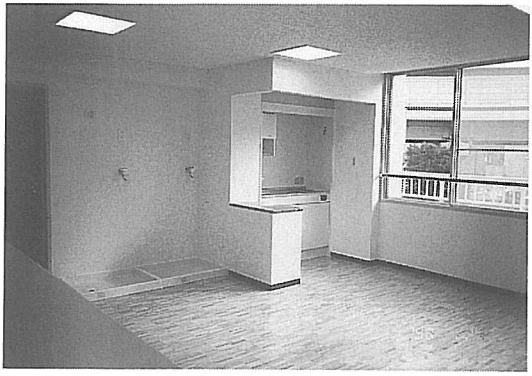


図21　使われることのない共同洗濯コーナーとサブ協同スペース（南本町ふれあい住宅、2～5階の各階にある）

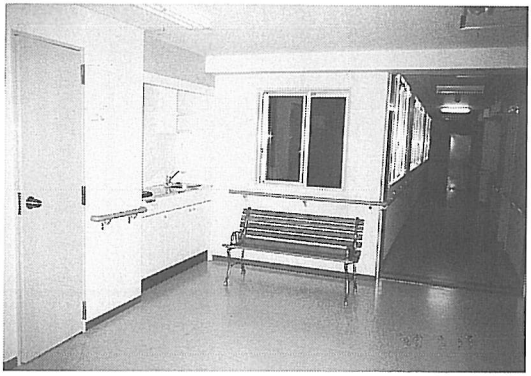


図22　岩屋北町ふれあい住宅のサブ協同スペース（この右手前に共同洗濯コーナーがある）

ーナーが設けられています。他のいくつかのふれあい住宅にも同様のサブ協同スペースがあります。

これについては無用だと言う声と、あってもいいと言う声がありますが、現実にはこのスペースはほとんど使われておらず、それよりも自分たちの部屋を1㎡でも広くしてほしいという声が大きいです。なお、このサブスペースがあるために、夜間は暗闇のスペースにしておくのは気味が悪いので、照明が必要となり、電気代がかかってきます。27戸程度の規模のコレクティブハウジングに分散してふれあいスペースを設ける効用があるのでしょうか。

また、1階には事務室がありますが、これも今のところは無用の長物のようです。無用のスペースが特に多くて負担になっているのは、先に紹介した脇の浜ふれあい住宅です。設計者はあれば望ましいだろうという感覚で無責任なスペースをつくってしまいましたが、そのためのランニングコストの上乗せが居住者の負担になってきます。

◇上下階の行き来はエレベーターだけで、建物内に階段がない

片山ふれあい住宅と大倉山ふれあい住宅を除く県営ふれあい住宅は3〜6階建のコレクティブハウジングだけの単独の建物ですが、建物内に階段が設置されていません。上下階の行き来はエレベーターだけです。これは居住者には大変不評です。すぐ上の階に行くにもエレベーターを待たねばならないので、気軽な往来がおっくうになります。さらに、日常生活の中で階段の上り下りによって足腰が鍛えられるという効用は大きいです。一方、エレベーターは電気代がかかります。福井ふれあい住宅のエレベーターはいつも必ず1階に戻って待機するシステムになっているので、いつでも1階から上がってくるのを

待たねばならないそうです。これは普通の途中階待機のエレベーターよりも電力を消費するシステムではないのでしょうか。

日常の上下階の連絡はエレベーターだけというのでは、何よりも事故があってエレベーターが止まった時が問題です。普段使いなれていない外階段の利用は危険です。夜間や悪天候の時は、お年寄りはこわくて使えません。また、外階段の出入口は室内側からロックされているので、外から入る時はカギが必要ですし、建物を出た階段のところで下足に履き替える必要があり、やっかいなつくりの住宅もあります。このような建物が震災後に計画されたとは驚きです。災害時の安全な避難をという視点がなく、震災の教訓が生かされていないようです。

福井ふれあい住宅の案内書には、敷地に余裕がなくて十分な屋外空間がとれないので、屋上にふれあいテラスをつくり、そこで日光浴、体操、草花の栽培を通じて居住者のコミュニケーションを図ることを期待すると記されています。しかし、屋上までエレベーターは通じておらず、かつ屋外階段は危なくて高齢者が使いにくいということで、実際には屋外テラスはほとんど使われていません。一度、屋上テラスでみんなで焼き肉パーティをしようという提案があったそうですが、材料を運ぶのが大変だし、高齢者にとって外階段は危険だということでとりやめたそうです。屋上テラスは広くて、木製ベンチや花壇、水道設備も設置されており、遠くの山並みが眺望できすてきな空間です。建物内から続く階段やエレベーターが屋上まで連絡されていれば、設計者が意図したような使われ方がされると思うのですが残念なことです。

一方、6人の単身高齢者だけの片山ふれあい住宅は2階建のログハウスのようなすてきな建物です。室内に広いゆったりした階段とエレベーターがあります。エレベーターはホームエレベーターのような

こじんまりしたものでなくて、共同住宅仕様のものが設置されています。現在は入居者がみんな元気なのでエレベーターは電気代節約のために使っていません。階段は2m幅もありそうなゆったりした空間なので、将来エレベーターが必要になった場合は、階段に設置するような昇降機をとりつけるか、またはホームエレベーターのような小さなもので十分だったのではないかと思うのは、わたしだけでしょうか。

◇ランニングコストの節約を考えていない設計

ふれあい住宅の居住者にとって第一の関心事は共益費がいくらになるのかということです。協同居住を育むためにはみんなが共益費を足並みそろえて気持ちよく出せることが大切です。しかし、一部のふれあい住宅では共益費の未納者があり、頭の痛い問題を抱えています。わたしは経済条件が同程度の人たちが集まっていることが、協同居住を育むための必要条件のひとつだと思います。

ふれあい住宅の共益費の中で大きなウエイトを占めているのは、協同スペースの光熱費です。どの住宅でも電気代の節約に知恵を絞っています。まず、明るすぎる廊下灯の電球を間引いています。これだけで住宅によっては、月に5千円以上もの節約になりました。わたしたちコレクティブ応援団は南本町ふれあい住宅で、入居直後に夕食会を開いた時、余りにも明るすぎる廊下やエレベーター前の照明に気がつき、居住者と一緒に多すぎる電球を間引いていきました。

電気代がかかるから協同室を使うのをやめさせているという真野ふれあい住宅の1年目の理不尽な状況は既に述べましたが、その時、わたしは関西電力に電話をかけて電気代請求の計算方法を教えてもら

いました。その後に入居した久二塚西ふれあい住宅でも説明を求め、二つの住宅の電気代請求書を比較して分かったことがあります。

それは電気代の請求計算は、電力使用量の大きさによって契約種別・区分が定められていて、電気設備の設計に基づいて電力会社と契約し、その契約種別・区分ごとに計算されるということです。設計段階で入居後の電気代のことを考慮した生活者の視点＝節約の視点、省エネの視点で設計がなされていないと、後々の電気代が必要以上に高くつくことになります。

例えば、電灯が余りにも明るすぎたり、協同室のエアコンの設置数が必要以上にに多すぎると、基本料金の高い契約種別になります。真野ふれあい住宅と久二塚西ふれあい住宅の協同室はどちらもほぼ同じ面積（約200㎡）ですが、従量電灯（室内の電灯や電磁調理器使用）や低圧電力（エアコン使用）の契約の基本料金に大差があります。エアコンを7基設置しているとその契約種別に基づくと低圧電力契約となり、その基本料金は約1万5千円と設定されますが、節約して5基しか使わないことにしても7基分の基本料金を払っていくことになります。設計で5基の設置で十分だと考慮しておけば基本料金もずいぶん安くなります。同じく照明器具が明るすぎる程にたくさん設置された設計になっていると、その従量電灯の契約基本料金が高く設定され、電球を減らして節約してもその基本料金は高いままのものを払うことになります。エレベーターは一般には油圧式とロープ式が使用されていますが、油圧式の低圧電力（動力）は多く必要となり、その基本料金はロープ式と比べてほぼ2倍の差があります。ロープ式エレベーターは屋上に機械室が飛び出てしまいますので、建物の高さ制限などにより、どうしても油圧式のエレベーターしか設置できない場合もありますが、設計者は電気代のことなども考慮してエレベーターの機種を決めているのかどうか疑問を感じてしまいます。10カ所のふれあい住宅にはすべてエレベ

図23　脇の浜ふれあい住宅の2層吹き抜けの協同室

図24　南本町ふれあい住宅の2層吹き抜けの協同室

ーターが設置されていますが、このようなランニングコストのことを設計段階で考慮されているのかどうかは信頼がもてません。

また、脇の浜ふれあい住宅や南本町ふれあい住宅のように協同室が2層吹き抜けの場合は冷暖房費が高くつきます。それに2層吹き抜けの協同室の高い位置（天井）に設置されている照明器具は、体育館で使用されているような大きなワット数の特殊な電球です。電気設備ボックスにあるボタンを押すと交換ができる位置まで電球が下がってきますが、普通の電球ではないので値段も高いです。それに何より、協同の居間という暖かさのある光ではありません。先に触れた共同洗濯コーナーの水栓の口径の大きさについても同じことがいえます。25ミリ口径が設置されていると、共同洗濯コーナーを全く活用せず水を使っていなくても基本料金を払っていかなければなりません。なぜ家庭用の20ミリ口径では不十分なのでしょうか。大量の水を使うような大きな洗濯場の設計にはなっていませんし、現実には居住者の洗濯時間が一度に集中するということなども考えにくいです。

もう生活を知らんもんが設計するのはやめてよと叫びたくなる程、たくさんの無責任な箇所があるようです。

◇上下足の履き替え位置の課題

県営ふれあい住宅は大倉山ふれあい住宅を除いてすべて単独のコレクティブハウジング棟です。これらの住宅では1階に共同玄関があって、みんなここで上下足を履き替えます。

脇の浜ふれあい住宅と金楽寺ふれあい住宅は各階のエレベーターの前の小さなスペースで履き替えます。県の設計方針はこの位置を「履き替え線」と称しています。ここで集中して上下足を履き替えて、その内側の共用廊下も含めて共用空間をすべて室内化するためです。

一方、二つの神戸市営ふれあい住宅と県営大倉山住宅は一般の共同住宅と同様に各住戸内の入口で履き替えます。上下足をどこで履き替えるかというこの二つの方式については賛否両論があるようです。

県営ふれあい住宅のように建物の共同玄関での集中履き替え方式は病院や施設居住のような雰囲気だという見方もありますが、居住者は余り気にかけていないようです。神戸市営ふれあい住宅の居住者はコレクティブといえども独立した住宅なので各住戸内の入口で履き替えるのが当然だと言います。居住者は自分の入居した住宅の方式しか体験していないので、どちらがいいかという比較はできないようです。

ただ県営方式は外来者の無断の出入りを防ぐために、1階の共同玄関はいつもカギをかけていますので不便なことが多いです。訪問者は入口のインターホーンで住戸と応答しますが、オートロック方式になっていないので、訪問を受けた居

図25　上下足の履き替え場所(脇の浜ふれあい住宅では各階のエレベーターの前が履き替えスペース)

図26　岩屋北町ふれあい住宅の共同玄関（写真の左端）

図27　同上、共同玄関脇にある住戸案内板とインターホン

住者は共同玄関まで出てこなければなりません。体調をくずして伏せている時などはつらいです。また、うっかりカギを持たずに外出してしまった時は、だれかに玄関まできてもらわなければなりません。あるふれあい住宅では時々深夜帰宅する酔っ払い居住者に起こされることになる住人は閉口しているようです。

脇の浜ふれあい住宅と金楽寺ふれあい住宅はエレベーター前のスペースで上下足を履き替えますが、外来者は気づかずにそのまま下足で共用廊下に上がり住戸の入口まで行ってしまうことがあります。なお、共同玄関やエレベーター前の履き替えコーナーには各住戸の下足箱が並んでいますが、長靴やロングブーツが入らないので困るという声もあります。また、ここはよく汚れるコーナーなので清掃についても悩みの種のようです。

県営方式は住棟内へは外来者の無断の出入りがくい止められるので、協同室はいつも開かれていますが、神戸市営方式は住棟の入口に扉がないので、協同室が外から自由に出入りできる位置にあると、協同室に人がいない時は施錠の必要があります。神戸市営真野ふれあい住宅は当初自治会長がカギを保管していて協同室が使いにくい状況がありましたが、2年目からは複数のカギ保管担当者がいて、協同室がいつでも自由に使えるようにしているようです。

ある程度の設計上の不都合はそれを補う知恵を居住者が出し合っていけば協同居住の活性化を図っていくことはできますが、上下足の履き替え線はコレクティブハウジングのイメージを決定する大きな要因のひとつになります。施設居住のようなイメージをあたえる共同玄関での集中履き替え方式は、特に若い世代のいる多世代共住型コレクティブハウジングでは歓迎されにくいのではないかと思います。外来者の気軽な行き来もしにくいですので。

◇高齢者世帯だけのコレクティブと多世代共住のコレクティブ

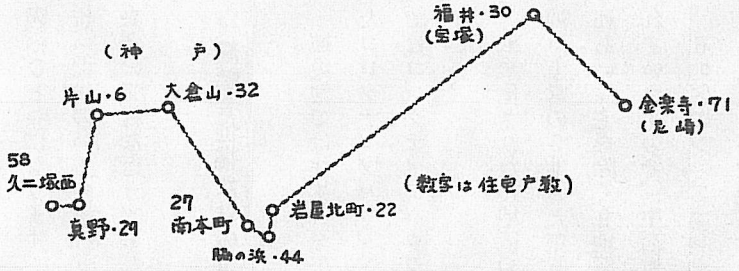
被災地では住まいを失った高齢者の住宅問題が特に深刻なので、災害復興公営住宅の中で事業化されたコレクティブハウジング（ふれあい住宅）は、高齢者向けに重点がおかれています。そのため被災地ではコレクティブハウジングといえば高齢者住宅のことだと一面的な誤った解釈をしている人が多いようです。

事業化された10地区のふれあい住宅のうち6地区は全戸が高齢者向け（シニアコレクティブ）ですが、神戸市営の2地区と県営の2地区は一般世帯も入居する多世代共住型です。また、神戸市営久二塚西ふれあい住宅を除く9地区のふれあい住宅の高齢者向け住宅はシルバーハウジングプロジェクトが適用されていますので、生活援助員さんが常駐もしくは巡回して安否確認などのサポートがあります。

6地区のシニアコレクティブの現在の居住者の平均年齢は70歳をちょっと越すぐらいで、まだまだ元気な人たちが少なくなく意欲的な協同居住を展開しようとしていますが、それでも居住者たちは将来みんなが弱ってきたらどうなるのだろうという心配が大きいです。すでに亡くなった人もいますので、空

ふれあい住宅(コレクティブハウジング)の居住者交流会

ふれあいネットレター　3号　1999. 2. 5.



発行：コレクティブハウジング事業推進応援団

できるだけ若い人の入居を望みます！
行政は気長な支援をお願いします！！

青木義信さん（南本町ふれあい住宅自治会副会長）

あの忌まわしい震災からはや4年が過ぎました。長い間に築いてきた老後の生活設計のすべてが一瞬の45秒で崩れ去りましたが、このたび南本町ふれあい住宅に入居でき、喜んで最後の人生再出発ができるスタートラインにつき、残された余命を全うする覚悟です。

石東さんの名司会による12月のふれあい住宅交流会では勉強させていただきありがとうございました。入居一年を迎えて、思いついたことを申し上げます。

入居者の年齢構成を考慮しないと、すぐに超高齢化が進み、現在おこなっている各種行事や清掃作業が数年を経ずに困難になると思われますので、これからの入居者決定には年齢制限を下げていただきたいと思います。

また入居者どうしの親睦についても、各地から集まって生活しているので、絵に描いた餅のようには簡単にすすまないと思います。みんながよく理解しあって仲良く生活するには数年の歳月が必要だと思うので、行政サイドにおかれましても気長に指導支援をお願いします。われわれはあの終戦前後の凄惨な状況から復興したのです。隣組の精神でみんなで助け合い、健康で仲良く頑張りたいと思います。　　平成11年　お正月

図28　若い人の入居を訴えたふれあいネットレター3号（1999年2月5日）

室にはできるだけ若い高齢者を入れてほしいと県などに要望しています。

一方、多世代共住のふれあい住宅でも、一般世帯向けの住戸の割合は少なく、さらに一般世帯向け住戸にも高齢者世帯が入居しており、若い居住者はほんとうにわずかです。福井ふれあい住宅は多世代共住で、堅実な協同居住が展開されていますが、どうしても若い人たちに負担がかかるので、もう少し若い入居者を増やしてほしいという声があります。また、若い居住者は昼間は勤めに出ていますので、人数が少ないとどうしても協同居住の輪の外に出たままになってしまいがちですが、ある程度の人数がいるとその年代に対応した活動も展開しやすく、老若が融合した相互扶助のある協同居住が期待できます。

なお、現状では若い世代の占める割合が少ないですが、それでも若い人たちが共に住んでいるふれあい住宅では若い人の実際の人数の2倍、3倍ものパワーを感じるのは確かです。

ツアーの目的地は信頼・協同

ヘキサ　安原　秀

コレクティブ応援団をはじめ関係者の努力で実現した公営住宅での新しい取り組みを、独自のツアー企画に例えて考えてみましょう。

このツアー企画の究極のユニークさは、出前説明会と、入居前の協同居住学習と体験ワークショップの開催です。これらを通して居住につなぐことは公営住宅づくりにとって画期的な行為だったと思います。地域の生活をよくしていくには、密着して活動し、まず、存在するニーズを柔軟に軽々と掘り出して、新しいツアー企画という形で議論の対象にしてみせることです。やがてそれらの中から必要なものを関係機関で調整し、行政への仲介を恒久的に行ってくれる専門家の支援が必要なのです。さらに、支援者たちを支援し続ける官民両サイドからの制度や組織の存在によってはじめて、そのことは可能になります。

幸せに、愉快に住まう権利を持っている我々は、そのために相互に協同する必要があるのだと、応援団が苦労の末に示してくれました。震災を契機にして誕生したコレクティブハウジングは高齢者ケアの側面が目立っていますが、これらのことはあらゆる住まいに共通することだし、コレクティブもおそらく修正を繰り返しながら、個々に成熟していくことと思います。

被災地から生まれた新しい住まい

宝塚市都市創造部・前兵庫県都市住宅部都市政策課　坂井　豊

兵庫県は災害復興県営住宅7団地232戸について、コレクティブハウジングを建設するとともに、民間住宅での普及を図ることを目的に、阪神・淡路大震災復興基金を活用した補助制度も創り、現在12団地216戸において活用されています。超高齢社会を見据えたこれからの住まい方が、徐々にではありますが支持されてきています。

コレクティブハウジングは、箱ものを造れば完成ではなく、入居が始まってからがスタートです。現在、大震災における支援事業の検証が各方面で試みられていますが、コレクティブに関しては、あまり性急に結果を求めず、息長く支援していくことが重要でしょう。また、高齢者だけが入居しているのは本当のコレクティヴではない、と言うような意見もあると聞きます。しかし、今回の非常事態の中で、北欧の先進例を真似るのではなく、身寄りのない高齢の被災者が安心して生き生きと生活できるように支援することを第一の目的とし、これによって被災者を一人でも多く癒すことができたとすれば、復興支援としては大いに成果があったと考えていいでしょう。被災者の視点と被災地の目線に立った新しい住まい方が全国に発信され、新しいライフスタイルの一つとして根をおろすよう期待しています。

Collective Housing

4

再開発事業受皿住宅での コレクティブ

神戸市長田の下町居住の再生

久二塚西ふれあい住宅は神戸の西寄りのにぎやかな旧い下町、ＪＲ新長田駅の近くにあります。このあたり一帯は震災でひどい被害を受け、神戸市による震災復興再開発事業が広い地域にわたって進められています。その再開発事業の第一番めに完成した店舗つき住宅の２階から上が神戸市営コレクティブハウジング・久二塚西ふれあい住宅です。１９９８年12月に入居が始まりました。

久二塚西ふれあい住宅が他のふれあい住宅と違うところは再開発事業の受皿住宅〔注13〕であり、この地区に元いた人たちが入居しているということです。入居者の顔が見える＝入居者に完成を待っていてもらいながら、事業が進められたということで、入居者は震災前まで近隣で生活していた長年の知り合いどうしが多いということです。震災からほぼ丸４年、長いことお待たせしました。

〔注13〕受皿住宅（従前居住者用賃貸住宅）は再開発事業等の施行に伴って住宅を失い、住宅に困窮する人が入居できる住宅です。久二塚西ふれあい住宅は阪神・淡路大震災の被災地復興事業で、住宅市街地総合整備事業と新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業の合併施行で建設した従前居住者用賃貸住宅です。

図１　久二塚西ふれあい住宅のパンフレット

（1）そんな住宅理想的や、そやけどわたしら5年も待たれへん

◇ほんまに長いことお待たせしました

震災の年の12月、長田区二葉老人いこいの家で、仮設住宅にいるひとり暮しのお年寄りたちに寄ってもらって、初めてコレクティブハウジングの話をしました。その時の様子は、『そんな住宅、理想的や、そやけどわたしら5年も待たれへん！』と題して、阪神大震災復興市民まちづくり支援ニュース「きんもくせい23号」（96年1月27日発行）に書きました。現在の入居者の中に「あの時来てはった」と、わたしが覚えてる人もいます。ほんまに長いことお待たせしました。あの時の様子をここにもう一度再現します。

「そんな住宅、理想的や。そやけどわたしら5年も待たれへん！」

長田区のひとり暮らし高齢者のすまいを考える集い（被災地にコレクティブハウジングを！ その5）

12月半ば、長田区二葉老人いこいの家で、仮設住宅に住むお年寄りの〝ひとり暮らし高齢者のすまいを考える集い〟が久二塚6まちづくり協議会・住宅部会によってもたれた。出席者は地震前まで長田区久二塚地区の借家に住み続けてきた人たちで、72歳～85歳までの女性11名と地区の世話役の方々である。

以下にその日の話を再現してみよう。聞き手は森崎輝行、太田尊靖、小林、石東である。

＊

――コレクティブハウジングという聞き馴れへん言葉やけど、みんなで集まって住もうという住宅についてPRにきました。自分の住宅は小さいけど台所やお便所もついていて、共同の大きめの台所、食堂や談話室、お風呂などがあるという共同住宅で、住む人がみんなで共同部分を使って、管理していくという住まい方です。

「そういう住宅ええけど、入れてもらえるんかな。理想的や」

「動けるもんがして、助け合う生活、これからは相互扶助せなあかん」

「それ建つのにどれ位かかるん、5年もかかるんやったらわたしら待たれへん」

「2年位やったら待っとけるかなあ」

――たとえば廊下を広げて椅子なんか置く。そこをみんなで掃除できるか。

「自分ができる間はやる。できんようになったらどうしたらええんやろか」

「町内の友愛の人が手伝いにきてくれるよ」

「当番制にしたらええ」

「できる人とできへん人もいるので、文句が出るのとちがう」

「これまでのような日本的なグチグチ言うたらあかん」

「この地震から人間切りかえなあかん」

「仮設住宅のお風呂はこわい。高いので入りにくい」

「銭湯の方がええ。人と知り合える」

「そんな住まい方やったら気分悪うなっても、誰かにすぐ分かってもらえる」

「地震の後、西区で老人ホームに入ってた時、そこでは相互扶助が当たり前やった」

「ひとり暮らしいうても、娘が一人いるというのと、全くひとりというのは違うわな」
「身体が弱いので人に気をつかう。参加したいけど、何もできなかったら人にしてもらう方が多くなって気兼ねする」
――趣味の部屋なんかどう？　使われるかな。
「編みもんなんかはみんなで一緒にもするけど、自室でもやっている」
「長楽の仮設は一棟に24戸入っていて、風呂がひとつしかない。どうしても二つは必要。風呂は大と小があればええ」
――食事をみんなで作って食べるというのは、どう？
「いろんなものを食べられるのでええ。ひとりやと同じもんを何日も食べなあかんし、自分の好きなもんしかつくらへんので、栄養がどうしても片寄る」
「食事を作るのは運動にもなる」
「不経済にならへん。一週間分のメニュー考えたらええねん」
「自分で作ってみんなで持ち寄って食べるというのもええんのとちがう」
「元気な時はいいが、しんどい時は食事を助けてもらえるのが一番ええ」
――男と女と一緒というのは、どう？
「ほら一緒がええ。テレビ見てても考え方がいろいろ聞けてええ」
「釘打ったりする時でも男の人の手がいる時があるわな」
――指導する人がいるやろか？
「身体が不自由になった時リーダーがいる」
「老人はわがまま言う人が多いので、そんな住宅は無理やと思う」
「いやな人は入らんでもええんのとちがう」

「同室型より、そのコレクティブとかいうのがええね」
「家賃は3万円ぐらいしかよう出さんなー」

＊

晦日とお正月の新聞には、中高年の被災者の自殺や孤独死の記事が多かった。お正月を前にして、孤独に耐えられない被災者は少なくなかっただろう。記事によると、震災後の自殺者は6月以降は仮設住宅居住者が目立っているという(毎日新聞によると、1月半ばで、自殺者33名、独居死51名、室内で意識不明に陥った人12名)。一日中誰ともふれ合わんと、部屋の中で孤独に過ごすのはあかん。明日への気力がわいてけえへん。

《いつでも誰かと会えるし、いつでもひとりになれる》、《ひとりで食事するよりも、たまには大家族のように集まって食べよう》というコレクティブハウジングが理想的やと思う。

今、仮設住宅に住んでいる人の中には、自力で住宅を確保して移り住む人もいるけど、多くの高齢者や母子世帯などは災害公営住宅の入居を待たざるをえない。

そうすると災害公営住宅では、今の仮設住宅よりももっと高齢者や母子世帯などの割合が多くなるだろう。

行政としてはいろんな懸念もあると思うけど、とにかくモデル的にコレクティブハウジングの供給を早急にやってみて！長田区のしたたかなおばあちゃんたちの応援があるやん。

初期に建てる住宅に実験的にとりくんでみて、問題点があれば修正していけばいい。躊躇していると孤独に耐えきれないで、人知れず亡くなっていく人の記事が、今後何年も何年もの間報じられて胸を締めつけられる日々が続くよ。

被災した人たちは人間が変わった。変わろうとしている。変わって新しい生活を始めようとしている。行政システムも変わってほしい。人々が仲良くしていける地域をつくることが防災である。

《共に住む、共に生きる、相互扶助の暮らし》、《集まって住む安全性と安心感、集まって暮らすことの楽しさをもつ住宅》の供給が、待たれている。

昔のように元気な生活をとりもどした下町のニュースを、1日も早く目にしたい。そして、そこから、本格的なコレクティブハウジングが発展していくのを願っています。

（「きんもくせい」23号　96年1月27日発行より）

◇なぜ受皿住宅にコレクティブハウジングなの？

久二塚地区のこの震災復興再開発事業の受皿住宅にコレクティブハウジングの導入を提案したのは、当地区の再開発事業の設計・監理を神戸市から受託し、コンサルタント業務もボランティアしている建築家の森崎輝行さん（森崎建築設計事務所長）です。彼はここ長田の下町の生活再建にはコレクティブ的な生活が必要だと提案し、神戸市都市計画局を動かし、コレクティブが事業化されることになりました。しかし、コレクティブハウジングとしての神戸市の認知はずっと後で、真野ふれあい住宅が華々しく取り上げられるのに対して、こちらのコレクティブはずっ～と日陰の存在でした。でもそんなことは気にせずに96年4月から、久二塚6まちづくり協議会住宅部会〔注1-4〕はコレクティブハウジングの勉強会を始め、97年2月からは受皿住宅の入居希望者たちに集まってもらって、「ふれあい住宅のつどい＝入居前協同居住の学習・体験ワークショップ」を続けてきました。

久二塚地区の従前居住者には高齢のひとり暮らし世帯が多く、鉄の扉を閉めると全く外部から孤立化してしまうような鉄筋コンクリートの共同住宅に住むのが初めての人が少なくありません。新しい住宅に移り住んだ後、住宅に閉じこもり孤独に陥ることがないように、日常生活の中で自然な形で住人たちがふれあい、相互扶助が育まれるような仕掛けをもった住宅の供給が必要です。それは震災で消失してしまった下町の長屋住まいのような気楽なふれあい生活の再生ともいえます。一方、受皿住宅のうち小

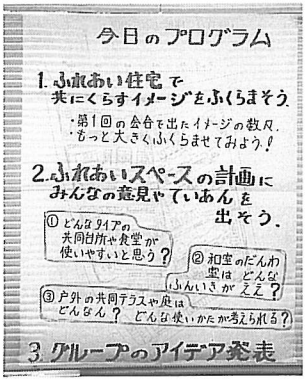


図3　入居希望者による「受け皿住宅について語ろう会」のプログラム（1997年3月）

図2　久二塚6まちづくり協議会住宅部会はコレクティヴハウジングの勉強会を始めました（1996年4月）

規模住戸棟（1DKと2DK）は、住戸面積の狭さを補うためにも、自分たちの住まいのつづきのように自由に使える大きめの協同スペースがあれば便利だし快適です。ということで、「いつでも誰かに会えるし、いつでもひとりになれる」「ひとりで食事をするよりは、たまには大家族のように集まって食べよう」という住まい方のできるコレクティブハウジングの有用性が認められて、事業化されることになります。

しかし、受皿住宅なので、コレクティブ生活を好むと好まざるとにかかわらず入居せざるを得ない人もおり、また三つの丁にまたがっているのでみんながが顔なじみというわけではないので、入居前のワークショップをすることにしました。新しい生活に移ることや近隣関係などへの不安を和らげ、入居前にみんながより仲良くなって、ゆるやかな協同居住の意味を理解しながら、入居までの長い時間を健やかに待っていてもらうというものです。

〔注14〕「久二塚6まちづくり協議会」の「久二塚6」という名前の由来は、久保町6丁目、二葉町6丁目、腕塚町6丁目の3地区の文字の合作です。この地区の従前居住者のための受皿住宅のコレクティブハウジングは、完成後「久二塚西ふれあい住宅」と名づけられました。

図5　「協同室の運営と管理について話し合おう」（1998年2月）

図4　電磁調理器を使っての協動の食事づくりのトレーニング（1997年5月）

◇入居前の協同居住の学習・体験ワークショップ

入居前のワークショップは森崎・石東コンビで進めてきましたが、久二塚6まちづくり協議会、兵庫教育大学、神戸芸術工科大学や京都府立大学住居学科などの学生、事業担当の神戸市職員をはじめ、時々に沢山のサポーターが参画してくれました。2年間のワークショップは事業の進捗に沿って三つぐらいの段階があります。

第1段階は97年2月から夏ぐらいまでで、必ずしも受皿住宅への入居を心に決めた人ばかりでなく、当地区の従前居住者たちが気楽に集まり、ふれあい住宅についての意見交換や協同台所に設置される電磁調理器の使い方実習を兼ねた料理教室やお茶会などをしました。

97年8月の起工式を終えてから98年初夏までの第2段階は、建物完成模型を見てふれあい住宅の造りを知り、少し真剣になってふれあい住宅について気になっていること、協同室の使い方や管理について話し合ったり、真野ふれあい住宅（98年1月末入居）を訪ねたりしました。毎回のワークショップにはふれあい料理づくりとしておせち料理の会やおひな様昼食会、お茶会などを組み込んで、食をもってふれあう心を育んでいきました。そうそう、しあわせの村の温泉へバスツアーもしました。この間は毎回30名前後の参加者があり、会合の様子を伝える「ふれあいだより」も発行しました。

98年夏に受皿住宅の入居申し込みが始まり、入居内定者が決まってからは第3段階になります。入居までに決めなあかんこと、入居後に決めることなどが沢山あり、月に1

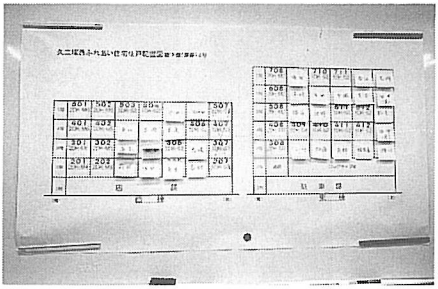


図7　希望の部屋位置が貼られていく

図6　みんなで部屋の位置決め（1998年11月）

～2回のペースで集まりをもち、名称も新たに「久二塚西ふれあい住宅のつどい」とし、入居後の現在もまだ続いています。この間の主なテーマは、住宅見学会、入居時の必要品（カーテン、照明器具、網戸など）の共同購入、みんなでの住戸位置決め、協同室の備品購入、引っ越し日程調整などで、竣工記念パーティもしました。なお、共同購入では大量購入して安くしてもらえたうちの一部を入居後の協同居住の運営費に備えました。

入居後は自治会役員の選出、協同室の運営規則の検討と運営委員の選出などと、路地広場の花壇づくりをみんなの協働でしました。

なお、この2年間余りのワークショップの企画・運営については、わたしはボランティアでなく、神戸市都市整備公社からのコンサルタント派遣業務委託を受け、仕事として係わりました。

◇初めての協働の食事づくりはワイワイガヤガヤ

97年5月16日、「たまには大家族のように集まって食べよう！」というテーマで、ワークショップをしました。プログラムは、

- 電磁調理器を使いこなそう！
- 今日の調理のできばえは？
- ふれあい住宅での希望を語ろう！

今日のように集まって食事をしようと思う？／協同台所や食堂の備品などはどうしま

しょう？／どんな協同のルールがいるかしら？

というもので再開発第2現地相談所で、電磁調理器を提供してもらった関西電力の協力のもとに、八宝菜風炒め、春巻き、中華コーンスープ、ごはんを作りました。当日の地元の参加者はいつもの1／4位の少人数で、13人ですが（体力的に食事づくりに参加できないと思われた人もいらしたようです）、サポーターが大勢です。関電の調理サポーターと調理器具の説明スタッフ、市職員等以外に、いつもの学生サポーターが11名です。まず、ワークショップの前に、学生サポーターへのワークショップ講習会と電磁調理器の調理講習会をしました。

地元の人が主体となって食事づくりが始まると、学生たちには「サポーターはあくまでサポートね！」と言っておいたのに、学生たちが結構主体になって楽しみました。でも、それがかえって多世代が集まった大家族のような食事づくりとなり、孫世代を交えての調理に親世代、祖父母世代もはしゃいでいました。みごとな包丁さばきをみせてくれたお好み焼き屋のお父さんには、学生たちから感嘆の声があがりました。お母さんたちの中には「さっちゃん」とか「よしちゃん」と名前で呼び合う仲良しもいて、和やかな雰囲気です。

食事をしながら、感想をしゃべり合いました。協働の食事づくりについては、様々な発見や感想がありました。ひとりでテレビ観ながら食べるよりおいしい、新しい食材や食べ方にであえる、自然に人と話がはずむ、新しい料理にも挑戦できる、食費も安くつくのではないか、などなどの歓迎の意見が多数派です。反面、恒久住宅ではできるかしら、味付けの好みもあるし、光熱水費の負担は参加者と不参加者でどうするのかなどの心配の意見もありました。学生たちの感想は、みんなで作って食べるのはパーティーぽくって楽しいというものから、食は人間が生きていくための不可欠の行為であるが、それを共

表1　協同居住の学習とふれあいを育む「暮らしのこん談会」の歩みの概要

1995.12.	二葉いこいの家で仮設住宅のひとり暮らしのお年寄りによってもらって，初めてコレクティブハウジングの話をする．
1996.4.	久二塚6まちづくり協議会住宅部会でコレクティブの勉強会を始める．
1997.2.～5.	**「久二塚6に建つ受皿住宅についてみんなで語ろう会」（入居希望者の参加）** 第1回　どんな住宅が建つの？　いつ入居できるの？　こんな住宅にしてほいしい！ 第2回　ふれあい住宅の夢をふくらまそう／グループアイディア発表 第3回　電磁調理器を使って協働の食事づくり
1997.10.～1998.6	**「腕塚6ふれあい住宅のつどい」（入居希望者の参加）／「ふれあいだより」の発行** 第1回　ふれあい住宅について知ろう／お茶会 第2回　ふれあい料理づくり 第3回　ふれあい住宅について気になっていることを話しあおう／おひなさま昼食会 第4回　真野ふれあい住宅を訪問／しあわせの村へのバスツアー 第5回　協同室の運営と管理について話しあおう／お茶会
1998.9.～1999.6.	**「久二塚西ふれあい住宅の暮らしのこん談会」（入居内定者の参加）** 第1回　入居内定者の状況の報告／入居までのスケジュール／住宅の造りの説明／お茶会と意見交流 第2回　共益費や協同購入についての意見交流とお茶会 ☆　神戸市と協同室の家具の購入に行く ☆　住宅見学会 ☆　入居説明会／みんなで部屋決め 第3回　共同購入品の申し込み受付 ☆　竣工記念式典／記念パーティ 第4回　住宅内設備機器の使用体験／引っ越し日程調整 ☆　鍵わたし／引っ越し始まる 第5回　年末お茶会と楽笑室の協同備品の購入について意見交流 第6回　自治会役員3役の選出／楽笑室の利用ルールの意見交流と鍵の保管担当者の選出／備品購入世話役の選出 第7回　自治会役員の選出／サークル活動の誘い／路地広場の花壇づくりの説明 ☆　おひなさま食事会 第8回　路地広場の花壇づくりとお茶会／楽笑室の電気代の明細検討 第9回　路地広場の花壇づくりとベンチ，パラソルの設置／昼食会 第10回　自治会規約と協同スペース維持管理規約の検討 第11回　自治会総会／路地広場完成記念の花まつりパーティ

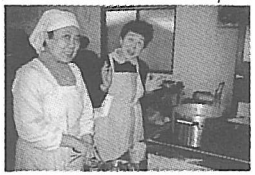
有するということについて派生するものは何かという理論ぽい感想、楽しすぎてひとりの生活にもどるのが寂しいなんていうのもありました。わたしがもっとも感激したのは、「わたしら若い年寄りが調理をして、80代の年寄りたちに食べにきてもろたら、電磁調理器の使い方も年寄りたちに分かってもらえるし、おいしい物もたまには食べてもらえる。今度は10人ぐらいずつで、自分たちで企画してなんべんもしていこうよ。仮設住宅ごとに呼びかけてここ使わしてもろてしたらどう?」という話がでました。わたしは、「ぼたもちなんかつくりはった時は、わたしも絶対呼んでネ」と頼みました。

当日は40名分の調理をし、電気使用料はクーラーの使用料を除いて300円相当でした（メーターをチェックしておきました）。食材費は一人1千円ほどかかりました。これは高すぎます。その原因はいい食材を使いすぎたことです。春巻きには、大きな新鮮な海老、ホタテ貝、黄ニラなど用意されました。今回は無料の食事会にしましたが、次回からは主婦の感覚で買い物をしなければなりません。

（2）こんな造りの住宅で、このような住人です

◇路地広場のある下町住宅の再生

場所は腕塚町6丁目、5階建と7階建の南北棟2棟（構造的には1棟）が向かい合っており、棟間の2階レベルは人工地盤で、ここは屋外コレクティブスペース（路地広場）です。この広場に面して東棟



●「ローストビーフなんか一人やったら作らへんし，はじめてやわあ。楽しみや！」

○「エビを春雨で揚げるの珍しいね。こんな食べ方もあるんやねえ。」

（去年のわいわいクッキングの参加者）

●「もう２回目やし使い方もだいぶなれたわ！」

○「ＩＨの方がラジエントより加熱は早いしええね。」

●「でも赤くなられへんしついてんのかわからへんわ。」

○「自分一人やったらこんなに色々作らへんから，こういう食事会はいいね。」

●「＊＊さんにも持ってったげよ！～さんにも，～さんにも・・・」

～気になるお味の方は～

たまには大家族のように集まって食べよう！！

サポーターのひとこと

参加者はサポーターも含めて５０名以上でしたが，料理作りでは一人一人がてきぱきと動き，思ったよりも早くて出上がりました。味もとてもおいしかったです。食事会の後の意見発表でも，たくさんの意見・笑顔がありとても和やかな雰囲気で楽しかったです。次回も楽しみです。

発行：腕塚６ふれあい住宅のつどい運営委員会
編集：京都府立大学サポーター

腕塚
98．2．15
発行

6 5 3 - 0 0 4 2

腕塚６ふれあい住宅のつどいニュース

ふれあいだより　第２号

腕塚６ふれあい住宅（Ａ２棟）は市営住宅ですが、全員で使える協同スペース＝協同室（協同台所、食堂、だんわ室）があります。協同室は入居者が自由に使い、みんなで掃除や光熱水費を分担します。この住宅（受皿賃貸住宅）に入居希望の方を対象に、入居までの間、いろんなことを話し合う集まりを定期的に開催します。どうぞご参加ください！

＊テーマ＊
「ふれあい料理づくり」＋「ふれあい生活について語ろう」

１２月６日の第２回「腕塚６ふれあい住宅のつどい」は，

第１部
～電磁調利器を使っての おせち料理作り～

第２部
～テレビで放映されたふれあい住宅を見て感想を語そう～

でした。

参加者は約３０名の入居予定者の方々とまちづくり協議会の役員、サポーター等で、５０名以上にもなりました。

第１部

おせち料理は『京風雑煮，手まり寿司，海老の五色揚げ，和風ローストビーフ』と豪華なものでした。料理が始まると，がぜん生き生きとはりきり母さんになって和気あいあいと進められました。大家族のように，学生食堂のように，大テーブルを囲んでにぎやかにいただきました。

第２部

食後は第２部に移り「被災地のコレクティブハウジング」のNHKの放映のビデオを見ました。これは県営片山ふれあい住宅と市営真野ふれあい住宅を中心に「コレクティブハウジングとはどんな住まい？」かを理解するいい番組でした。これを参考に「私達の腕塚６ふれあい住宅」について語ろうというものでしたが時間がなくなり，これは次回にまわすことにしました。そこで今日の会合についての意見を一人づつ述べて終わりにしました。意見はいっぱいでました。

図８　入居希望者の食事づくりワークショップを伝える「ふれあいだより」第２号（腕塚６ふれあい住宅のつどい運営委員会発行・1998 年 2 月 15 日）

図9　久二塚西ふれあい住宅の外観（2棟の間の2階に路地広場がある）

の2階に屋内コレクティブスペース（「楽笑室」と石東がネーミングしました）があります。この2棟の北側には国道2号に面して13階建ての受皿住宅（99戸で99年年末に入居）がありますが、これはコレクティブではありません。

久二塚西ふれあい住宅は58戸で、西棟（5階建の1階は店舗、2～5階は住戸28戸）と、東棟（7階建の1階は駐輪場、2階は楽笑室、3～7階は住戸30戸）で、住戸は1DKが45戸と2DKが13戸です。楽笑室は約200㎡で協同台所、食堂、談話室、趣味室（和室）と広縁があります。路地広場も約200㎡の広さで、木製デッキがあり、そこにはベンチやパラソルが置かれ、ケヤキの植わった丸い花壇が2カ所と花壇づくり、野菜鉢づくりのための大きなプランターがたくさんあります。白いパイプの落下防止網の下に木製の庇を作り藤棚にしました。

路地広場は住棟間なので、あまり陽は当たりませんが、花花はよく育ち、町中にあってホットする空間です。わたしはここが町中のオアシスになり、七夕さん、地蔵盆、お月見、クリスマスなどの野外舞台になればいいなと期待しています。

◇達者な下町の高齢者たち

現在（99年12月）の入居者は50世帯で、二人世帯が13世帯と一人世帯が37世帯です。住人は全部で63人で、男が18人、女が45人で、その年齢構成はなかなか壮観です。65歳以上の割合が74％、75歳以上でみると33％です。40歳以下は3人、40代と50代で6人、60代が20人、70代が22人、80代が12人で、最高齢者は89歳、最年少者は18歳です。こんなに超高齢化とは予想外でした。下町の人たちはこんなに歳をとっているんですね。改めて認識しました。

わたしはこのごろ高齢化率の規定を変えた方がいいと思っています。長寿社会になり、元気な60代、70代が増えてきたので、高齢化率の指標は65歳からでなく、75歳以上の人口比で表すほうが、実情に合っているような気がします。

ここの80代はとても元気な人が幾人もいらっしゃいます。今まで何十年も商売をされていた人たちは殊の外お元気で、年を感じさせないきびきびした動きをされます。わたしが密かにあこがれている4人の仲良しさんがおられます。年齢は合わせて340歳に近いです。花植えワークショップや居住者のつどいにはいつも積極的に参加され、連れもって帰られます。4人とも小柄でシャキシャキとしておられ、まるで姉妹のようです。

「わたしら戦前からのつきあいよ。ほら、地震前まではあそこに一緒に住んでたんよ」「わたしはこの人の主人とは、この人よりも前からの知り合いよ」という話を聞きました。「あそこに住んでたんよ」と指さされた場所は、この住宅の隣接地で、今再開発の工事が進行中です。

居住者の中には、地震前までは比較的面積の広い家に住んでいた人もいますが、今回は原則として一

人世帯は1DKということですので、狭さへの不満が多くなっています。一人世帯でどうしても2DKの賃貸住宅に入居したい人は、次に竣工予定の住宅を待たねばなりませんが、それも必ず2DKが保証されている訳ではありません（家族世帯が入居してなお空室があればということです）。

入居者の多くが昔から顔見知りで、ほとんどの人は震災後は近くの再開発事業用仮設住宅に入居していたので、いくつかのグループがつれもって入居をしたようなものです。しかし、震災前の久保町、二葉町、腕塚町の各6丁目がひとつになって久二塚西ふれあい住宅に入居したので、各丁ごとにはでしゃばったらあかんという遠慮があるようです。隣保を越えてでしゃばったらあかんという下町の掟があり、それはワークショップに現れてきます。自分から何かを提案したり、先に手を上げる人はいないけど、誰かに推されてやりだすとすぐお世話好きしてしまいます。なお、同じ下町にいた人たちなので、鉄筋コンクリートの立体長屋になっても気軽に隣家の鉄扉を開けているようです。重い鉄扉であっても精神的な扉は軽い木戸のようです。

「こんなええ協同スペースがあるんやから、使わなもったいない。宝のもちぐされになる」という声がしばしば聞かれます。年はとっても、まだまだ気力も体力もおしゃべりも声の大きさもあふれており、何よりも心の通い合いが感じられるので、楽しみなスタートです。入居間もないひな祭り昼食会は3日前から準備して、散らしずし、蛤のおすまし、カレー、ギョウザとそれはそれは見事なご馳走をつくり、30余名が参加して盛り上がったとのことです。

(3)　下町生活の自然体の協同居住が展開しはじめた

◇さっそく共同で新聞を購読

98年の年末に引っ越しが終わり、年が明けて1月末に久しぶりに居住者たちは会合をもちました。震災から4度目のお正月を新しい住宅で迎えられて感激もひとしおだったと思います。楽笑室にはリラックスした表情のお顔が集まりました。

まず今日は、協同居住を運営していくために自治会役員を決めます。自治会長、会計、会計監査が選出され、副会長は自治会長に人選を任せて、みんなに承認を得ることになりました。今まで2年余りふれあい住宅のつどいを重ねてきた顔ぶれなので、役員選出はスムーズに決まりました。入居前に各階の世話役と楽笑室の備品購入世話役が決まっていたので、これだけ揃えばもう今までのように全面的なお節介をしなくても大丈夫と、わたしはホットしました。

しかし、これは少々見当ちがいでした。楽観視しすぎていたことに気づかされるのは後のことです。

楽笑室などの協同スペースの使用規則はいずれ決めることにして、楽笑室は汚れるのを心配しないで、とにかく自由に使ってみようということで、鍵は朝から夕方まで開けてお

図10　協同室は「楽笑室」とネーミング

くことにし、3名の鍵担当係も選出しました。楽笑室に気軽に立ち寄れるきっかけになればと、共同で新聞をとることにして、スポーツ紙も含めて2紙の購読を決めました。わたしのこの提案は、すでにいくつかの他のふれあい住宅でも実行に移されていて、グッドアイディアだと思っています。話が逸れますが、ひとり暮らしの災害公営住宅の入居者の中には新聞を購読していない人も多くて、近くの商店街が売り出しのチラシを入れても知れわたらないと、店主が嘆いていたのを聞いたことがあります。

◇みんなの協働で路地広場が大変身

この久二塚西ふれあい住宅には広い屋外協同スペース＝路地広場があります。

建物竣工時に神戸市が整備した状態ではとても殺風景です。わたしはここをみんなで花のある楽しい庭に変身させようと提案しました。みんなの賛同がありました。ここではすぐ「そら、ええやん！」という声とともに賛同がえられるのがうれしいところです。費用は阪神・淡路大震災復興基金による「被災者向けコレクティブハウジング等建設補助制度」を申請することにし、美化変身の技術支援は阪神グリーンネットの辻信一さん（環境緑地設計研究所）と武部雄三さん（オム設計室）に頼みました。

路地広場の美化変身ワークショップは3月と4月の2回、居住者20名程が参加して行いました。ワークショップより前に武部さんが計画案をつくってくれて、みんなで検討しました。当日は大きなプランターに花の苗、野菜やハーブの苗を武部さんの指導で植えていきます。京都府立大学の古野素子さんたちの学生サポーターも参加し、童心に返ったようなにぎやかな居住者の声が響きます。他のふれあい住宅に比べると、声の大きな人が多くおられます。何でも遠慮なく言う人もいます。体力がなくて、作業

図12　みんなで花植えして様変わりした路地広場

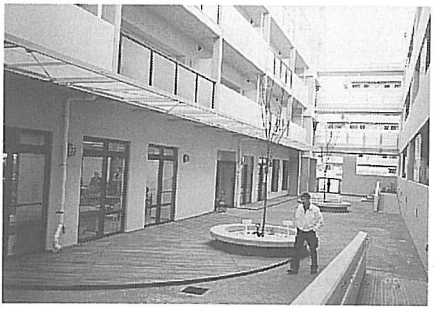


図11　住宅完成時に神戸市から渡された路地広場の風景（花植えワークショップ前）

に参加できない人は椅子に座っての見学です。ここでも足が弱かったり、腰が痛かったりして、馴れない作業には参加できない人も少なくありません。そんな人たちは協働に参加できなくて申し訳ないといつも言われます。わたしは「作業に直接参加できなくても、見てるだけでも参加よ」と、みんなに言っています。参加できなくて悪いなーと思いながら部屋に閉じこもっていては、申し訳ないという気持ちも伝わりません。「見てるだけの参加」形態は、他の人にその人の状況が分かってもらえて、普段でも必要な時には手助けしてもらいやすくなります。

風はまだ春風でなく、水も冷たいですが、あっちの鉢を終えると次はこっちと、2時間余り体を動かしました。いい運動になりました。終わると楽笑室でみんなでお茶を飲み一服です。お茶菓子はどこかから自然と持ち寄ってこられます。体を動かした後は殊の外和やかで、おしゃべりは終わりがありません。

2回のワークショップで200㎡程の路地広場は大変身しました。ベンチや大きなパラソルも設置し、白いパイプの落下防止網は木製の庇で覆い、藤の木も植えて藤棚にしました。作業前と作業後の2枚の写真を並べて見ると、誰もが「おおっ！　見事に変身！」と感嘆の声をあげます。

こんなに沢山の花や緑を増やしてしまったので、夏になると水やりが大変です。水やりについては特別に当番を決めたりしませんでした。路地広場に面した住戸のお父さんがずっとやってくださっていましたが、しばらくして男9名で水まきクラブができ、順番にやっているという報告を聞きました。

図14　同右

図13　みんなで花植えの風景

図15　花植えの後の記念撮影

図18　同右

図17　路地広場の美化第2段、パラソルやベンチを置こう

図16　花植えの後のお茶会で一服

住宅建設主体が竣工時に隅から隅まで整備するより、住人が自分たちの手で整えていく方がいいと思います。自分たちの庭という気持ちが育まれて、住人に維持管理についての責任感もできます〔注15〕。ただし、入居後に住人が環境づくりをするための資金の裏付けは必要です。久二塚西ふれあい住宅の場合は「被災者向けコレクティブハウジング等建設補助制度」と「ひめりんごクラブ」〔注16〕の助成を受けたので、ここまでできました。

〔注15〕神戸の東部新都心ＨＡＴ神戸の災害復興住宅地でも、造園専門家の呼びかけで住人による「ガーデンクラブ」をつくり、住人が手が加えられるような屋外スペースを見つけて、協働でガーデニングをすすめています。

〔注16〕「ひめりんごクラブ」は、公的な復興恒久住宅における緑の地域環境づくりのための支援制度で、アメリカンファミリー社社員の方々による資金提供と、阪神グリーンネットという緑化まちづくりを支援するＮＰＯ団体の技術協力からなります。この制度の応募、実施内容の調整等の事務局はＮＰＯ法人のコミュニティサポートセンターが行っています。

◇協同スペースの維持管理費と地域開放

99年6月13日は自治会総会と路地広場完成記念の花祭りパーティを行いました。自治会総会では自治会規約と自治会役員の承認についで、協同スペース運営管理規約の承認も行いました。

協同スペース運営管理規約の附則に「協同居住運営協力金の徴収」について規定しています。これは、入居者以外が楽笑室を使用したいという時の規定です。久二塚西ふれあい住宅は町なかにあるので、周辺地域の人から寄り合いなどのために楽笑室を使わせてほしいという声があります。地元住民の福祉、文化活動や自治会などが使用する時の部屋代は2時間当たり2千円以上、地元以外の組織の使用は3千円以上、個人使用の場合は100円以上と使用料を決めました。また、この住宅の住人の来客が宿泊する場合は1泊1千円です。これらは、協同スペースの光熱水費や協同居住の活動費に活用するので、「協同居住運営協力金」という名で徴収します。

図19　入居後の自治会役員の選出（1999年1月）

なお、住人は自治会費として月額3千円／戸とは別に協同スペース運営および維持管理費として月額1千円／戸を集めています。自治会費は住宅の共用部分（廊下、階段、玄関、エレベーター、自転車置き場、ゴミ置き場など）の電気代と散水のための水道代、その他自治活動費です。協同スペース運営および維持管理費は楽笑室の光熱水費とお茶葉やトイレットペーパーなどの消耗品代の他に、お茶会や食事会などの材料費の一部に充てます。楽笑室の光熱水費は使用頻度によりますが、今のところ大体1カ月3万円前後です。

99年秋から楽笑室は毎週金曜日の朝10時からお昼の3時までふれあいデイサービスに利用されています。これは神戸市の地域福祉施策のひとつのサティライト型ミニデイサービスで、神戸市立長田在宅福祉センターがこの地域の65歳以上の人を対象に実施しており、久二塚西ふれあい住宅の住人も15名が利用登録しています。比較的元気なお年寄りが集まって来て、健康チェックや昼食、リクリエーションなどを共にして過ごします。このミニデイサービスに楽笑室を貸すことについて住人の意向をきくために、自治会はアンケートをとりました。90％近い賛成があったそうです。楽笑室の使用料は1回あたり5千円です。昼食はお弁当を取っていますが、お茶を沸かしたり、トイレの使用や冷暖房の使用がありますので、協同スペース運営管理規約での規定に近い額にあたります。

参加者の利用料（昼食代）は450円ですが、ここの住人とっては自分たちの協同居間を使っているのですから、わたしは楽笑室の賃料収入から少し補助してもいいのではないかと思ったりもします。なお、この久二塚西ふれあい住宅の住人はとても高齢化していますが、シルバーハウジングプロジェクト（高齢者ケア付き公共賃貸住宅）の制度がかかっていないので、自分たちの協同居間でミニデイサービスが行われていることは将来のことを考えると安心した気分になります。

また、久二塚西ふれあい住宅の住人にとっては、自分たちの協同居間がこういう形で地域の交流の場になるのは、誇らしいことです。わたしはコレクティブハウジングの地域への波及効果として、とてもいいモデルだと思っています。

◇花祭りパーティ

自治会総会もそこそこに花祭りパーティが始まりました。住人たちは3日ほど前から準備をしました。散らしずし、ジャガイモ丸ままやごぼ天一本そのままというダイナミックで実沢山のおでん、鶏の空揚げ、おすましなどです。コレクティブハウジング事業推進応援団は路地広場のパラソルの下で喫茶店を開店しました。近くの片山ふれあい住宅からも連れもってお越しになりました。久二塚6まちづくり協議会の役員さん、神戸市職員、今まで支援してきたコレクティブ応援団をはじめとするサポーターたちも参加し、楽笑室は満員になり、路地広場にまでテーブルを並べました。「たまには大家族のように集まって食べよう」という大きな大きな家族、まるで中国の客家の円楼住宅のように一族が集合した宴のような風景が繰り広げられました。初夏の路地広場はほんまに気持ちよく、食後のコーヒーはベンチや花壇の縁に腰かけて楽しみました。コレクティブ応援団の喫茶店は大忙しでした。にぎやかな声が交差し、参加者みんなが本当に堪能した宴でした。

この盛大なパーティの裏方は元気なお母さんたち10名ほどで、メニューの企画、買い物、調理など、手分けして準備しました。彼女たちは当日テーブルに着く間もなく、次々と動き回り、自分たちの食事はおしゃべりしながら厨房ですましました。いつもほぼ同じメンバーです。いつも仲良しがやっている

図20　路地広場完成の花祭りパーティ

図21　同右

ので、他の人たちが入りにくいのかもしれません。

下町は向こう三軒両隣をはじめとする同じ隣保の人たちどうしの付き合いは濃いですが、他の隣保の人とは顔見知りだけどそんなに親しくありません。ということで、ここでも何かする時は元の同じ隣保の人に声を掛け合うことが多いようです。それと、「でしゃばったらあかん」という下町の掟があります。何かをしようと決まったら、みんなすぐに腰を上げますが、言い出しっぺがなかなか出てきません。いつもわたしが言い出しっぺで、「花祭りしようよ」とか、「次はAさんに紅茶をたててもらってお茶会したら」とかお節介しています。わたしもそろそろ子離れしなくてはなりません。

なお、Aさんは80歳半ばですが、喫茶店を長らくなさっていたそうで、「いっぺんAさんの紅茶、よばれてごらん、日本一よ」と、ここの住人からしばしば伺っていました。

後日の会合で、食事会分担グループをつくることを提案しました。すぐ賛同があり、その場で住宅番号順にA班、B班、C班の3グループの食事クラブが誕生しました。各班が自由に企画をたてて、原則として月に1回は食事会なり、お茶会なりをやっていこうということになり、協同室運営金から一部補助はでるが、参加は有料にしてその日のメニューによって当番クラブが参加費を決めるということになりました。また、当番クラブ以外の人でも自由に参加したり、手が足りなかったら声をかけて助っ人を頼むことにしようということにもうなづきあいました。

もうここまで分担を決めれば、わたしのお節介なしでも事が運ばれそうです。何かや

ろうという意志はあるが、でしゃばったらあかんという下町の掟は、ふれあい住宅という新しい大屋根の中で協同居住のリズムに変革していかなければなりません。やりたい人がやって、他人の陰口を言ったり、人の過失をあげつらうようなことはしないという、思いやりと助け合いが協同居住のハーモニーです。

秋晴れの11月3日は、路地広場の冬支度をしました。いつもより沢山の人が降りてきました。祭日だったので、普段は勤めに出ている男の参加も多くなりました。早春に咲く花の苗を植えたり、次週に予定されている「ふれあい住宅居住者交流会」の会場になっているので、見栄えよく花壇を整えました。足腰の弱い人たちはベンチに座って見ている参加です。手芸クラブは毎週の定例日にあたったので、楽笑室でクラブ活動を楽しんでいます。手芸クラブの参加者は数名で、作品は時々楽笑室に展示されます。ふれあい住宅居住者交流会にも会場に華をそえてもらうために作品の展示をお願いしました。

毎月第2日曜日は協同スペースや住宅の共用部分の大掃除の日です。11月14日は40名が出てきたそうです。参加者が少しずつ増えてきたとのことです。大掃除の後は楽笑室でお茶を飲みながらおしゃべりしてから散会です。この時、食事クラブでモーニングサービス（朝食会）をしようということが決まったそうです。毎月の第3日曜です。これについて後々、何人かから「石東さんが食事クラブつくってくれたのでよかったわ」という声を聞きました。よかった、ほんまに。わたしのお節介も手が引けそうです。

しかし、いいことづくめではありません。手芸クラブが毎週楽笑室を使って電気代がかかるという人もいます。勝手に使わんように楽笑室は鍵をかけたらええという人もいます。これに対して元気なおばちゃんはこう言ったそうです。

「楽笑室は勝手に使うようにするもんやよ。電気代がかかるという人は自分たちも出てきてつこうたらええやん。ここはそういう住宅なんやから。入居前のふれあい住宅のつどいで話おうてきたことは自由に使おうということやったやんか。石東さんがいっつもそう言うてたやんか。こんなええ部屋あるのに使わなもったいない」と。

わたし、このおばちゃんにコレクティブ応援団の団長を譲りたい気持ちです。

（4）入居一周年記念と忘年のつどい

99年12月5日、自治会主催の入居一周年記念と忘年のつどいに招かれました。わたしはコレクティブ応援団の天川佳美さんが用意してくれたドイツのクリスマスケーキを抱えて出かけました。夕方6時からの始まりですが、少し早めに行きました。夕暮れの路地広場の様子を見たかったからです。うす闇の路地広場は幻想的な風景です。ほの明るいライトに照らされた2本のケヤキと小さな数々の花が浮かび、掃き清められて水打ちされた広場は町の喧噪の中にあって静寂な空間です。広場に面した楽笑室の明かりが暖かさを放っていました。鉄筋コンクートの四角い広場が入居1年でこんなに人の温もりを放つようになったんだなあと、わたしはひととき感動して眺めていました。住人と招待された数名のサポーターを加えて50余名の席が用意されていました。今日は仕出し屋からとったお弁当にビールとジュースが添えられています。毎回毎回住人たちが大騒動してお手製の御馳走をつくるのも楽しみのひとつですが、

外からお弁当を取って準備を簡略化するのも長続きの秘訣だと思います。厨房では食事クラブの担当班を中心に幾人かがさらに加わり、おすましやお茶の準備を進めています。住人が三三五五に降りてきて席に着かれます。仲良しグループはかたまって座り、男数名はひと所に座られます。シャンペンを抜き、それを回して注いでいく間に、自治会長のあいさつが始まり、途中からもうその声がかき消される程にそれぞれでおしゃべりが始まります。この秋に入居された3、4名の新顔の方々は少し圧倒された様子です。しかし、50歳前の新顔男は年配のお父さんたちの中に若い息吹を吹き込み、ビールを回しながらそこはすぐ話が盛り上がっていました。おしゃべり、おしゃべり、おしゃべりの輪がいくつもでき、食後には香りのいいコーヒーがたてられました。

図22　入居1周年記念と忘年の集い

去年の今ごろは引っ越しの最中で、うれしい反面、新しい住まいに何がしかの不安を抱いて引っ越しした人も少なくなかったと思いますが、今日のこのいくつものおしゃべりの輪を見ていると、もう何年もみんなでここに住んでいたような雰囲気です。多くの人がここを終のすみかとして住みこなしつつあるということを感じました。

散会の前に、自治会長から悲しいお知らせがありました。

「今日、Bさんのご主人が亡くなりました。明日がお通夜で、お葬式はこの楽笑室で行います」。Bさんは学生サポーターにもなじみの方で、その場にいた学生たちはショックを受けた様子です。住人の中にはすでにこの訃報を知っていた人もおり、こんな声も聞こえてきました。

「でも、ここで1年住めたんやし、ここからお葬式出してもらえるんやからよか

ったやん」と。

楽笑室を出て自分たちの部屋に戻って行く人たちを、わたしは出口で送りました。

「今年もたくさんお世話をおかけしました。これからもずっーとよろしゅうね」

「遠いところをいつもありがとうございます」

「来年もまたお節介に来てや」という声を残して、路地広場を横切って、2人、3人、4人と連れもって帰られる後ろ姿はほほえましく、絵になる光景でした。

わたしはBさんのことを考えながら帰路につきました。入居前ワークショップの料理づくりでみごとな包丁さばきを見せてくれたお好み焼き屋のお父さんは、新しい住宅の入居を待たずして亡くなりました。真野ふれあい住宅では入居してから楽しい協同居住の思い出がないうちに3名も亡くなりました。他のふれあい住宅でも何人かが亡くなりました。震災が堪えたし、高齢やしと思ってみても、せっかくここまできたのにと思うと無念です。Bさん夫妻は入居前のふれあい住宅のつどいには皆勤で、11月半ばに出かけたふれあい住宅居住者交流会のバスツアーにもそろって参加されました。

わたしはBさんとはよく話をしたし、たまたま通りかかって仮設住宅のお宅にもおじゃましたこともあるので、お別れには参列させてもらいたかったのですが、できませんでした。お葬式の翌日、Cさんに電話したら、彼女は「よかったよ。みんな出てきてくれて」と、開口一番に言いました。

「同じ棟内にあるので、お通夜でもお葬式でもみんながすぐ顔を出せるでしょう。これが遠くの会館とかやったら出にくい人もいるけど、ここやったらみんながお別れに来てくれるでしょう。この前のDさんのご主人のお葬式もここでしたでしょう。その後、うちの主人が自分の家から送ってもらったようでええなーと言うとったよ」と話してくれました。

わたしはこの言葉こそがふれあい住宅の神髄だと思います。多くの人がここを終の住処と考えているので、DさんやBさんのお別れに参列して、自分の別れの時のことを考えていたと思います。こういう形でみんなに送ってもらえるんだと思えば、安心して今を生きられると思います。

しかし、楽笑室をお葬式に使うことに異議を唱える人もいます。堅いおっちゃんです。協同スペース運営管理規約に書かれていないという理由です。この1年の協同居住を振り返って、運営管理規約の内容を修正したり追加したりして、自分たちがしたい協同居住の方向にもっていけるようにする必要があります。

「協同居住のルールはいつでも変更できるものにしときよ」と、コレクティブハウジングがスタートしようとする初期に、安原秀さん（ヘキサ）から言われました。彼は数多くのコーポラティブ住宅の事業化の経験をとおしてアドバイスしてくれたのです。その言葉をわたしはしばしば思いだします。

最後になりますが、この久二塚西ふれあい住宅を語る時、欠かすことのできない人がいます。それは久二塚6まちづくり協議会住宅部会の桐田善夫さんです。彼もこの地の人で、震災で自宅を失い、再開発事業用仮設住宅に入居していますが、この暮れに久二塚西ふれあい住宅の隣に建設された受皿住宅に移ります。彼とは、ここにコレクティブハウジングの建設が提案さ

図23　近くの二葉小学校の児童と一緒に七夕さんを作った（1999年7月）

れ、まちづくり協議会が勉強会をはじめた96年春からのお付き合いです。彼はそれから現在まで4年近く、久二塚西ふれあい住宅の協同居住の育みに向けて周到な心くばりでサポートしてこられました。入居前の協同居住の学習・体験ワークショップでは、会場の段取り、配布資料の用意、会合のお知らせの配布や出欠届けの受付、お茶会や料理づくりの食材の購入など、ワークショップは彼いなくして続かなかったと思います。お月見のお茶会には山からススキをとってきて飾ってくれました。入居前後のとまどいの時期に、みんなが桐田さんを頼りにしました。引っ越し時に押し寄せる物品販売についての注意の呼びかけと高価な浄水器などを買わされてしまった人へのクリーンオフの手続き、入居時のゴミスティションの清掃当番表の作成、網戸がはずれた、照明器具がうまいことつかない、水道の開栓は…などなど。入居後は路地広場で近くの二葉小学校の児童と住人が一緒に七夕さんづくりをする企画や自治会へのアドバイスや情報提供など、心強いサポートが続いています。この功に対して彼は99年夏に「神戸・いきいき下町推進協議会」から、下町の活性化に寄与した活動を奨励する賞「いきいき下町賞」を受けました。

◆応援団の活動を振り返って

復興住宅プランでなく「すまい」復興のプログラムを

コー・プラン代表、阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク世話人　小林郁雄

●ハードなプランよりも重要なこと

阪神大震災1か月目、石東直子さんから「進みはじめた復興まちづくり――ハードな計画に偏りすぎているのでは」という原稿が、復興まちづくり支援ニュース「きんもくせい」に寄せられた。

「まずは住宅再建が緊急課題である。どこに、どんな住宅を、どんな手法で建設していくのか、新たな発想が必要であり、今までのまちづくりとは大きく視点が異なるはずである」と指摘し、「ひとり暮らしのお年寄りや老夫婦が仲間同士集まって住めるような住宅が市場のそばにでもできないだろうか」という具体的な寄稿であった（「阪神復興に向けて―私の提言」第3号掲載、1995年3月3日発行）。

私は、震災直後、建物被災状況調査から住宅復興計画、神戸市街地復興計画・都市計画事業地区計画、県市復興総合計画など県市の「ハードな計画」に半年間ほどまさに寝食を忘れて真剣に付き合って、計画書ができたときに「これが復興だろうか？」と思った。その時、思い出したのが石東さんのあの提案であった。ドタバタ疾風迅雷のような月日の中、心の底のほうで、ずっと感じていた何かが頭をもたげていた。「プランは今必要ない、プランナーもいらん。プロセスへの関与、プログラムこそが今重要である」という思いであった。

●下町環境の復興をコレクティブで

「被災地にコレクティブハウジングを！」という石東さんの呼びかけに、事業推進の応援団をつくることを提案したのは、95年7月末だったと思う。

阪神大震災の被災者の多数を占める高齢者・低所得者が、それまで住んでいた下町・インナーシティですごしていた生活を、いかに復旧できるかが、最大・最困難の震災住宅復興課題であった。無くなった住宅とともに、暮らしていた下町環境も、そこでの生活全体も、喪失した。住宅は復旧できても、時間をかけて育んできた生活環境は、復元できない。

そうした共に助け合って生活してきた下町の協同居住を、新しい集合住宅の中にどうしても用意していかねば、都市プランナー・生活デザイナーの資格はないのではないか。日本女子大学の小谷部育子さんが研究していたコレクティブハウジングがそれだ、今それをつくるべきであるという石東さんの提案・運動に全面

的に協力しようと思った。

「ガレキに花を咲かせましょう」という天川佳美さんの市街地緑花再生プロジェクト（95年5月スタート）と共に、市民まちづくり支援ネットワークとしての2大重要プロジェクト活動となった。

●公営事業化実現の可能性

9月中旬、応援団の本格的なミーティングと軌を一つにして始まった神戸市のコレクティブハウジング研究会の最初の集まりの時であった。コレクティブ住宅のモデルプロジェクトの供給可能性及び設定基本方針の検討が第1回の課題であった。メンバーの一人、建設省住宅局住宅整備課伊藤明子さんの「高齢者住宅プロジェクトにのせないとコレクティブハウジングの実現性は乏しい」という冷静な見通しを、なるほどと確信した。

大震災後1年を経ずして、これまで事業化はおろか行政として検討さえしていなかったまったく新しいタイプの住宅形式を公営住宅で創ろうとするのは、なんぼ非常時であるといえども我が国の行政制度・慣習から無理筋であろう。だから、公団・公社、ハウスメーカー・生協など、我々コレクティブ応援団は賃貸・分譲を問わずなんとかその可能性を探っていた。しかし、被災者向け公営住宅でのモデル建設以外、実験的にでもまともに取り組む実現実力はどこにもないのも分かってきた。

コレクティブ住宅を市街地に20戸つくるだけでも建物で2億円、土地やらなんやら全部の総事業費で5億円はかかるだろう。それだけではない、50年以上その未知の住まい方をフォローし続けないといけない。そのような経済的管理的冒険を3か月の内に、この根回し社会ニッポンで意志決定するのは至難の業である。だから、高齢社会を迎える今後の自立型高齢者住宅のモデルとして、という伊藤さんのコレクティブハウジング実現作戦しかないなぁと思った。

そうした高齢単身者に焦点を合わせた住宅としての導入は、理想的協同居住の実現をめざしてコレクティブハウジングを提唱してきた先駆者の小谷部育子さん達の想いとは外れるものであり、今後展開されるであろうコレクティブハウジングの本来持つ豊かなイメージを誤ったものにしてしまうことにもなる。ある意味では不幸な、被災地型コレクティブの誕生でもあった。

しかし、何とかコレクティブハウジングを早急に事業化するには、大量に建設される公営住宅に導入することが第1である。下町環境の復興をめざして民間事業や分譲住宅に展開していくためにも、まず公営にという想いが、コレクティブ応援団の当面の目標であった。なにがなんでも、まずひとつ実現すること、それが重要であると思っていた。

●グループ入居方式の提案

95年7月に発足した被災者復興支援会議（兵庫県知事の提唱により各界の専門家12人で構成され、被災者と行政の間に

立って、生活再建支援策などを提案・助言する臨時組織）で、メンバーの一人であった私は、毎週土曜の定例会議で毎回コレクティブハウジングの導入を主張し、応援団・研究会などの経過・情報をながし続けた。もう一つ、毎回主張していたのは、公営住宅へ連れもって入居が可能となる「グループ入居」方式の導入であり、さらには、入居者事前交流事業の必要性であった。

多くの下町長屋協同居住経験高齢者にとって、中高層で各戸が鉄扉で隔絶された集合住宅は全く未知の住宅である。かろうじて仮設住宅でなんとか覚えたユニットバスの使い方の幾層倍の新たな練習課題が待ち受けている。それにも増して、今まで見ず知らずの人たちと扉を並べて住むという状態を、どのようにして受け入れていくか。3万戸を越す新規公共住宅の早期大量建設で「住宅」は用意はできるが、どこまで「すまい」をイメージしているかは、はなはだ心許ない。そこで展開される新しい生活が、これまでの下町協同居住とは全く縁遠いものにしかならないのは、明白であった。

●コミュニティ再生への取り組み

新規供給住宅が完成するまでの仮設住宅での待機期間のうちに、私はコレクティブ応援団や神戸復興塾として、公営住宅への入居者事前交流事業を、97年の夏頃から公営住宅への入居のピークを迎える98年春まで行った。事前の見学会や入居者交流会が、新たなコミュニティ再生の基本だと思って進めたものである。それは、少なくとも新しい無機質な箱をつくることしかできない建設関係技術者のはしくれの、せめてもの「いいわけ」ではあったが、幸い震災復興基金事業に取り上げられ、ボランティアなどの活動として事前交流事業は展開された。

もうひとつ、同じ思いで進めたプログラムに、南芦屋浜コミュニティ・アート計画がある。芦屋市の南に新たに造成された人工島に作られた南芦屋浜公営住宅（県営414戸、芦屋市営400戸）で行った、暮らしのワークショップと心地よい暮らしのアートの二つの枠組みからなる計画であった。これからのコミュニティづくりのために入居予定者に集まってもらい、環境形成に関わる専門家やボランティアの一般市民も加わっての「暮らしをイメージするワークショップ」を合計7回開いた。アートを介したまちと人との関係の創造をめざす「アートワーク」は、アーティストによる「だんだん畑」など環境一体型のものと、入居者・幼稚園児によるベンチや車止めの製作など住民参加型アートが展開された。97年5月からほぼ1年間にわたる取り組みで、事前交流事業の先行モデルとして、多くの関係者が参加した。

これらの取り組みはコレクティブハウジングの事業推進と同じように、単なる住宅ではなく「すまい」を用意すべきであるという観点からは同じことだと、私のなかでは位置づけていた。

応援団の失敗――備品購入の立て替え

コー・プラン　天川佳美

●補助金申請のお手伝い

兵庫県は阪神・淡路大震災復興基金の活用で「被災者向けコレクティブ・ハウジング等建設事業費補助」という呼びかけを1997年（平成9年）に始めました。この補助金のなかに、ふれあい住宅の「協同居住空間備品整備費」補助があり、わたしたち応援団はすぐにこの補助制度の申請のお手伝いをすることにしました。

復興公営住宅としてコレクティブハウジングが作られたのは兵庫県下に県営7カ所・市営3カ所（神戸市営2、尼崎市営1）で、県営片山住宅と神戸市営真野住宅以外はふれあい協同室が複数カ所にあります。ひとつのふれあい住宅で一定の補助金が決められるのではなく、協同居住単位につき補助金が決定されます。その補助金はひとつの協同居住空間（共同リビング、共同食事室、共同キッチンなど）に20万円を限度として、みんなで活用する共同居住の備品を購入するものということでした。したがって5階建でそれぞれの階にふれあいコーナーをもっている住宅では20万円が5階分、100万円です。

98年春、すでに入居が済んでいた片山住宅は別として岩屋北町、南本町ふれあい住宅の入居に伴い最初の申請をしました。それぞれの入居者の方々に集まってもらい、備品購入の説明をし、それに助成金が補助されることを話しました。ただ助成金なので購入した備品の領収書をもって報告とし、初めてお金を受け取れるので、誰かが買い物をすることと、立て替えることが必要でした。それで買い物ができる人を決めてもらい、申請などの手続きは応援団で手伝うということになりました。

●立て替え金がトラブルのもとに

このとき応援団はちょっとミスをしてしまいました。大きな机や椅子、カーテンといった買い物は家具屋さんやカーテン屋さんに住宅に出向いていただき、注文時点で領収書だけ先に発行してもらい、支払いを後回しにしてもらうという厚かましいお願いをし、買い整えたのはよかったのですが、細かい備品を揃えるのに買い物隊の人達と一緒に出掛け、応援団がお金を立て替えてしまったのです。それらの申請をし、決定があって住民の組織に県からお金が振り込まれたのは2～3カ月後でした。そこで先に立て替えてもらった家具屋さんや応援団などに返金をしてもらいました。

けれど、その間に2次募集で入居された方々もあり、新しい入居者の方々は事情が分からず、後々までも立て替えて支

払っていたお金の返金のことで住民同士がもめる結果を作ってしまったのです。

その後、大倉山、脇の浜、久二塚のふれあい住宅入居に伴う備品購入手続きには残念ながら住民のかたがたに無理を承知で自分たちのお金を立て替えていただき、手続きに際してアドバイスをしたことはありましたが、基本的には申請も自分たちでしてもらうことにしました。

後になって振り返れば、「こんな大金を立て替えろというのは酷や」と思ったのは、わたしたちの勝手な心配だったのではなかったのかと思っています。「補助」という制度上、先にお金がでることはないのですが、この活動をとおして、親切のむつかしさを思ってしまうのです。

ふれあい住宅居住者の交流を見守って

コー・プラン　吉川健一郎

僕のコレクティブハウジング事業推進応援団としての活動は、97年の夏から真野ふれあい住宅暮らしのこん談会に参加することに始まり、それ以降、南本町、岩屋北町、大倉山、脇浜のふれあい住宅の事前交流事業、そしてふれあい住宅居住者交流会のお手伝いをしてきました。

●事前交流事業の果たした役割

事前交流事業では、入居者の顔合わせをかねた食事会と協同室にどんな備品が必要か、また備品購入の世話係を決めました。この事前交流事業で応援団の果たした役割は大きく三つあると思います。

コレクティブハウジングは日本で初めての住まい方であり、入居者は被災者で、高齢者が大半を占め、しかも必ずしも協同居住を望んで入居してきた人ばかりではなく、終の棲家が決まったとはいえ、少なからず不安を抱いて入居してきた人が多かったのではないでしょうか。そうした中、とにかく入居者がまず顔を合わせる場が設けられたことは非常に大きかったと思います。

次に、協同室にどんな備品をそろえようかということを話し合うことによって、今後の協同室の使い方をイメージできたのではないかということです。

三つめは、一部のふれあい住宅で、備品購入の際に地元商店街の人たちとの顔合わせが実現したことです。入居者同士の交流も大切ですが、本当はふれあい住宅の居住者とその地域の人たちとの交流も大事です。特に、日常生活で欠かせない買い物をする場として、地元商店街の人との顔合わせは、その後の日々の生活の安心感につながります。

●入居後の主な活動

入居後の応援団の主なサポート活動はふれあい住宅の居住者交流会です。これは、98年の7月10日に片山ふれあい住宅におじゃまして、当時できていた七つのふれあい住宅が参加してスタートし、その後ほぼ2カ月に1回のペースで各ふれあい住宅を順ぐりに訪問して開催し、2000年の2月に第9回の交流会を脇の浜ふれあい住宅でむかえました。

この交流会では、共益費の話から、食事会など行事、協同室の掃除など管理運営について、時には住民同士のトラブルなど各ふれあい住宅の協同居住の状況や抱えている課題が話題に上り、応援団だけでなく、他のふれあい住宅の人たちがお互いに意見やアドバイスを出し合い、意見交流、情報交換をしています。

この1年半の間、問題を抱えていた住宅が解決に向けて一歩歩み始めたり、あるいはうまくいっていた住宅がもめ始めたりと、交流会のたびに状況がころっと変わっていることも珍しくありませんでした。もちろんこの交流会で報告したから、物事がうまくいき始めるわけではないし、交流会で何かを決めていくわけでもありませんが、同じ時期に新しい住まい方を始めた人たちが、2カ月に1度顔を会わせていろいろ話をすることで元気づけられた人は多かったはずです。

●そろそろ住民にバトンタッチ

応援団主催の交流会はそろそろその役目は終わったのかなと思っています。今後は交流会でできたふれあい住宅同士のつながりと、ネットワークをどうしていくのかを住民の人たちにバトンを預けて、見守っていくことも大事です。これは決して手を引くということではなく、応援団は先導的な役割から後方支援のような形へと変わっていく時期にさしかかってきたと思うからです。ふれあい住宅を応援してきた者として、これからもずっと見守っていきたいという、少しは義務感も含めて、気長に構えていこうと思う今日この頃です。

また、僕はふれあい住宅の他に、南芦屋浜と灘の浜復興公営住宅団地でだんだん畑とガーデンクラブの緑の活動を応援していますが、いずれもメンバーは高齢者の方がほとんどで、どちらの団地も、当初は緑の好きな方のサークル的な活動を楽しむ意味合いが強かったのですが、次第に他の居住者との交流にも目が向けられ、みんなで楽しめるイベントやいろいろな参加の形態が模索され始めました。入居からまもなく2年、こちらもそろそろ見守っていく時期になってきたかなと感じています。

ふれあい住宅や灘の浜住宅、南芦屋浜住宅に限らず、ほとんどの復興公営住宅には初めての土地に今まで経験したことのない住まい方を始める高齢者が数多く入居しています。そうした中、入居当初に居住者同士が仲よくなるきっかけづくりをするような応援団の活動は不可欠であったと自負しています。

Collective Housing

5

ふれあい住宅居住者交流会の発足

悩んでいるのはウチだけじゃない!

◇交流会の開催とふれあいネットレターの発行

1998年春ごろから真野ふれあい住宅について悩む日がつづいていました。自治会長が電気代がかかるから、汚れるからと、協同室を自由に使わせないので、居住者たちは自室に閉じこもりがちです。居住者がみんなで集うための行事を提案しようとコレクティブ応援団をはじめ外部の支援の手を、自治会長は受け入れません。

一方、98年の2月から4月にかけて次々と五つもの県営ふれあい住宅の入居がありました。コレクティブ応援団はそれぞれのふれあい住宅の入居前後から出かけていき、協同居住をスタートさせるためのサポートをしていましたが、これだけ一度にふれあい住宅が入居すると、とても個別に丁寧に対応できません。

各ふれあい住宅の様子はさまざまで、真野ふれあい住宅のように予期せぬつらい状況に陥ったところや、岩屋北町ふれあい住宅では入居直後から人間関係がこじれて、もう自治会長が交代してしまいましたが、反対に片山ふれあい住宅や南本町ふれあい住宅のようにいいアイディアを次々と展開して、新しい住まい方にはりきっているところもでてきました。

そこでふれあい住宅の居住者が一同に会して、自分たちの状況を報告するとともに、他の住宅のいいアイディアを参考にしあえるようにと、「ふれあい住宅居住者交流会」を企画しまし

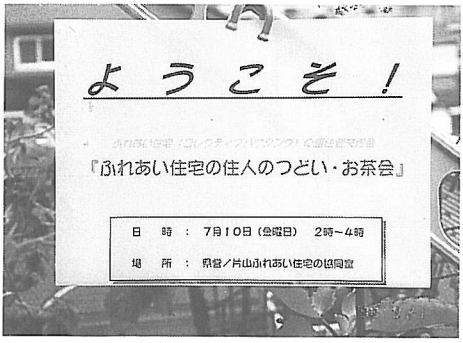


図1　ふれあい住宅居住者交流会の案内（1998年7月10日第1回交流会）

た。コレクティブ応援団が部外者として支援するよりも、ふれあい住宅の居住者どうしの交流なら、外部の支援を閉ざしているところも門戸を開き、外からの風も吹き込みやすいのではないかと考えたのです。

98年7月に片山ふれあい住宅の協同室をお借りして、第1回のふれあい住宅居住者交流会を開きました。その後はほぼ2カ月ごとに交流会をもち、99年11月に第8回を開催しました。交流会の会場は各ふれあい住宅の協同室を順繰りに回ってお借りし、住宅の見学もさせてもらっています。あと2カ所のふれあい住宅を巡ると、10カ所全てのふれあい住宅にお邪魔したことになります。

コレクティブ応援団は最寄り駅からの地図を載せた案内状を自治会役員等に送って、全世帯に配布してもらっており、毎回ほぼ全てのふれあい住宅から参加があり、多い時は50名近くの居住者になります。これに時々の多方面からの見学者があり、協同室は満員になります。

交流会では各ふれあい住宅の近況を順番に紹介してもらいます。うれしい報告内容もあれば、辛い現状報告もあります。次いでコレクティブ応援団自慢のコーヒーをたててクッキーを添えてお茶会にはいり、自由な意見交流をします。当日の様子は「ふれあいネットレター」にして、全世帯に配っています。このネットレターを読んで、「うちとこはここに書かれているようなことはない」と、抗議の電話がある時があります。また、県の管理課長からは「当日の発言を、裏付けもなしに書かれたら

より良い共同生活をするために意見交換した茶話会＝宝塚市福井町

より良い共同生活を

コレクティブハウジング　つどいに8住宅

宝塚

共同居住型の復興住宅「コレクティブハウジング」の住人らが情報交換する「茶話会」（コレクティブハウジング事業推進応援団主催）が七日、宝塚市福井町の県営宝塚福井ふれあい住宅で開かれ、八住宅の住民やボランティアら約六十人が集まった。

同会は、公営コレクティブハウジング建設の動きを同応援団（石東直子団長）からサポートしている。昨年七月から二カ月に一度のペースで開いている。

現在、コレクティブハウジングは神戸、尼崎、宝塚の三市に十カ所（計三百四十一戸）あり、世帯ごとの居住スペースとは別に居間や和室などの共有スペースがあるのが特長。

「茶話会では一自治会ごとに、集会室の光熱費負担を検討中」（尼崎・久保知）「一月一回の既婚男性のカンパを集め、共益費の足しにしている」（神戸・真野）「一一戸住宅と同じ自治会なので共益費の一部を還元してもらい、コレクティブの運営に充てている」（同・大倉山）などの報告が寄せられた。

石東さんは「住宅ごとに課題はあるが、心地よく共同生活したい、と考えておられる住民としていい方向。新しい住まい方を提案してもらえた」と話している。

図2　ふれあい住宅居住者交流会の新聞記事（神戸新聞 1999年6月8日）

図4　ふれあい住宅居住者交流会の会合風景

図3　第6回ふれあい住宅居住者交流会の日、福井ふれあい住宅の居住者は花を生けて会場準備

困る」という文句を言われたこともあります。これについて、わたしはネットレターの6号（99年9月発行）で次のように説明しています。

ふれあいネットレターの編集方針／いいことも、つらいことも、みんな載せてます！

現在、被災地で事業化された災害公営住宅のふれあい住宅（コレクティブハウジング）は、10地区、341戸になりました。

昨年の7月に「ふれあい住宅の居住者交流会」がスタートして、1年あまりになります。ほぼ2カ月に1回のペースで、会場はふれあい住宅を順ぐりにめぐって開催しています。毎回の交流会には各ふれあい住宅の居住者がつれもってこられ30名から50名の出席者があります。これに応援団やその時々の参観者などを含めて、70名以上にもなる時があります。

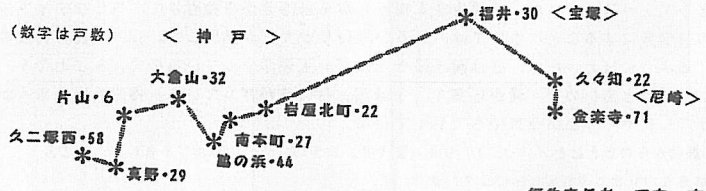
出席できなかった居住者にも、当日の交流会の様子をお知らせしたいので、ふれあいネットレターにして、全戸に配布してもらっています。

このネットレターに記載した内容について、出席されなかった居住者から「うちの住宅はここに書かれているような状況はない」という不満の声を聞くことがあります。また先回は県の課長から「一人が言った意見を確かめもしないで、裏づけなしで載せて…。事実ではないことを載せられては困る」と、不服を受けました。ふれあいネットレターのわたしどもの編集方針は、『交流会に参加しなかった居住者の方々にも、どんな意見が出ているのかを知ってもらうために、交流会で発言されたものを原則としてそのまま要約して載せています。他のふれあい住宅ではどんな状況なのかは、つらいこともいいことも含めて知り合って、自分たちの住宅の協同居住を育む参考にしてもらうためです。

わたしども応援団は、交流会で発言された内容を、一つひとつ裏づけをとってから掲載す

ふれあい住宅(コレクティブハウジング)の居住者交流会

ふれあいネットレター　8号　2000. 2. 20.



編集責任者：石東　直子

発行：コレクティブハウジング事業推進応援団

『ふれあいクラブ』をつくって、『ふれあいチケット』を発行しませんか？

2000年をむかえて、震災から５年がすぎました。震災後に被災地で誕生したコレクティブハウジング(ふれあい住宅)は、入居時期はさまざまですが、おおかたのふれあい住宅がそろそろ２年前後になります。まだ「ふれあい住宅」という名にふさわしい「共に住む」という気持ちがふれあわないで、ぎくしゃくしている住宅もありますが、４月からスタートする公的介護保険制度で不足するサポートについて考えてみませんか。

住人どうしがサポートしあって、安心した暮らしをつづけるのに、ふれあい住宅は理想的な住まい方だと思います。何と言っても、いっしょに住んでいる人たちの顔がわかっているという強みがあります。ちょっと具合が悪いとき、買い物をしてきてほしい、夕ごはんを一緒に作ってほしい、時どきのぞいてほしいなど、また、病院へ付きそってほしいなど、ちょっとだけ手をかしてもらいたい時、気がるに、遠慮せずに、知ってる人におねがいできるシステム(方法)があれば安心してくらせます。

「困ったときはお互いさま」、そう思える人たちが参加する「ふれあいクラブ」をつくって、「ふれあいチケット」を発行します。ふれあいチケットはサポートをした人が受けとって、自分がサポートをうけたい時にそれを使います。わたしは体が弱くて人のためには何も手助けできそうもないと思ってる人は特別会員として参加します。会員になっていれば、「あんた　これたのむわ」と、その人ができるサポートをだれかがたのんでくる時があるものです。

これはクラブですから、必ずしも居住者全員が参加する必要はありません。この考えに賛同できる人たちがふれあいクラブをつくって、お互いさまの行動をスタートさせてみてはどうでしょうか。10地区のふれあい住宅のクラブがネットワークができるようになれば、楽しさと力は倍増すると思います。

このようなお互いさまサポートを流通させる「温かい心の貨幣」は、今、全国的に広がろうとしています。ふれあい住宅からも輪を広げましょうよ！　　石東　直子

図５　ふれあいネットレター・８号 (2000年２月20日)

久二塚西ふれあい住宅の手芸クラブの作品

鷗の浜ふれあい住宅

入居して７カ月になった。県営住宅４棟からなる自治会から独立して、コレクティブ棟だけの自治会にすることについては、いろいろ難しかったが実現した。13,000円の共益費を下げるように努力したい。庭は園芸好きな人が一生懸命やっているので、みごとです。花の苗も買うと高いので、種から育て、今は葉牡丹の苗が育っている。掃除も好きな人が運動がてらにやろうという気持ちでやっている。

応援団からのひとこと／ まだ13戸も未入居です。次回の交流会にはおじゃまして、みごとな庭を拝見するのを楽しみにしています。

久々知ふれあい住宅

共益費のことがいつも問題になっている。共益費は10000円/月を集めていているが、赤字だと言っている。自治会長は入院見舞金を３万円と決めたが、5000円ぐらいでいいのではないかと思う。月に一度全員で意見交流会をもっているが、誰も意見を言わない。

参加者からのアドバイス／ みんなで相談して決めていくというのが第一。電気代の節約などのルールをつくって提案してみてはどうか。／自治会長がこの交流会に参加しないのがおかしい。みんなのために何かしなければと思ったら出てきて当然だ。

応援団からのひとこと／ 入居して８カ月になるのに、自治会長と考えが違うという不満の報告ばかりではなく、どうしたら今の状況が打開できるのかを、この交流会でアイデアを求めてほしい。赤字というのは、協同室の備品購入が助成額以上になって、その支払い残額を月々の共益費から支出しているからのようです。備品購入に際しても一部の人たちで決めて、住人の総意でなかったようです。

金楽寺ふれあい住宅

▲自治会が透明でない。役員会でどういう内容の話がされたのかが知らされない。 5000円/月の共益費の使途も報告がない。／▲▲居住者が全部で120名になるがうまくいっている。お金がなかったので、何もしていなかったが、コミュニティプラザのお金が83万円入ってくるので、それをいかして、地域の人といろいろ一緒にやっていこうとしている。

参加者からひとこと／ ふれあい住宅の中のことがうまくいっていないのに、地域とのことばかりやろうとしているようで、少しおかしいのではないか。

応援団からのひとこと／ 71世帯という大世帯で、自治会運営がずっとぎくしゃくしているようです。あるグループの報告はいつもうまくいっている、何も問題がないというものですが、実際はそうでないようです。自治会の運営に疑問をもっている人たちの声を聞こうとしないという声が、折にふれて聞こえてきます。協同生活の行事は自治会が統一してみんなでやるというのにこだわらず、何かやりたい人たちが好き好きにやっていけるような方向が望まれます。居住者もしっかり意志表示をして、自分たちの共益費を有効に活用してほしいです。

よ　う　こ　そ　！

ふれあい住宅（コレクティブハウジング）の居住者交流会

『第８回／ふれあい住人のつどい・お茶会』

日　時：1999年11月８日（月）２時～４時

場　所：久二塚西ふれあい住宅／楽笑室

参加者：ふれあい住宅から46名と応援団と見学者多数

今日は新しい顔ぶれの居住者が多いようです。福井ふれあい住宅は欠席です。久二塚西ふれあい住宅の協同スペースはふれあい広場とこの楽笑室があります。皆さんをお迎えするために、ふれあい広場の花の植え替えをされました。そこのコーナーにたくさん展示されている作品は手芸クラブの創作です。

真野ふれあい住宅

毎月５つの定例行事を順調にやっている。２回のモーニングサービス、昼食会、お誕生会、映画会で、いづれも地域の人の参加が多いです。うれしいことには、地域の人からこの定例行事のてつだいをしたいという申し出があった。見学者も多いので、協同生活運営支援金として見学者カンパをおねがいしており、助かっている。

応援団からひとこと／ 去年１年間のつらい日々についての報告にたいして、この交流会ではしばしば声援をうけました。４月からの新体制になって少しづつ新しい歩みがはじまり、最近の報告は明るい内容で、他のふれあい住宅へのはげみにもなっているようです。

大倉山ふれあい住宅

団地全体の自治会はややこしい状況にあるが、コレクティブは影響されず、変わらぬ日々である。各階のグループごとで好き好きにやっている。共益費は階ごとに決めており、3000円～4000円をあつめているが、うち2000円は全体の自治会におさめるので、協同活動費はその残りで各階が自由にやっている。

応援団からひとこと／ ３階は誰もが集まってきやすい雰囲気で、前回の大倉山ふれあい住宅での交流会の後には学生サポーターが10名近く招かれてニぎやかに会食をし、その席でコレクティブハウジング学生応援団が誕生しました。協同室に泊めてもらう学生もいます。

南本町ふれあい住宅

今はうまくいっていない。食事会とお茶会はやっているが、ちょくちょくトラブルもあり、全体のことを気くばりした自治会運営になっていない。

応援団からのひとこと／ 去年まではなごやかな協同居住で、ふれあい住宅の模範になっていたのに残念です。また、立て直してほしいです。自治会役員がわが物顔に仕切るようになるとつらい状況になりますね。

岩屋北町ふれあい住宅

▲1号棟とふれあい住宅の連合自治会費の世帯当たり300円/月と駐車場管理費とが合わせて約40万円貯まったので、1号棟のシルバーハウジングの人たちと一緒に有馬ヘルスセンターに旅行した。連合自治会の役員会が月に1回ある。／▲▲初めてこの交流会に参加したが、ええ雰囲気やなーと感じている。昨年12月に入居してきたが、今ある派閥の感情を取り除きたいと思っている。

応援団のひとこと／ 去年まではいい状況だったのに、今年度からちょっと冬の時代になったみたいです。仕切ってる人がいるようで、なんとか打開したいですね。

片山ふれあい住宅

日々変わりなく、今のところはこんな日々でいいかなと思っている。空室が1室あるが、協同生活を一緒にサポートできるような若い人に入居してほしいと思う。

応援団からのひとこと／ 協同生活のリズムができあがった小規模グループなので、途中から入居してくる人はとけこむまでに時間がかかると思います。入居前に2、3回みんなで食事をしたり、お茶のひとときをもったり、または体験入居などができるといいですね。

久二塚西ふれあい住宅

この12月で入居後1年になる。再開発の受皿住宅なので、入居者は昔からの知り合いが多い。下町に住んでいた人ばかりなので高齢者がほとんどなのに、他のふれあい住宅のようなシルバーハウジングになっていない。現在は80歳以上が12人おり、入院している人も数人になる。入院のお見舞金は入退院が多いので、自治会としては出していない。共益費は4000円を集め、3000円は自治会費として廊下やエレベーターの電気代など共同部分の維持管理費に、1000円はこの協同室の光熱水費と協同活動費と分けている。／第2日曜の朝は全員の掃除日で、その後お茶など飲んでいる。ふれあい広場の花や植木の水やりは、男が10名で水やり当番をつくり交代でやっている。ふれあい広場の花植えなどはみんなでしている。手芸クラブは愛好者が毎週水曜日にやっている。定期的な食事会はなかったが、おひな祭りや花祭りには盛大な食事会をした。こんど3グループに分かれて、食事グループをつくったので、定期的な食事会をやっていく。共同で新聞を2紙とっている。／神戸市の福祉によるサティライト型ミニデイサービスに、毎週金曜の10時から15時まで、この楽笑室を賃貸している。ふれあい住宅の住人も14名が登録しており、地域の人も含めたミニデイサービスが開かれている。

応援団からのひとこと／ 協同室を開放してのミニデイサービスの開催は、地域との交流にもなり、ふれあい住宅の地域への貢献のひとつのいい事例ですね。さらに協同室の賃料収入が協同生活運営支援金として活用できるのもいいですね。

コレクティブハウジング事業推進応援団／事務局：コー・プラン ☎ 078-842-2311
（ 石東 直子　小林 都雄　天川 佳美　吉川 健一郎 ）

図6　ふれあい住宅居住者交流会のバスツアー、神戸市フルーツフラワーパークで大バーベキュー大会（1998年11月）

るようなことはいたしません。当日発言されたことは、どれもこれも現実だと思います。発言者の話し方や当日出席の方々の様子、さらに以前からの情報などから作り話でないことは察知できます。

しかし、出席されなかった居住者から異議があるのは納得できます。異なる考えをお持ちの方々が協同居住を育もうとしておられるのですから。次回はぜひ出席して意見を言ってくださいとお願いしています。

しかし、しかしです。行政からわたしどもの活動内容について不満を言われる筋合いはありません。わたしども応援団は行政に頼まれたわけでもなく、自律した活動をしているのですから。そしてこの交流会がきっかけになり、ふれあい住宅どうしの自律した交流も始まろうとしています。

（「ふれあいネットレター」6号　99年9月発行より）

交流会には毎回楽しみにつれもってこられる方々もあり、回を重ねるごとに他のふれあい住宅の人たちとの交流の輪が結ばれ、時には電話で相談しあうこともあるようです。99年の11月には「ふれあい住宅大交流会／日帰りバスツアー」として、大型バスを3台連ねて、兵庫県立人と自然の博物館の見学と神戸フルーツフラワーパークでの神戸牛バーベキューを楽しみました。100名を超す参加者があり、大好評でした。

交流会はあと2地区のふれあい住宅を巡ると、10地区全てのふれあい住宅にお邪魔したことになります。この後は、各ふれあい住宅の居住者が自律したネットワークをもち、ふれあい住宅連絡会のようなものを立ち上げて、コレクティブ応援団は後方支援にまわりたいと考えています。そのための準備を少しずつ始めています。

災害復興公営ふれあい住宅(コレクティブハウジング)紹介シート　1号

発行：コレクティブハウジング事業推進応援団（1998. 9. 30. 発行）

兵庫県営片山ふれあい住宅／1997年8月入居

住宅の外観・北西には高取山が見える

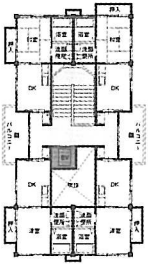
所在地	神戸市長田区片山町１丁目
戸　数	高齢者単身用　６戸(29㎡)
構造／木造２階建　敷地面積／323㎡	

１階に南側の庭に面して協同室(53㎡)がある。オール電化方式を導入。
全戸シルバーハウジングで、生活援助員が巡回している。

南側の小さな庭

1階

2階



1階にあるこじんまりした協同室

0　4　8m

災害復興公営ふれあい住宅(コレクティブハウジング)紹介シート　2号

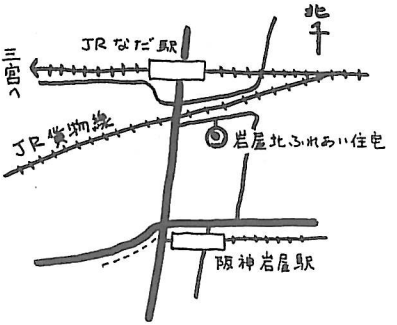
発行：コレクティブハウジング事業推進応援団（1998.11.15.発行）

兵庫県営岩屋北町ふれあい住宅／1998年2月入居

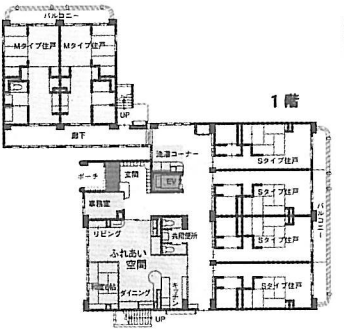
住宅の外観・1階の右が協同室／左が共同玄関

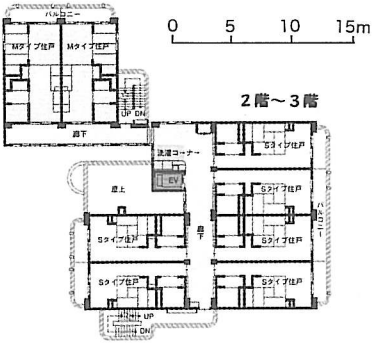
所在地	神戸市灘区岩屋北町４丁目
戸　数	高齢者単身用(1DK/34㎡)16戸 高齢者家族用(2DK/43㎡) 6戸

ふれあい住棟(RC造３階／22戸)と別棟の一般住棟(RC造８階／44戸)による団地。ふれあい住宅の全戸と一般住棟の28戸がシルバーハウジング。
ふれあい住宅の協同スペースは１階に全体の協同室と各階に談話コーナーがある。一般住棟には団地全体を対象にしたコミュニティプラザがある。



協同室前の庭でバーベキュー





災害復興公営ふれあい住宅(コレクティブハウジング)紹介シート　3号

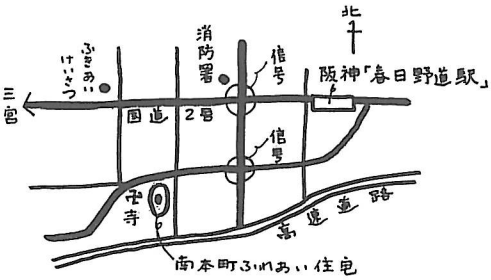
発行：コレクティブハウジング事業推進応援団（1999. 2. 5. 発行）

兵庫県営南本町ふれあい住宅／1998年２月入居

住宅の外観／右の棟がふれあい住宅

所在地	神戸市中央区南本町通４丁目
戸　数	高齢者単身用(1DK/33㎡) 19戸 高齢者家族用(2DK/44㎡と45㎡)　8戸

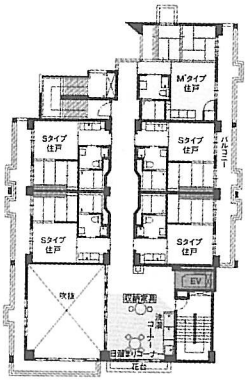
ふれあい住棟(RC造５階／27戸)と別棟の一般住棟(RC造７階／48戸)による団地。ふれあい住宅の全戸と一般住棟の36戸がシルバーハウジング。
ふれあい住宅の協同スペースは１階に全体の協同室と各階に日だまりコーナーがある。一般住棟に団地全体を対象にしたコミュニティプラザがある。



たまには大家族のように集まって食べよう

1階

2階



3階～５階は２階の吹き抜け部に２ＤＫ住戸がある

0　5　10　15m

災害復興公営ふれあい住宅(コレクティブハウジング)紹介シート　4号

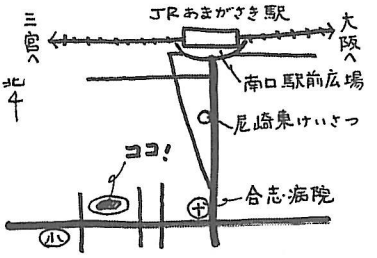
発行：コレクティブハウジング事業推進応援団（1999.4.5.発行）

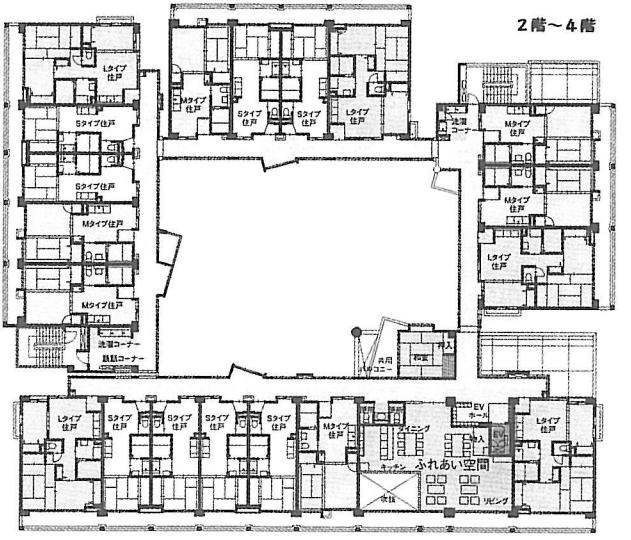
兵庫県営尼崎・金楽寺ふれあい住宅／1998年4月入居

住宅の外観

所在地	尼崎市金楽寺町１丁目
戸　数	高齢者単身用(1DK/34㎡) 32戸 高齢者家族用(2DK/43㎡) 22戸 一般世帯用　(3DK/57㎡) 17戸

ふれあい住棟(RC造４階／71戸)と一般住棟が２棟(県営住宅 RC造10階／50戸、市営住宅RC造10階／120戸)および集会所棟がある大規模団地。シルバーハウジングはふれあい住宅の高齢者単身用32戸で、生活援助員が平日の昼間は常駐している。
ふれあい住宅は各階ごとのコレクティブグループで、１階は14戸、２～４階はそれぞれ19戸のグループである。各階ごとに大きな協同室があり、１階にはさらにシルバーハウジングの生活援助員室、生活相談だんらん室および地域に開放するコミュニティプラザ(集会室)がある。





１階はロの字型の建物の東部分がコミュニティプラザ、生活援助員室、生活相談だんらん室、電気室、駐輪場など。
各階のエレベーターホールに下足箱があり、そこで履き替えるという変わった設計である。

災害復興公営ふれあい住宅（コレクティブハウジング）紹介シート　5号

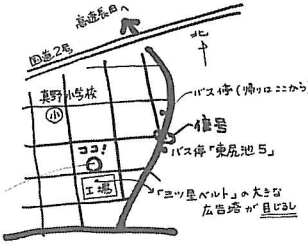
発行：コレクティブハウジング事業推進応援団（1999.6.5.発行）

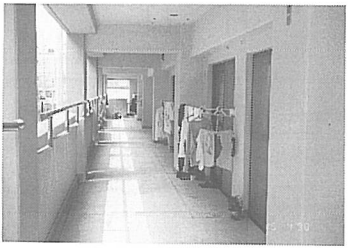
神戸市営真野ふれあい住宅／1998年1月入居

住宅の外観

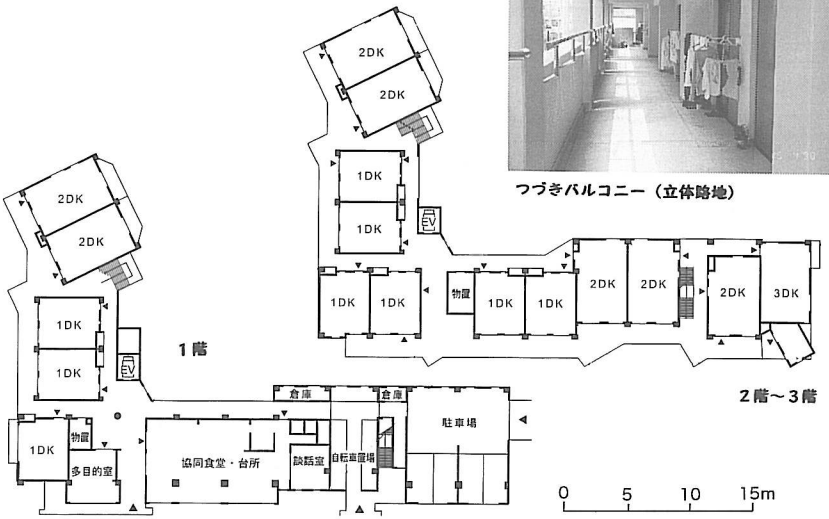
所在地	神戸市長田区浜添通３丁目
戸　数	高齢者単身用（1DK/35㎡）15戸 高齢者家族用（2DK/45㎡）6戸 一般世帯用┬（2DK/45㎡）6戸 　　└（3DK/55㎡）2戸

ＲＣ造３階建て、29戸の単独棟。
うちシルバーハウジングは21戸で、生活援助員さんが近くの地域福祉センター内のディサービスセンターから平日の昼間は巡回派遣されている。
１階に大きな協同室（約200㎡）があり、２階と３階に出会いのコーナーと路地空間（つづきバルコニー）、屋上に菜園、各階に各戸単位の集合物置などがある。
協同室の一部に床暖房スペースがあり、太陽光発電によって協同光熱費の電力の一部をまかなっている。





つづきバルコニー（立体路地）



災害公営ふれあい住宅(コレクティブハウジング)紹介シート　6号

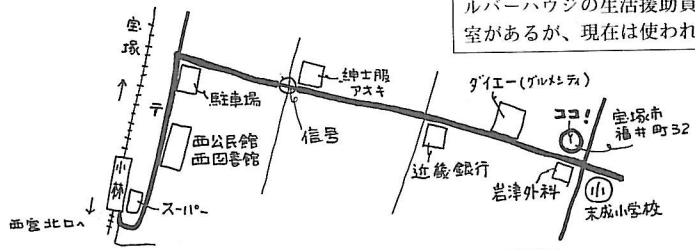
発行：コレクティブハウジング事業推進応援団（1999. 6. 5. 発行）

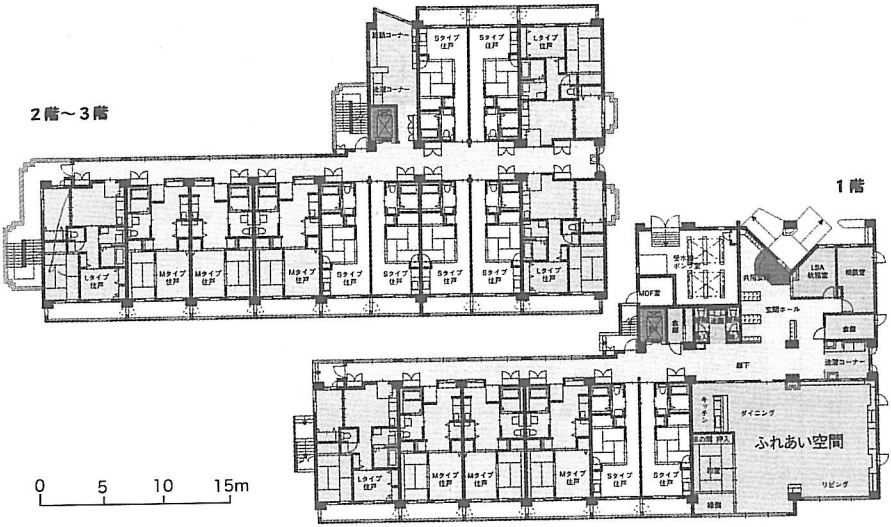
兵庫県営宝塚・福井ふれあい住宅／1998年4月入居

住宅の外観（県の完成予想図のパンフレットから）

所在地	宝塚市福井町３２
戸　数	高齢者単身用(1DK/34㎡) 14戸 高齢者家族用(2DK/43㎡)　9戸 一般世帯用　(3DK/56㎡)　7戸

ＲＣ造３階て、30戸の単独棟。
うちシルバーハウジングは23戸で、生活援助員さんが平日の昼間は巡回派遣されている。
１階に全体の大きな協同室があり、各階に談話コーナーがある。さらに１階にシルバーハウジの生活援助員室、生活相談室があるが、現在は使われていない。





災害公営ふれあい住宅（コレクティブハウジング）紹介シート　7号

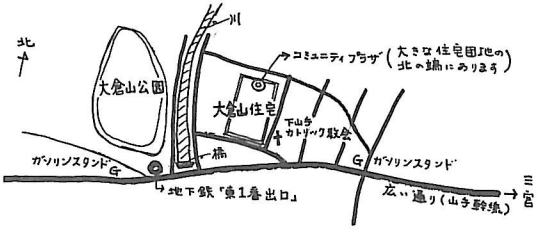
発行：コレクティブハウジング事業推進応援団（1999. 9. 6. 発行）

兵庫県営大倉山ふれあい住宅／1998年4月入居

住宅の外観（1階～4階がふれあい住宅）

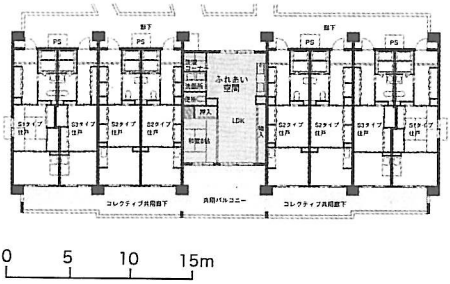
所在地	神戸市中央区下山手通7丁目
戸　数	高齢者単身用（1DK/31～35㎡） 32戸　8戸単位のコレクティブ

大規模団地（約500戸）の中のＲＣ造14階建て住棟の１～４階部分がふれあい住戸。ふれあい住宅は階ごとの８戸単位のコレクティブグループが４グループある。
32戸の全戸がシルバーハウジングで、団地内の他のシルバーハウジングと合わせて、生活援助員さんが平日の昼間は常駐している。
８戸はつづきバルコニーでつながっていて、その中央に広いバルコニーに面して約50㎡強の協同室がある。
団地全体を対象としたコミュニティプラザ（集会室）がある。



８戸グループの協同室（３階）

１階～４階



４階の協同室前のテラスはみごとなガーデニング

災害復興公営ふれあい住宅（コレクティブハウジング）紹介シート　8号

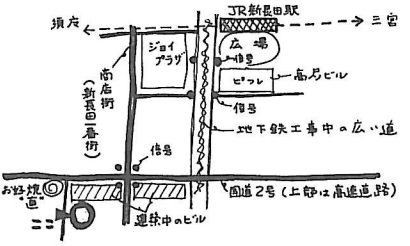
発行：コレクティブハウジング事業推進応援団（1999. 11. 8. 発行）

神戸市営久二塚西ふれあい住宅／1998年12月入居

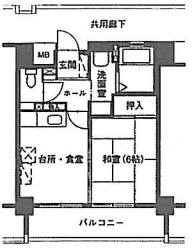
住宅の外観（棟間の２階に路地広場／東棟の２階に協同室）

所在地	神戸市長田区腕塚６丁目
戸　数	小家族向け 58戸 １ＤＫ（36㎡） 45戸 ２ＤＫ（48㎡） 13戸

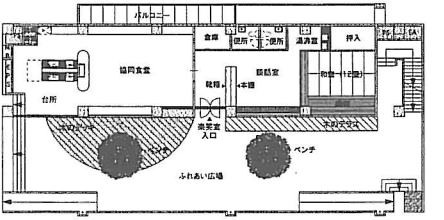
ＪＲ新長田駅南地区震災復興第２種市街地再開発事業の受皿住宅（従前居住者用賃貸住宅）。ＲＣ造７階と５階の２棟が向かい合っており（構造的には一体）、棟間の２階レベルは人工地盤でふれあい広場（路地広場 300㎡）があり、路地広場に面して東棟の２階は協同室（楽笑室＝台所、食堂、談話室、和室＝200㎡）がある。西棟は１階が店舗、２～５階が住戸、東棟は１階が駐輪場、２階が楽笑室、３～７階が住戸である。隣接して1999年12月に受皿住宅の13階建て（店舗と99戸の住宅）が竣工予定だが、これはふれあい住宅ではない。



路地広場



１ＤＫの住宅平面図



楽笑室（協同室）とふれあい広場（路地広場）

0　5　10　15m

災害復興公営ふれあい住宅(コレクティブハウジング)紹介シート　9号

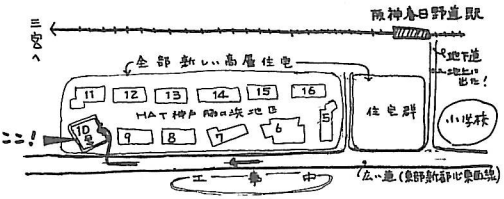
発行：コレクティブハウジング事業推進応援団（2000. 2. 20. 発行）

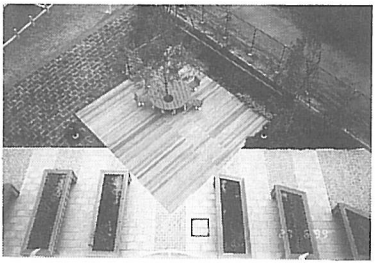
兵庫県営脇の浜ふれあい住宅／1999年4月入居

住宅の外観（裏の庭側）

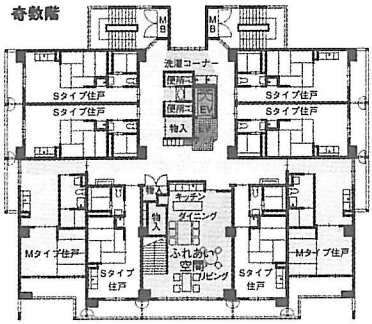
所在地	神戸市中央区脇浜海岸通３丁目
戸　数	高齢者単身用(1DK/35㎡) 32戸 高齢者家族用(2DK/45㎡) 12戸

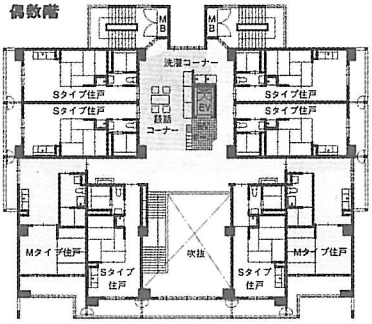
神戸東部新都心・HAT神戸の大規模団地の中のＲＣ造６階建て住棟。２層１グループのコレクティブ単位が３グループあり、奇数階に協同室を配置し、吹き抜けの協同室によって上層階と一体感をもつようにした設計。しかし実際は44戸が全体でひとつのコレクティブとして協同居住を運営している。全戸がシルバーハウジングで 生活援助員さんが巡回している。





協同室につづく庭（屋外テーブルと立体花壇）





0　5　10　15m

災害復興公営ふれあい住宅（コレクティブハウジング）紹介シート　10号

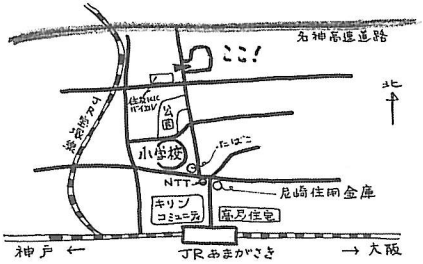
発行：コレクティブハウジング事業推進応援団（2000. 5. 15. 発行）

尼崎市営久々知住宅／1999年３月入居

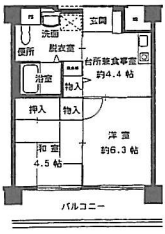
住宅の外観／右がコレクティブ棟

所在地	尼崎市久々知３丁目
戸　数	高齢者単身用（1DK/31㎡）19戸 高齢者家族用（2DK/39㎡）　3戸

敷地内にコレクティブ棟の４階建と一般棟５階建（30戸で1DK～3DK、30戸）の２棟つづきの建物と、別棟に集会所がある。コレクティブ棟は１階に協同室、共同風呂およびLSAの生活相談室があり、３階と４階にも談話室がある。
コレクティブハウジングは全戸がシルバーハウジングで、生活援助員さんが常駐している。



1ＤＫ住戸



2ＤＫ住戸

住宅棟の配置図

写真と図面は「尼崎市住宅入居申込案内書」より転載

◉解題

実験的プログラムの意味と課題

日本女子大学家政学部　小谷部育子

【コミュニティの力を育む住まい】

あれから5年の月日が流れた。

大災害の中で住民の手による地区の全焼阻止や人命救助、避難所生活における被災者同士の助け合いなど、ボランティアの活躍と共に、いざというときの生活者やコミュニティの力が注目された。このことは、命の安心と我がまちへの愛着を育むまちづくりこそが真の防災まちづくりであることを教えてくれた。しかしながらその頃、大量・緊急の仮設住宅供給が始まった被災現地では、従前の居住地や助け合い仲間の存在を無視して仮住居をくじ引きで割り当てていたのである。現地から聞こえてくる、家族を、家を、仕事を失って悲しみ、憤り、無力感を抱いたまま生活再建の見通しの立たない被災者に対する仮設住宅の用意のされ方、割り当てられ方に疑問を感じたわたしは、1995年3月17日の神奈川新聞のコラムに「地域ごとに、あるいは希望するグループごとに、わが家、わがまち復興の夢が語り合える仮設タウンの建設・供給」を提案している。コミュニティが持っている住民同士の相互扶助による自立のエネルギーを奪い取らないこと、被災住民のエンパワメントこそ被災者の生活再建はもとより、これからの防災まちづくり、高齢社会のまちづくりの実践の第一歩であると考えたからである。

あとになって聞いたことだが、ちょうどこのころ石東さんは仮設住宅の申し込み手続きを手伝うボランティア活動をしていて、特に高齢者が住みなれた町や人づきあいから離れて暮らすことの深刻な不安をひしひしと感じ、被災地にコレクティブハウジングの必要性を思いついたということである。その後仮設住宅での孤独死の多発や、共用空間や設備を持ったケア付き地域型仮設住宅の居住環境としての評価が明らかになるにつれ、コレクティブハウジング推進応援団の活動は行政にも注目され、兵庫県、神戸市がまず実験的導入をすることになったわけだ。

【被災地復興の公営コレクティブハウジングという選択】

欧米で展開されている現代的コレクティブハウジング（コウハウジングも同義）は、「それぞれの自由で自立した生活を前提

に、生活の一部を共同化したり豊かな共用の生活空間や設備を使い合うことによって、より便利で合理的で、相互啓発と助け合いのある自分らしい暮らしができる」と考える人たちが主体的に取り組む住まいづくり、暮らしづくりである。ライフスタイルの一選択肢であり、そのような住ニーズにあった集住の一形態である。食事や掃除などの生活サービスやリクレーション施設を持ったサービスタイプのコレクティブハウジングは、民間企業による企画住宅としてはあり得るが（98年2月入居、東京北区にあるサンセゾンⅠはこのタイプ）、欧米型のコレクティブハウジングが現在の公営住宅法のなかで、しかも高齢者のみを対象としては成り立ち得ない、というのがわたしの主張である。

しかし一方、超高齢社会の縮図である多くの中高齢単身者、高齢者のみの夫婦、老親介護の世帯などが、再び再建された地域に戻るときに、孤立することなく、集合して励まし助け合いながら地域の助けも借りて、自立生活を築いていけるような可能性を持った住宅供給が求められていたことは確かだ。意図的に計画されたものではないが、都市の下町に残る連帯感のあるコミュニティは、あるいは質的にコレクティブタウンと言ってよいかもしれない。石東さんたちの活動の意図は下町居住の再評価であり、地域の人たちが支える我がまちのコレクティブハウスであったのだと理解している。そのような視点で被災地の公営復興コレクティブハウジングの取り組みを遠隔地応援団の一人として意見を述べてみたい。

【「ふれあい住宅」の可能性】

まず、早くから応援団の研究会に参加した神戸市の取り組み『真野ふれあい住宅』の場合は、公営住宅の枠組みの中とはいえ、曲がりなりにも参加型で建築設計をすすめるなど画期的であった。震災前から住民参加のまちづくりで鍛えられた住民や支援する専門家と行政の信頼関係が可能にしたプロジェクトだといえる。現在はシルバーハウジングと一般市営住宅の管理運営システムの枠組みのなかで、居住者も市もとまどいながら試行錯誤の運営をしているようだが、建築の空間計画が地域に開かれ地域に支えられるコレクティブハウスとしての可能性を秘めている。

県営の「ふれあい住宅」は、建築計画的には小規模の片山住宅と民間集合住宅を転用した大倉山住宅を除いてはどうしても施設的なイメージが拭えない。入り口で靴を脱ぐのが大きな原因であるが、病院のような廊下や実際の利用イメージを描きにくい共用スペースのインテリアデザインも住宅としての細やかさに欠けている。一方、入り口で靴を脱ぐのも共用スペースの存在も大なり小なり居住者に受け入れられ、一般シルバーハウジングにないインパクトを与えていることは確かだ。共用スペ

ースの利用や運営についてのトラブルがあるにしても居住者間のコミュニケーションの核があるわけで、将来的にはコミュニティ形成型のシルバーハウジングのプロトタイプとして積極的に評価したい。LSAがコミュニティ・コーディネーターとしての役割を担ったり、あるいは、応援団のようなNPO組織が行政から委託され、または居住者組織から依頼されて共用室の運営やコミュニティ活動を支援することで、より自立生活を可能にする新しいタイプのシルバーハウジングとしての可能性を持っている。他自治体が高齢者対応住宅として導入を考えるとき、継続的なコミュニティ活動支援の仕組みが欠かせないことを念頭におくべきである。

久二塚西ふれあい住宅は再開発の受け皿住宅で、設計段階から石東さんがコーディネーターとしてかかわり、居住者参加で新たに整備された被災者用コレクティブハウジング建設補助を最大限に活用したプロジェクトである。共用スペースの空間デザインにも、入居後の共用室運営にも石東さんと居住者の思い入れが伺われ、災害復興にかかわりなく、公営住宅の建て替えや従前居住者がいる再開発事業に大いに参考になる事例である。

【「ふれあい住宅」の成長のために、そして実験的事業の役割】

最近も石東さんからは時折の電話とふれあいネットレターが届く。震災直後から熱い思いを語り賛同者と共に運動し、思いの外大規模に拡がってしまった災害復興公営コレクティブハウジングの誕生にとまどいつつも、未熟児として誕生せざるを得なかった「ふれあい住宅」の養育に、終始並々ならぬ奮闘をしてきた石東さんはじめコレクティブ応援団は、まさに「ふれあい住宅」の育ての親といえる。特に、地域との連携が希薄な県営を含む10カ所になった公営「ふれあい住宅」のネットワークづくりは、今後の「ふれあい住宅」の成長にとって重要な布石をつくる仕事であったと言える。「ふれあい住宅」同士が今後も当番制ででも交流会を続けていければよいが、あるいは各「ふれあい住宅」が会員として登録し、交流事業や運営相談を応援団が担う「ふれあい住宅」支援センターとして機能する道も考えられる。どのように展開するのか興味深い。

また、大量に緊急を要する復興公営住宅供給のなかで、新たな住宅施策の歴史を開く公共の実験的な取り組みとしてもおおいに評価すべきであろう。実験である以上、数年にわたり改善工夫を重ねつつ、目標と手法（建築計画と設計、入居者募集・選択と途中入退去システム、共用室の管理運営など）について居住者の生活実態をとおして検証し、その結果をフィードバックする必要がある。わたしも委員として参加した「ひょうごコレクティブ・ハウジング研究会報告書（平成9年3月、兵庫県都市住宅部）」では、潜在的需要があると思われるコレクティ

ブ・ハウジングの一般化に向けて、公的住宅および民間住宅における位置づけ、事業誘導・推進体制の在り方などについて、中・長期的課題を整理している。自立的・相互扶助的な住環境を形成する居住者の主体的参加によるコレクティブハウジングは、地域のコミュニティ資源でもある。復興公営住宅として先駆的に取り組んだ自治体として、居住者グループ主導、公共支援の仕組みを実現すべく引き続きパイロット的役割を担うことを期待している。

【再度、コレクティブハウジングとは】

最後にここで再度、コレクティブハウジングの基本的概念を記しておきたい。

コレクティブハウジングとは、①私的住戸群に、②住戸の延長としての共用空間が組み込まれた集合住宅で、③居住者が主体的に住運営に参加・協働することで、社会的にも精神的にも自立と支え合いのある住環境を創出する、④居住者自身が選択する住まい方である。従って、⑤老若男女、誰にも開かれた住形態である。

③については、居住者による協働を伴う〈協働モデル〉と、生活上の支援や共用空間の管理・運営を外部サービスとして利用する〈サービスモデル〉、およびその中間の〈複合モデル〉がある。

いずれにしても、④は前提であるから、入居者自身の希望するコレクティブハウスについての十分な理解と、動機、主体的参加が欠かせない。また、特に〈協働モデル〉が柔軟に持続的に機能するには、入居者グループの計画・設計・運営システムづくりへの参加が欠かせない。

現代的コレクティブハウジングの先進国スウェーデン、デンマーク、オランダでは、多くの事例が公的な賃貸住宅で〈協働モデル〉であるが、コーポラティブ住宅、ディベロッパーによる賃貸住宅、都市型、郊外型など多様な展開がみられる。アメリカでも1990年代以降、コウハウジングとして全米に活動が広がりを見せている。

わたしたちは、どのような日本型コレクティブハウジングを創造していくのだろうか。

おわりに

震災から5年余りが経ちました。ふれあい住宅の発想から発芽へ、そして発育期へと、応援団という立場で関わってきました。この間、ふれあい住宅の入居者たちにとっては、震災直後の避難所生活、仮設住宅の暮らし、未知なるふれあい住宅への入居と新しい住まい方のスタートへと、いつも多くのボランティアや押し寄せるマスコミや視察者たちに囲まれて、一種の昂揚した気分の中で時が流れていきました。

これまで少しがむしゃらに走ってきたわたしは、ふれあい住宅のこれからの日々の展開にむしろ関心をよせています。この本を意識的に手に取られた方々も多分そう感じておられることでしょう。サポーターの手を離れて、居住者たちが織り成すこれからの日々が、「震災で生まれた新しい住まいは、21世紀の住まい方のモデルのひとつになるのか」という問に答を示してくれることになるでしょう。

わたしたちコレクティブ応援団はそろそろ後方支援にまわり、居住者の自然体の生活展開を見守っていこうとしています。「よう分からんと入居したけど、わたしはこんな暮らしがええわ」という人たちが住むようになればいいなと思っています。言い換えれば、「わしはこんな住まい方は向かんわ」という人が、他へ移り住めるような受け皿住宅が保証されるようなことも必要です。さらに、年月の経過とともに生じてくるであろうさまざまな課題については、個別に悩むのでなく、ふれあい住宅の居住者たちが共通の課題として協同で対応策を考えたり、求めていけるように、「ふれあい住宅連絡会」のような居住

者の自律したネットワークができることを願っています。

今や時代のニーズとして全国各地で、仲間と集まって暮らすための動きが出てきました。血縁以外の仲間と集まって暮らすことの安心感と快適性を求める人たちです。すでに実行されている事例もいくつかあります。新しい住まい方にはそれを求める人たちの暮らし方のイメージの共有が大切で、共住を指向するグループはその助走期間＝醸成期間を大切にして準備されているようです。

一方、各地で進められている密集市街地の整備などによって、70歳代、80歳代になって初めて鉄筋コンクリートの共同住宅に住むことになる人たちも少なくありません。そんな人たちに丁寧に、継続して、新しい住まい方のイロハをサポートしていくことが不可欠であるということを、被災地の災害復興住宅の入居後の状況が実証しています。ハードの住宅建設とソフトの居住サポートが備わってはじめてほんまもんの住宅供給であると言える時代にきています。

わたしたちコレクティブ応援団の活動に弾みがつき、中途半端ではやめられへんという責任感を与えてくださったのは、市民まちづくり支援基金としてＨＡＲ基金（阪神・淡路ルネッサンス基金）に寄付を寄せてくださった全国の方々です。感謝いたします。コレクティブ応援団の活動に直接参加して笑顔と手を貸してくれた多くの仲間のみなさん、ありがとうございます。本書の執筆にあたっては、粘り強くお尻をたたきつづけてくださった学芸出版社の前田裕資氏と温かな越智和子さんにお礼を申し上げます。

２０００年７月

石東直子

●著者紹介

石東直子（いしとう・なおこ）

大阪市生まれ神戸育ち。都市計画プランナー。技術士（建設部門、都市および地方計画）。1965年大阪市立大学家政学部住居学科卒業、67年神戸大学大学院修士課程修了（都市計画専攻）。㈱市浦都市開発建築コンサルタンツ等に勤務後、84年から2年間、中国天津大学大学院と華中理工大学大学院で都市・住宅環境整備等の講義。86年石東・都市環境研究室を開設、現在に至る。

・主な業績／神戸市しあわせの村の基本構想・基本計画に参画、神戸市をはじめ多くの自治体の地域高齢者計画やシルバーハウジングプロジェクトの計画策定、多くのニュータウン開発計画・市街地整備計画に参画。

・震災後の復興まちづくりの主な支援活動／西宮復興まちづくり支援ネットワークを組織し、西宮市の被災状況調査、地区別復興まちづくり計画案の提案。西宮安井地区まちづくり協議会を支援。コレクティブハウジング事業推進応援団を組織し、復興公営住宅での事業化に向けての支援。

・主な著書／「現代中国の生活・住居・街」（龍渓書舎、1979）
「好きやねん中国　わたしの中国　喜・怒・楽日記」（学芸出版社、1987）
「新時代の都市計画5　安全・安心のまちづくり」共著（ぎょうせい、2000）

コレクティブハウジング事業推進応援団（略称＝コレクティブ応援団）

震災の年95年夏に、石東直子が小林郁雄とともに発案し設立した専門ボランティアグループ。都市計画プランナーや建築家、医師や福祉関係者、行政の職員の外にコレクティブハウジングに関心をもつ多分野の人たちが参加している。被災地でのコレクティブハウジングの事業化に向けて、自治体への提案、計画への参画から、その後の事業の展開に沿って各段階で必要とされるサポートに対して支援活動を続けている。その支援活動の内容は、普及・情報提供のための公開ミーティング、仮設住宅を巡っての出前説明会、入居前の協同居住の学習やトレーニングの企画運営、入居後の居住者の協同居住のためのサポートやコレクティブハウジング入居者交流会の開催など多様である。

現在の事務局は団長の石東直子と小林郁雄、天川佳美、吉川健一郎の4人。また、コレクティブ応援団の応援団であるコレクティブ学生応援団も継続的に組織されている。

コレクティブハウジング
ただいま奮闘中

二〇〇〇年八月三〇日　第一版第一刷発行

著　者――石東直子＋コレクティブハウジング事業推進応援団
発行者――京極迪宏
発行所――株式会社 学芸出版社
京都市下京区木津屋橋通西洞院東入　〒600-8216
電075（343）0811　FAX075（343）0810

印刷所――創栄図書印刷　製本所――山崎紙工　装丁――上野かおる

R 〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の全部または一部を無断で複写複製することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（Tel03・3401・2382）にご連絡ください。

ISBN4-7615-2239-9　Printed in Japan
© 石東直子，コレクティブハウジング事業推進応援団，2000

好評既刊

上田耕蔵著
地域福祉と住まい・まちづくり
ケア付き住宅とコミュニティケア
四六・一九二頁・一七〇〇円＋税

高齢者に元気に暮らして貰うにはどうすれば良いのだろうか。医療や介護だけでは人は救えない。必要なのは自立できる住まいと、噂話ができるコミュニティ。高齢者の心の支えだ。被災地で生活支援に取り組んだ病院長が、さまざまに試みられたケア付き住宅やコミュニティケアの経験をもとに熱く語る福祉のまちづくりの未来像。

復興市民まちづくり支援ネットワーク編
震災復興が教える まちづくりの将来
阪神・淡路大震災
A5・一六〇頁・二五〇〇円＋税

高齢社会における安全・安心まちづくり、都市計画・まちづくりにおける住民参加、専門家やネットワークの役割など、10年後の日本の避けられない課題に、突然、大規模に直面した被災地での取組みを、現場から専門家が報告する。区画整理・再開発等事業地区、住民の自主的な取組み、専門家のネットワークなど、20の事例を収録。

田中直人著
福祉のまちづくりデザイン
阪神大震災からの検証
A5変・二〇八頁・二四〇〇円＋税

阪神大震災を経験した障害者、彼らを支援してきた関係者の生の声をもとに、福祉のまちづくりの問題点を抽出し、今後のまちづくりの課題となるべきデザイン方法を提示した。建築、土木、医療、社会福祉等の領域の研究者や、行政の多くの同じ志を持つ人々と連携し、「福祉のまちづくり」をトータルに充実させるための提言の書。

タウンモビリティ推進研究会編著
タウンモビリティと賑わいまちづくり
高齢社会のバリアフリー・ショッピング
A5変・二〇八・二三〇〇円＋税

タウンモビリティとは、高齢者や障害者に電動スクーターや車椅子を貸出し、商店街や街なかを自由に楽しんでもらう外出支援のプログラムだ。介護者の負担軽減、商店街の活性化、さらにはボランティアとお年寄りの世代間交流が進められる簡単バリアフリーとして、まちづくりの面から大いに期待される。我が国導入の動きを初めてまとめた。

大戸徹・鳥山千尋・吉川仁著
まちづくり協議会読本
感性とボランティアのまちづくり
四六・一九二頁・一八〇〇円＋税

まちづくり協議会とは一体何か、誰が参加するのか、会則や会費はどうするのか、議員は参加できるか、困った参加者対策は、協議会＝地区の合意か、ニュースやアンケート、まちづくり計画の作り方、計画作成後の活動をどう考えるか、といった数々の疑問に、実例を交えながら答える、住民参加のまちづくりのためのハウ・ツー本。